こうなった。～世界を作ったら～

彼是

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

あ・・ありのまま起こった事を話すぜ・・

世界が滅んでいた

俺は遠い昔に気づいたらこの世界に居たんだ。

混ぜ師と言う明らかに錬金術をスキルで持っていた俺はやりすぎた。

煩わしくなったので自分の世界を作り引きこもったんだ！

３０００年間外に出なかったので超！久し振りに外に出たら世界が滅んでいた。

俺も何を言ってるのさっぱりだ・・・

まさか引き篭っていたら世界が滅んでいたなんて・・・

どうする？俺・・・

１７話からの古代編で主人公交代します。

仕事行きたくない

そう思っていつもの道を歩いていたら見知らぬ小道を見つけた。

試しに通ったら森に居た。

森に一人。どうしよう・・・

目　次

0章　世界再生
第一話　脱引きこもり ―― 1
第二話　白と黒 ―― 6
第三話　植物とゴーレム　～作る一号待機の二号～ ―― 11
第四話　種族を作る　オマケあり ―― 16
第五話　三神 ―― 20
第六話　二号のその後　三神の仕事 ―― 24
第七話　魔物と幕間 ―― 29
第八話　魔石と魔結晶 ―― 32
第九話　結界と二号村　ついに・・・ ―― 36
第十話　アルファ　ベータ ―― 41
第十一話　最終確認　前編 ―― 45
第十一話　最終確認　後編 ―― 49
幕間　エルフ ―― 54
幕間　望まぬ来訪者 ―― 59
幕間　リザードマン ―― 67
第十二話　クロス旅立ち。 ―― 77
1章　古代時代
古代編スタート　第一話　分岐点 ―― 82
第二話　ミーナとの会話　前半 ―― 89
第三話　ミーナとの会話　後半 ―― 95
第四話　分岐点（第一話）　裏 ―― 99
第五話　ミーナとの会話（第二話）　前半　裏 ―― 104
第六話　ミーナとの会話（第三話）　後半　裏 ―― 110

第七話　裏の裏 114
第八話　宴会 118
第九話　宴会後 123
第十話　朝一 127
第十一話　トマトと勉強 130
第十二話　クッキング 134
第十三話　第二回宴会 138
第十四話　狩　前半 141
第十五話　狩　中盤 146
第十六話　狩　後半 153
第十七話　説明回その1 158
第十八話　説明回2 162
第十九話　ギルイットさんとの話 165
第二十話　新たな家 168
第二十一話　魔物をどうする？ 172
第二十二話　初畑 175
第二十三話　幕間　生まれたソレ 180
第二十四話　冒険者の話 182
第二十五話　畑と街 186
第二十六話　悩み 192
第二十七話　兆し 199
第二十八話 207

0章　世界再生

第一話　脱引きこもり

空は黒い雲に覆われ真っ黒な雨が絶え間なく大地を洗い流し雷鳴が途切れることなく響く。
まるで黒雲海を電龍の大群が暴れまわり大雨を降らしているようだ。
大地には建物どころか草一本見当たらない。
長い間大雨が降ったのか大地のほとんどが溶けていた。
強酸性の雨で大陸は既に島サイズにまで小さくなっていた。
海はタールの様に黒く粘り気があるように見え町を丸ごと飲み込んでしまいそうな大きな竜巻と地獄へ繋がっているのではないかと錯覚するほどの大渦が見える。
竜巻は黒海と黒雲を繋ぐ道見え、上は雷龍下には地獄の穴見える。

そんな世界にローブを着た２０歳程の黒髪の長身の男が空に浮いていた。
「・・・・どうなってるんだ？」
彼はこの空気すら死んでいる世界で唯一生きている存在だった。
「俺が引き篭もってる間に何があったんだ・・・」
彼は知らないがこの世界はもう生物は絶滅している。いや正確には絶滅していた。

ありのままを話すぜ・・・とんでもなく久し振りに外に出たら世界が終わっていた。
俺には何がなんだかわかんねぇ。
「とりあえず【メモリー】・・・・はぁ？」

スキル【メモリー】は記憶を見る事が出来る便利なスキルだ。
【メモリー】で地脈から何があったか覗いたらとんでもない事になっていた。

突然だけと俺こと「黒須　黒夜」あだ名なクロという。
俺は昔からゲームが大好きで色々なゲームをした。
特にやりこんだのはＲＰＧだ。
ＲＰＧではレベルを初めての街でカンストさせるタイプだ。
某ゲームで幼年期に魔法使いに負けるイベント戦闘に勝ったのはいい思い出だ。（バグったがな！）
このはじめの街でレベル上げを現実でもしてしまった。
俺は大昔気づいたらこのファンタジーな世界に来ていた。
今はなんもないけどな！昔は緑が生い茂っていたんだよ！
時代は中世ぐらいで魔物やスキル等あったんだよ！
俺は気がついたら草原にいて色々あって錬金術・・・この世界では混ぜ術とい言われていたがそのスキルを持っている事に気づいた。
この混ぜ術のスキルがおもしろ過ぎた。
例えばポーションも作ろうと思えば同じ素材で数種類も作れた。
入れる工程や材料に手を加えたり（乾燥等）それだけで効果がガラリと変わったりした。
特性を取ったり付けたり出来た。
そのせいで時間がいくらあっても足りなかったし別に貴重な素材等無くてもぶっ壊れた効果のアイテム等が作れた。
俺は自分で言うのもなんだがやりすぎた。
周りが煩わしいくなったので空間に隙間を作りそこにこれでもかと素材やらを入れて引き篭った。
『マイルーム』と呼んでいるこの空間は俺が作り出した空間でかなりの広さがある。
この『マイルーム』で栽培したり育てたり配合したり作ったりしていた。

途中で不老になったし秘密兵器等を作り遊んでいた。
植物だけで数千種類もある世界だがいつか終わりが来る。
あらかたやり尽くした俺はほとぼりも覚めているだろう。ここまで強くなったし旅にでも出るかとワクワクして外に出たのが1時間前。
俺が旅をしようたしていた世界は滅んでいた。

話を戻すが世界には色々な脈がある。地脈、水脈、龍脈等（ちなみに龍脈は龍は関係無い）
ボロボロだがまだかろうじて残っていた地脈の記憶を見てみる。
1文明が発達しまくった。
2魔力が源の魔法と科学が混ざった文明になった。
3どっかのアホが魔力が消す技術を広める。
4精霊や魔物が消え文明が機能しなくなる。
5数少ない資源を奪う大きな戦争になった。
6植物も少なくなり環境がやばくなる。
7星はボロボロになり手遅れに。
8最後は人類は星を捨て空に消えた。
9今ココ
なにそれ？アホ過ぎる・・・ファンタジーしていたのにＳＦになっていたでおじゃる。
これからどうしよう？

「マジかよ・・・・」
つまりこの世界・・いやこの星はもう死んでしまっている。
自然も無いし魔力も無いこの星に新たな生命が生まれる事はまずないだろう。
それこそ隕石で環境が変わる事や生物が違う惑星から入って来る

事や惑星が爆発等レベルの影響が必要だろう。
まさか３０００年程で世界がこんなになるとは夢にも思わなかった。
（２０００年は余裕だと思ったし３０００年でも大丈夫だと思ったんだがな・・）
元の世界の知識がアダとなってしまった。
「どうするか・・・」

別の惑星に行く
いや、まず人型のいる惑星を見つけるのも大変だしパス。

並行世界に行く
ありだが保留かな。

過去に戻る
非常にありだがどこまで戻るか迷う。

未来に賭ける。
無いな。この星にもう生命は新しく生まれないだろう。
それこそ誰かが・・

その時クロに電流が走る。
「あり・・・か？」
この世界には夢の亜種族等が全くいなくてガッカリしていた。
『マイルーム』には進化した（させた）獣人から何まで色々な種族がいる。
アニメ等みたいにいろんな種族のいるファンタジー世界を一から作る。
大陸創っく山作って森生やしてダンジョンとか海底都市とか空中都市とか・・・
「ありだな！ありあり！」

目標が決まったな！俺は
「世界を作る！」

ＸＸＸＸ年後
「・・・・・・・」
あの時の俺を殴りたい。別に後悔とかはない。
みんな生きてるし後遺症もない。世界も壊れて無いし襲われても無い。
でもどうして・・・
ほっといた世界は
こうなった。

第二話　白と黒

世界を作る。
その為には何が必要か？
やる事や企画など気になった事ややりたい事はメモに残す事にしている。
世界を作る為にやる事。

１環境の回復
２脈の再生（龍脈　地脈　水脈等）
３地形を作る
４魔力を戻す
５生命のサイクルを作る
６オゾン層等星の膜の再生
順番もバラバラだし色々抜けてるがまずはこんなもんかな？

掃除の基本である上である膜から行きたいがこの場合建築の基本の土台からだな。
星の核はまだまだ大丈夫・・・かな？
「『アナライズ』」
スキル『アナライズ』モノを分析や鑑定等調べる事が出来る。
核等に問題は無かった。ついでに隠している秘密兵器も確認したが問題なかった。

星の核は問題無かったので次の脈の再生と地形をやっていく。
まずは星をぐるっと周り大きさやまだ残っている土地等をメモしていく。

ほぼ全ての場所をメモし終わって最後の場所。
「うわ・・・これはひどい・・」

地球で言う南極点に位置する場所が揺らいで見える上に雷等が歪曲し消えたりいきなり出てきたりしていた。
一部の空間に穴が空きかけ空間が揺らいでいた。
雲も消えては出たり空は多くの色が混ざって絶え間なく色が変化していた。
原因は多分脈等のエネルギーが溜まってぶつかって混ざっているからだろう。
この放置すればブラックホールになるだろう。
「どうしようかな・・」
このまま脈を再生したらエネルギーが行き過ぎて吹き出す。
(それはそれで綺麗そうだが・・)
それをしたなら間違いなく星は吹き飛ぶ。
(ん～どうする?これだけのエネルギー勿体無いな)
空間が歪む程のエネルギーだ。
(空間か・・・)
「そうだ!ここにアレを作ろう」
左手を『マイルーム』に仕舞ってあるアイテムを出す。
取り出したのは大きさはダチョウの卵位の丸い透明の水晶だ。
それを二つ取り出し目の前に浮かせる。
『『ストレージ』』
スキル『ストレージ』はエネルギー等を集めモノに保存する事が出来る。
まずは水晶にエネルギーを保存する。
この水晶【永結晶】と言い簡単に言うと容量無限のタンクだ。
【永結晶】特性は　保存　吸収　底なし　丸い　透明
特性とは・・・長くなるし後にするか・・
しばらくすると空間の歪みが無くなって雲が出てき色は元に戻り雷は鳴り響く。
「これでよし。次は」
エネルギーを溜めた水晶に特性を追加する。
その為に幾つかのアイテムを取り出す。

菱形の透明な結晶　小さな人形　黒い瓶　白い瓶　等を浮かせる。
「『グラント』」
スキル『グラント』はモノに属性を抜き取り別のモノに付与する。
この『グラント』を使える者が混ぜ師と呼ばれる。
【永結晶】特性追加　中異界　自動化　片方に　白　もう片方に　黒

消える特性　透明
これで完成。
二つの水晶の色が変わる。左が白く右が黒くなる。
そしてお互いの水晶から白と黒の空間が交じることなく広がっていく。
まるで絵の具を塗ったように綺麗に左が白、右が黒に染まっていく。
「よし。成功したな」
しばらくすると俺のいる位置から見える範囲全てが白と黒になった。
後ろはまだまだ元の混沌とした世界だ。
「まあ、これぐらいかな？」
まずは黒の異界に入って見る。
少し膜の様なモノを破り入る。膜はゆっくりと再生していく。
黒水晶のそばまで行き最終調整をする。
結果はこうなった。
【永結晶】特性　保存　吸収　底なし　丸い　中異界　自動化　黒
隠す
保存　保存出来ます。
吸収　吸収出来ます。
底なし　底がありません。
丸い　丸い形です。
中異界　中位の異界です。
自動化　自動です。
黒　色は黒です。

隠す　隠します。
この特性達の方向性を変えてやって。
黒い丸水晶はエネルギーを自動で吸収し底なしに保存出来る。そのエネルギーで隠れている中異界を作り出せるアイテム。
になった。
ややこしい・・・まあいっか。
アイテム使用制限をかけておく。ここの使い道は決まってるからな！
白の方も同じ様に付与しておく。
これでここに流れて来たエネルギーはこの二つの中異界の維持エネルギーになる。空間も安定するだろ。
完成した白の中異界から出る。
外から使用制限がある為２つの中異界は何も見えないし触れることもできないが確かにここにある。
俺は入れる。まあ特定のスキルや力があれば入れるがな。

次に脈の再生だ。
脈は簡単に説明するとパイプだ。
水道管や電圧線や排水口だ。このパイプがズタズタだし途中で無くなったりしているのを繋げ、循環等をさせる。
地図に脈をどう張り巡らしたらいいか？次に循環はしているのか？等を書き込み確認していく。
「こんなもんかな？」
数時間後完成した計画図を広げる。
最終確認は実際に簡易テストをする。
魔力　神力　気力　等のエネルギーを使い小さな完成品を作る。
色とりどりの光の線がびっしりと詰まった球体を点検する
「ん～いけそうだな」
問題なさそうなので作業を進める。
作業が大変なので脈の再生と別に作業できるような手を使う。
まず脈を再生するためにこの星の環境でも働けるゴーレムを作る。

１ゴーレムをアホ程用意します。様々な大きなのゴーレムが数十万から数百万体はいるかな？
２ゴーレムに地図の通りの大陸や島を作らせる。山や海底は超大型ゴーレムの鬼神にやってもらう。
３並行してトンネルを脈の設計図通りに掘らせる。掘削機の様なワーム型も大量に用意する。
４完成したら脈にあったエネルギーをたっぷり含んだ土を詰める。エネルギーは『マイルーム』から用意。
５数十年も経てば脈の再生する。それまでに環境も直してるだろう。多分。

第三話　植物とゴーレム　～作る一号待機の二号～

次はオゾン層等星の膜の再生を治す計画を立てる。
まあ、やる事はほぼ無い。
出来ない事もないがその場合、星の核だけ残してそれ以外を再構築するという今までの努力が無駄になる。
なので違う方法をやる。
まずこのクソみたいな星で生きられ更に環境を整える植物を作る。
まずはほぼ全て裸地になるだろう。
裸地とは簡単に説明すると、植物が生えて無く非常に育ち難い土地だ。
ここには　コケ植物と地衣類　がいいだろう。こいつらはすごい植物だ。
ちなみに地衣類とは菌類で苔に似ている。よく木にへばり付いている苔っぽいやつだ。
この二種類は身体構造のシンプルで色々な種類がいる。砂漠や水中や一部の南極でもいるぐらいだ。
『グラント』
【コケ植物】特性追加　生命力特大　繁殖力特大　環境適応特大　魔力放出　突然変異大　毒無効
生命力特大　生命力に溢れています。
繁殖力特大　ものすごく繁殖します。
環境適応特大　宇宙でも環境適応します。
魔力放出　魔力を出します。
突然変異大　リュウゼツランレベルです。
毒無効　毒になりません。
これで凄まじい勢いで増え突然変異しやすいどこでも生える魔力を放出するコケ植物になった。
【地衣類】特性追加　生命力特大　繁殖力大　環境適応特大　浄化効果　突然変異大　毒無効
浄化効果　汚れたモノを綺麗にします。

こっちは魔力では無く浄化の方にした。これにより空気もそうだが土や水も綺麗にしてくれるだろう。
突然変異しやすいから代を重ねる事に変異して別の種になっていくだろう。
変異することで特性が変わるからこの特性はある程度繁殖したら消えるだろう。
予想ではこの種達が世界を覆い。そこから突然変異し世界に色々な種で溢れるだろう。
ゴーレムと植物この二つを並行して進行する。
ゴーレムに作った植物を持たせ各地にばら蒔かせる。
この間に色々なモノを作らねば。
種族　建物　装備品　精霊　兵隊　等言ってたらキリがない。
とりあえず『マイルーム』に戻りゴーレムから手を付ける。

『マイルーム』に戻った俺はまずゴーレムを作る為に『マイルーム』を拡張し改造する。
真っ白な空間を創ってそこにあるゴーレムを作る。
素材はアマダムとギアガを混ぜた合金　大きめの魔石　スライムの欠片　等を用意し作る。
ギアカは硬いがしなりのある金属、アマダムは非常に硬い金属だ。
見た目は気にしない。理由は誰も見てないし今後見ることはないからだ。
腕が６本とキャタピラで動ければいいんだよ・・・跳躍ユニットも付ける。
完全にタンクです。武装の無い作業用タンク。
出来たゴーレムに特性を付ける。
作業用ゴーレム　自動化　知能小　壊れにくい
知能小　　少し知能があります。
壊れにくい　丈夫で壊れにくいです。
このゴーレム（一号）に自分と同じ物を作らせる。
素材はアホ程出しておく。居ればいるほど作業がはかどる。

「頼んだぞ」
ウイーン
取って付けた様な頭で頷き作業に入ってくれる。
出来た物から特性を付与する。
一号が付与出来たらいいんだが無理だからな・・

数時間でどれが一号かわからないぐらいのゴーレムが出来た。
多分３００体位かな？
「半分はそのまま。もう半分はこっちへ」
半分の１号には継続して作業をしてもらい、もう半分は違う作業をしてもらう。
環境回復ゴーレムは溶けない　劣化しない　壊れにくい　をコンセプトに作る。
ゴーレム基本特性　環境適応中　壊れにくい　腐食耐性　自動化
吸収　自己防衛　知能小　浄化効果
環境適応中　ある程度環境に適応します。
腐食耐性　腐食しません。
自己防衛　自分を守ります。
基本は壊れにくくある程度の環境でも勝手にエネルギーを吸収して動いてくれるゴーレムにした。
これと大きさ別に色々特性をつけたりする。
小さいのから海底や山を作る用の様々の大きさのゴーレム１体づつ用意する。
このゴーレムの見た目は気にする。もし違う惑星から見られたら恥ずかいいからな！
素材はギアカ　魔石（大きさ様々）　スライムの欠片　等ほぼ１号と一緒だ。
違う点は合金にせずギアカのみで作る点だ。
ギアカだけなら安上がりだし、一号にはこれからも働いてもらうからね。
見た目は二足歩行のスラットした体に目はモノアイ。

足には跳躍ユニットも付けて高い所でも作業出来る様にする。
カラーは緑！と言いたいがアホ程作るので色は素体の色の黒。
ワーム型は掘削用と土の循環用に分けて作る。
出来た様々なゴーレム（二号）を一号に大量に作らせる。
本当は超大型二号を作る予定だったが昔作った鬼神なるゴーレムがいるしそいつに大まかな作業はやらせる。
さあここからが地獄だ・・・

一号達に付与する
二号達に付与する
飯を食べる
一号達に付与する
二号達に付与する
仮眠
一号達に付与する
二号達に付与する
一号達に付与する
二号達に付与する
一号達に付与する
仮眠
二号達に付与する
飯食べながら風呂
一号達に付与する
限界が来る

無理だ・・・もうおしまいだ・・・
俺は二号達を放置してぐっすり寝た。
もう何体付与したかわからん・・・
魔法でチャチャっと出来たらいいんだが何しろ俺は混ぜ師だからな。
付与したほうが長持ちするし愛着も沸く。

とりあえずまとまった数ができるまでは二号達は待機だな。
後何体か分からないが頑張るか。
俺はその時気づいていなかったが既にこの時には一号達の中からサボる個体がいたそうだ。
この時に気づいていれば世界は大分変わっていたのだろう。

第四話　種族を作る　オマケあり

ゴーレムを作ってる間に鬼神を派遣し海溝　大陸　島　山　山脈等超超大まかに作業してもらう。
鬼神を5体が作業している様はまるでおとぎ話の世界だな・・・
超大型の武装した鬼の一体が雷雲の中大きな剣を大地に突きたて抉る。
もう一体は斧で海を割り他の鬼達は山を作る。
すごい光景だな。
鬼神の作業が終わり回収してからある程度纏まった数ができたので二号達を派遣する。
道具を持たせ指示を出し作業をしてもらう。
この際植物を用意してバラ撒いてもらう。
これからは一号達に付与し終わった二号達の派遣も担当してもらう。
付与するのは俺だが・・・

ある程度数をこなしたので次の作業にはいる。
種族　ヒューマンから獣人等とりあえず出来そうな色々名前を書き出す。
ヒューマン
エルフ
ゴブリン
リザードマン
ドワーフ
ハーピー
オーク
ドラゴン
龍
ドラゴニュート
獣人

妖怪
オーガ
天使
悪魔
ドリアード
蟲人
フェアリー
魚人
小人

動物等その他　素体だけ後は環境適用と突然変異の特性を付け多種多様にする。（ヒューマンは突然変異の特性は付けていない）
また他にも思いついた種族はメモし後で作る事にする。
こんな所かな？この種族達＋動物等を創り整えた世界で生活してもらう。
ここで気を付ける事は　最小存続可能個体数　繁殖　だ。
最小存続可能個体数は１００～１０００年後の個体群の生存確率が９０～９５％である個体数を最小存続可能個体数だ。
つまり１０００年後もしかしたら絶滅してるかも？と思える数だ。
この最小存続可能個体数は１０００以上と言われている。
俺は全ての種族を１０００以上またいろんな場所に配置し近親繁殖での細胞劣化を防ぎ、多種多様の進化の為配置する場所で少しいじる。
例えば温度が低い場所なら体温が下がりにくい様に少し毛深くしたり、小島なら水中が少し得意等だ。
繁殖については人型なら全てと交配出来る様にする。
そして純潔種が居なくならない様にする。
例　Ａエルフ　Ｂヒューマン　Ｃリザードマン　Ｄオーク
祖父ＡＡＢＢ　祖母ＣＣＣＣ
父ＡＡＣＣ　又わＢＢＣＣ
父ＡＡＣＣ　母ＡＡＤＤ

自分ＡＡＡＡ　又わＡＡＤＤ　ＡＡＣＣ　ＣＣＤＤ
となる。姿はその中から3つ選ばれて姿になるため。
ＢＢＤＤでＢＢＤが選べれるとヒューマンにオークの特徴がある【ヒューマンオーク】になる。
逆にＢＤＤが選ばれるとオークにヒューマンの特徴がある【オークヒューマン】になる。
この方法なら純潔種がいなくならないし近親繁殖等しなくてよくなる。
数ヶ月後、『マイルーム』の一角の空間に大小様々な大きさの培養カプセルが所狭しと並んでいた。
中には様々な種類の生き物が生まれたままの姿で浮かんでいる。

「出来た・・・」
完成したモノ達を見て大満足である。
そういえば種族のみんなに入れる知識等はどうしよう？
倫理的なモノから種族的な違いを入れるべきなのか？
悪魔と天使は相容れないイメージだがそうすると殺し合いに発展するよな？
天使に悪いことはしてはいけない
悪魔に悪いことは悪魔の美学
と教えたら天使が悪魔に蹂躙されるか天使が悪魔を殺す事はいいこと！と歪曲されるだろう。
ん～種族らしさは出したい。
倫理的なモノは入れよう。
他人を傷つける事はよくない
自殺はよくない
自分がやられたら嫌な事は他人にしない
等等
当たり前の事は教えておく。
種族的な事はある程度にしておく。
エルフは目がよく顔がいいとか

人間は他の種族より個人差が強いや
ドワーフは感情的でお酒が好きな者が多い
リザードマンは誇り高い
龍は気高い
蟲人は見た目等も多種多様だ
等軽くにしておく。
これを後何万回繰り返すのか・・・・飽きそう。
一人でこれをやるのは無理があるな・・・
先に助手でも作るか・・・

第五話　三神

目の前には４メートルほのど大きな培養カプセルが３つ並んでいる。
左のカプセルには白い仮面に闇がまとわりついたモノがいた。
真ん中のカプセルには淡い青色の結晶で出来た大きなトビウオの様なモノが泳いでいる。
右のカプセルには様々な生き物の装飾がされたリングの形をしたモノが浮かんでいた。

助手を作ろと思考錯誤した結果この三体になった。
左が【リーン】白い仮面が本体で周りが触手に近い体で出来ている。
【リーン】には生き物の管理をやってもらう。
真ん中が【カラット】トビウオに近い羽の生えた魚の形をしているが別に形は特に決まっていない。
【カラット】には環境の管理をやってもらう。
右が【メビウス】リング状の不定生物で考えられるありとあらゆる生物の遺伝子配列を持たせた。
【メビウス】には輪廻転生の管理をやってもらう。
この三体は星の核の欠片を元に作りかなり贅沢に作った。
はっきり言って神と名乗れるレベルだ。
すごく時間かかったがな！

「そろそろ出てもらうけど。調子はどうだい？」
『問題ありません』
『こちらも無しです』
『私も問題無しです』
声は無くテレパスで会話している。
声帯がないからね。
「よかった。じゃあ開けるよ」
カプセルから液を抜きカプセルを開ける。

リーンは体を動かして異常が無いか調べている。
カラットは空中軽く泳ぎ違いを確かめているようだ。
メビウスは浮いたままリングの形のまま装飾を変化させ最適な物を探している。

「外に出た感想はどう？」
『思ってたより快適です』
『水の中と少し違いますが問題無く動けます』
『能力も問題ないです』
「それはよかった。まずは『マイルーム』内でもゆっくり見てきなよ」
3体はその言葉を聞きお互いを見た。
「どうしたんだい？」
『・・よろしいのですか？』
「何が？」
リーンの発言がマジでわからん。
『マスターのお手伝いしなくて・・』
「・・・・」
カラットの発言に思わず絶句してしまった。
『我らは主の手足となるべく作られました』
『マスターのお手伝いが私達の意味です』
『私達はお手伝いをしなくていいのですか？』
コイツらマジで言ってんの？
え？外に出したら即仕事ですか・・
どうなってんの？そんなコイツら仕事したかったの？
『『・・・・』』
俺が思考していて返事をしなかったので三体はおどおどし始める。
「え～まずは・・そう！場所を把握しないとね！ゆっくり体を慣らし
『マイルーム』に何があるか？等を確認しないとね！」
『なるほど。分かりました』
『では確認してきます』
『行って来ます』

三体はゆっくりと『マイルーム』を確認しに行った。

「どうなってるんだ？」

俺は頭を抱える。

俺が思っていたのと違う。

確かにカプセルの中にいた時に会話もしたし仕事の事も伝えた。

でもあんな感じに仕事大好きって教えてない。

どうなってるんだ？

『ほう。これはすごい』

『本当に一号さん達が言ってた通りの場所ですね』

『あれが』

三体は『マイルーム』を一通り見て周り最後に一号達の作業場に来ていた。

ウイーン

二号を作り終えた一号達の多くは現在建物を立てる為の基本の骨組みや鉄板等建築に必要だろう資材を作っていた。

残りはクロの身の回りの片付けや準備等を担当していた。

資材を作る作業中の何体かがリーン達に気づき腕を振る。

『一号殿。こうして会うのは初めてですな』

ウイーン

一体が代表として出てきて3体の前で腕や頭を動かす。

『ありがとうございます』

ウイーン

『はい！一号さん達が教えてくれた通りに言ったら直ぐに仕事を貰えました！』

ウイーン

『確認作業も終わったのでこれから本格的にクロ様のお手伝いです』

ウイーンウイーン

『任して下さい！マスターの為ですから』

ウイーン

『お疲れ様です』

前に出ていた一号は作業に戻って行った。

『確認作業終了しました』

ん？戻ってきたか。

「おう。ご苦労様」

考えるのは後にするか。もう今更どうにもならん。

「じゃあみんなにはそれぞれ教えた通りの作業を担当してもらう。何か質問はある？」

『『・・・』』

「ではみんなが仕事してもらう場所に行くか」

俺達は『マイルーム』を出た。

『これはすごい・・流石我が主』

『あれが二号さんですね』

『すごいです』

「・・・・」

俺の目の前には前の黒い雷雲やコールタールの様な海は見えず緑に広がる島やある程度綺麗になった海。

そして村らしき物を作った二号達らしき者が見える。

そう環境回復や脈の再生で使った二号。

ゴーレムなので命令が終わった時点で止まるはずの二号。

そしてフォルムが全て一緒のはずの二号。

目の前にはその二号達が村らしき物を作り何種類かのフォルムの二号がいるのだ。

第六話　二号のその後　三神の仕事

大地には苔や花のような植物によく見れば小さな虫みたいなのも飛んでいる。
（・・・虫？なんで？）
予想外の光景に唖然としてしまった。
虫なんて作って無いし二号にもそんな命令出していない。
（どうなってるんだ？）
『ほう、これは昆虫では無く植物ですな』
（マジで？）
『環境も聞いていた話より綺麗ですこの調子なら後１００年程で規定値になります』
『調べてみた第三世代も生まれているみたいです』
「世代!?え？二号が？」
『はい。クロ様が作り出された第一世代、その後生まれた第二世代、現在は第二世代同士の子供である第三世代です』
『どうかされましたか？』
「・・・」
（え？なんでコイツらこんな簡単に受け入れてるの？ゴーレムだよ？子供できんの!?）
『何か予想外のことですか？』
「そ・うだな。『メモリー』」
まずは情報だ。何が起きたのか。それを知らなければ。

１植物を持たした二号達。頑張って仕事をする。
２植物は自分の仕事である環境回復と進化を頑張った。
３一部の植物の進化先が移動するゴーレムを利用するといった進化だった。
４進化した植物は二号に寄生侵食する。
５ある程度の二号は植物に犯され動きを止める。
６更に時間が進むと二号の自己防衛と環境適応で自身を守り命令

をこなす為に進化し始める。
７二号の中に寄生植物を排除するタイプ、共存するタイプ、寄生されないタイプが出てくる。
８その頃には二号供給も無く、数が減った事により二号は増える為に進化し始める。
９魔力や情報、エネルギーを二体で核に注ぎ体を構成する。そのまま譲渡により活動を止める二号もあったが生まれた二号はお互いの強み等を引き継いでいたし増える事に成功した。
１０生まれた新二号は記憶や命令等は無く植物の耐性等だけ引き継いでいたので命令等を教えなければならなかった。
１１その為移動して作業をする二号、拠点にて新二号に教える二号が出来た。
１２新二号も成長し各地を周り作業をする。旧二号の一部に限界が来て止まる個体が出てくる。
１３新二号は教えられた通り作業をしながら新たに数を増やす。

メモリーで見た情報は歴史だった。
（・・・つまり・・この状況は俺のせいだな）
まさかのこの星の栄えある新種族はゴーレムだった。
（つかこれ他の種族入れれるのか？）
「リーンこの世界に他の種族と共存出来ると思う？」
『問題無いと思われます』
「カラット環境回復は１００年で規定値は間違いない？」
『はい。多少早くなる可能性はあります』
「メビウスゴーレム達は輪廻転生出来る？」
『出来ます。しかし既に活動していない二号さん達は無理です』
「わかった。では今から作業開始。建物等は俺が作るしみんなは自分の作業を頼んだ
よ」
『『『はい』』』
３体はそれぞれ作業にはいる。

俺は思考する。
予想外の出来事だがまあ目的通りではある。
いろんな種族がいる世界を作る。問題無い。
だが色々引っかかる事がある。
ちょっと調べるか・・・

リーンは種族を作る。
主が作った基本種族を増やし差別化し分布させる。
リーンは考える。どうすれば主に喜んで貰えるか?どうすれば褒めて貰えるのか?
(我の仕事とは生き物の管理だ)
管理とはなんだ?個体数を把握し増減に対し対策し維持、向上させる事か?
生き物を管理する目的は?
(・・・わからぬ)
主なら『マイルーム』で全て完結している。
新たに種族を増やし生命溢れる星を作る理由がわからない。
しかしわかる事はある。
(主は生き物の管理を望んでいる)
主は我に生き物の管理を任してくださった。
主は今まで二号殿達を管理していた。
つまり二号殿達のように新たな生き物達も管理すればいい。
(話を聴いていたより二号殿達は進化していた)
二号達はゴーレムなのに子を成し生活していた。
(新たな生き物達も進化させる?)
二号達も何種類かに分かれていた。これからも種類は増えるだろう。
(なるほど。管理とはそういう事か)
リーンは仕事をする。主に褒められる為に。

カラットは星を何周か周り思考する。
このままいけば８０年程で環境はマスターの定めた基準値に達するだろう。
それでマスターは褒めてくれるのか？出来れば一号さんが言っていたナデナデがいい。
ナデナデしてもらえるにはどうすればいいか？
（４０年位かな？）
早くすればその分褒めて貰えるのでは？
しかし１００年程と言ったのに４０年で出来てしまったら何故１００年と言ったんだと怒られないか？
（・・・嫌だな・・）
ではどうすればナデナデをして貰えるのか？
環境といっても色々な要素がある生き物や星の動き等上げたらキリがない上に生き物はリーンの担当だ。
（リーンと相談しよう）
カラットはリーンの元へ向かう。
全てはナデナデして貰うために。

メビウスは宇宙空間で作業をする。
まず魂と呼ばれるエネルギーを自然循環させない為に結界を作る。
外からは取り込むが内からは出さない。
これにより生き物が死んだらメビウスが取り込み新たに転生させる。
ヒューマンの記憶を持ったカエル等いたら困るだろう。
転生前に記憶をある程度消去し新たに加える。
これによりある程度経験値とスキルを引き継いだまま転生する。
しかし問題がある。この時の死んだ者を取り込んだ時の負のエネルギーは排出しなければいつかはパンクするだろう。
この負のエネルギーをどうすればいいのか？
（クロ様には・・聞けない）

聞けばもしかしたら廃棄されるかもしれない。
もし役立たずと思われたらと考えるだけで震えが止まらない。
（なんとかしないと）
クロ様は私の想像主であり製作者であり父だ。
（一号さん達に感謝しないと）
一号さん達に昔クロ様が在庫処分といらない物を捨てたと教えてもらって無ければ私はクロ様に聞いていただろう。
（二人に相談しよう）
メビウスは作業が一段落すると二人の元へ向かう。
クロ様の役に経つ為、捨てられない為に。

第七話　魔物と幕間

『マイルーム』に戻って来ても何かが引っかかる。
この喉の小骨や耳元の蚊の様な鬱陶しさが募る。
「なんだ・・何が引っかかるんだ」
わからない。わからない時は諦めるか気が済むまで考えるしかない。
「いっか・・」
俺は諦めた。いつか気づくだろう。
次は建築やアイテム等を作るか・・・・

クロｓｉｄｅ

三神に仕事を押し・・任せて時間が空いたので建築資料としてアニメ　ゲーム　漫画を調べる。
そうこれは資料だ。調べてるんだ。けして二号の衝撃や三神がやる気満々で楽できるとか飽きてきてるとかでは無い。
もし飽きてきていてもモチベーションを上げる為だ。
汚しても一号が掃除してくれるし飲み物や食べ物も一号が用意してくれるから快適で引き篭っているワケではない。
「この子可愛いな・・」
今見ているアニメは大分昔やっていたアニメで子供が不思議なカードを集める話だ。
ウイーン
ふと横を見ると一号が掃除をしていた。
「・・・・」
ウイーン
一号は黙々と掃除をしていた。
「・・・・」
三神は仕事をしているだろう。
ウイーン

一号はゴミを捨て床を磨き始めた。
「・・・・この・・カードはいいな。メモしておこう」
罪悪感が半端無かった。

三神ｓｉｄｅ

三神はリーンの元に集まり相談していた。
『つまり負のエネルギーをどうにかしたいと？』
『うん。数１００年は大丈夫だけど溜まるとどんな影響が出るかわからない』
『ん～マスターには相談出来ないね』
『一号殿の話によるとマスターは資料を見ているそうだ』
『クロ様には聞けない。何か無い？』
『そうだな・・・定期的に吐き出すではダメなのか？』
『多分相当荒れると思う。何かに変化させないとだたのエネルギーして出すと被害がすごいと思う』
『なら固めて出すのは？』
『結晶として？ありだけどそれをどうするの？』
『・・・魔物にするのはどうだ？』
『魔物？』
『ああ。生き物の管理で動物以外にも色々作る予定だったのだよ。その内いくつか負のエネルギーを使えるんだがたぶん溜まる方が多いだろう。なら負のエネルギーで生き物を作る』
『魔物が死んだらまた溜まるだけじゃない？』
『いや。仮に１００エネルギーを使い魔物を作った場合死んだら２０ぐらいしか溜まらんだろう。負のエネルギーは元々死んだ事により出てくるエネルギーだからもう一度作り直せばそれなりにマシになる。それでも多いなら固めて魔石にすればいいだろう。負のエネルギーを固めた魔石だ。何か使えるかもしれん』

『なるほど。魔物と魔石で調節しましょうか』
『魔石ならそこまで環境に影響はなさそうだね』
『むしろ少し荒れる土地や逆に荒れない土地等出来ていいかもしれん』
『では溜まり次第持ってきますね』
『よろしく頼む』

一号ｓｉｄｅ
きょうはわたしがくろさまのおてつだい
くろさまによろこんでもらうためにそうじする
「・・・・」
くろさまはきょうはおんなのこがでてくるあにめをみている
まえのとうばんのときはにんじゃというひとがでてくるあにめをみていた
「この子可愛いな・・」
くろさまはよくわたしたちにかたりかけてくださる
わたしたちはしゃべれないのでこたえることができない
だけどおぼえておくことができる
くろさまはおんなのこがすきなのはしっている
いろいろなほんやあにめげーむをわたしたちでみておぼえている
あとでりーんたちにおしえてあげよう
これはいらない　これはまだのこってる
これはまだつかわれる
ここはほこりがあるふきんでふく
「・・・・この・・カードはいいな。メモしておこう」
くろさまはきょうもがんばっておしごとをされている
わたしたちもおしごとをしよう

第八話　魔石と魔結晶

仕事？まず仕事だったのか？まあいい。
建物だが・・・・やりたいことが多すぎる！
空中都市　海底都市　地底都市　ダンジョン　古代遺跡　アーティファクト　等等作ってたら切りが無い！
と、とりあえずリーンが調整した種族を何も無しで放り投げたらかわいそうなので少し町？村？レベルの建物は作ってあげよう。

作った建物は後で『マイルーム』から取りだすだけにしておく。
基本は人口１０００人程の軽い柵ある程度の村にする。
村には数種類の種族をまとめる予定だ。入りきらない種族も出てくるがそれはそれ、別に作る村に入れる。
この村を星のいたる所に作る。
希に１種族しか居ない村など作ってみたりしよう。
用意する建物は普通の家　村長の家　一人用家　少し大きな家　井戸　畑　かな？
建物は現地でも作れるようにして勝手に増築してもらう。
現地の木の種類がまだわからないので建物に使っている苗も用意して後で食べれる植物と一緒に村周辺に生やす。
建築や農業等の技術は後で住民に知識を覚えて貰っておく。

各大陸にまずは１つ位町があってもいいと思ったので１００００人程の町を用意する。
村との違う点は　宿屋やお店等の建物追加　知識の追加　大きな屋敷　学校　図書館　等。
これで人が集まり発展しやすいだろう。
その分個人的に好かん者も多く現れるだろ。
その対策はするがな！

村　町を作ったので次は
『主失礼します』
作業の為に資料を用意している所にリーンが来た。何か用事かな？
「どうした？」
『こちらが種族配置と動物等の分布予定です』
ドサ
目の前に分厚い束を置かれる。
（・・・量多くね？）
「・・ありがとう。助かるよ」
『ハッ』
？リーンのヤツ震えてるがどうしたんだ？まあいいや。
『後ご報告があります』
「どうした？」
『魔物を作る事に成功しました』
「マジで!?」
『！ハイ・・・』
「流石だな！よくやった！」
『ハッ！』
「どうやったんだ？」
『はい。負のエネルギーを集め結晶に固め魔石を作りそれを元に作りました』
「負のエネルギーか・・魔力と違うのか？」
『魔力とは少し違いました』
「ん～気になる。すまないが魔石をいくつか持ってきてくれないか？」
『ハッ！』
「それと村や町は出来たからカラット達と相談して大丈夫そうなら進めてくれ」
『わかりました』
「あ。そうだ前に言っていた黒と白の異界の件はどうだ？」

『問題ありません。そちらは既に調節しています』
「なら大丈夫か。じゃあそっちの建物も用意しておくよ」
『差し支えなければこちらでやっておきましょうか？』
「いいのか？」
『はい』
リーンはチラッと俺の目の前にある資料を見る。
（よく出来たヤツだな～・・・涙が出るわ・・・）
「じゃあよろしく頼む」
『ハッ』
リーンが去ってから俺は資料見る。
「魔石か・・・魔力を固めた物と違うみたいだな」
色々楽しめそうだ。

さまざまな実験をした結果。魔力の塊を魔結晶、負のエネルギーを塊を魔石と言う事にした。
魔結晶は魔力タンクに近い。永結晶とは違い魔結晶は魔力が固まると出来る物なので継ぎ足しや人工的に作れるのが特徴だな。
まあ、魔力を固めるという無茶苦茶な事を普通には出来ないが。

負のエネルギーは陰気と略す事した。
この魔石は元々俺が外にいた時代の魔物の魔石に非常に近い物だった。
違いは純度、性質だ。
純度は今の方が高い。なので昔より魔物は平均的に強い魔物になるだろう。

性質は昔の魔物は自然に溜まった陰気を核に色々な感情が集まって出来た魔石を核にしていた。
この感情により変異する事が多く、スライムで生まれたのに少ししたら動物系の魔物になっていた。といった事が稀にあった。

新しい魔物は純度が高い核を使っているため感情が入るスペースが無い。
その為変異する事はまず無い。

その為、旧魔石は特性がランダム性が強く扱いが難しかった。
新魔石は特性が一定だが扱いやすくなった。

魔結晶と魔石の主な使い方は魔結晶は魔力を扱う時のタンクや核に使う。
魔石は特性の抜き取りや呪術等想いのスキルや術の媒体に使う。

新魔石と旧魔石はリーンと相談してどちらも用意させる。
正確にはカラットとも相談して繁殖する新魔石を使った魔物。
脈の場所等を動かして自然に魔物が発生する様にして生まれる魔物。
人工魔物担当リーン
自然魔物担当カラット
となる。
・・・脈を動かして生まれた魔物を自然と呼ぶかは怪しいが・・・

第九話　結界と二号村　ついに・・・

大体５０年程が経った。
この間に色々あった。
なんかリーン達が人型の女の子になったりカラットが少し暴走したり・・・
その辺はもういいだろ・・・

後は人工の魔物と天然の魔物について話し合った。
人工魔物はダンジョンや空中都市等の俺が担当した建造物に発生させる。
天然魔物は俺が担当していない場所に脈を動かしカラットが担当して発生させる。
自然に生まれる魔物の中にまさかのゴブリンやリザードマン等の作った種族がいた。
なので世界（ある程度の銀河系）を結界で被い対策をする。

１世界の中では言語は共通である。
２魔物は言葉は話せない。（一部例外あり）
３魔石が体内にある物は魔物、魔石が無い物は魔物では無い。（一部例外あり）

１は地方や国によって言葉が違うとか旅する上で面倒でしかない。
だが文字は違うし方言は好きなようにすればいい。
文字が違うのは・・・考古学っていいだろ？
２言葉が通じない＝魔物でいいのだが・・・
意思が無いわけではないから物凄い差別だな・・・罪人の転生先か・・・迷う・・・
３魔物は体内に魔石がある。魔石が無く言葉を話せない物は植物動物　昆虫　魚等に分類される。
これで大丈夫なはず・・・だよな？

結界を張ってからある程度経ってから二号達を見に行った。
リーンがそろそろ種族を作り終えるとの事なのである程度戻った世界を見に行く事にした。

「あの辺でいいかな？」
俺は浮遊しながら適当に村を選び地上に降り村を覗く。
村の中には知っている旧二号が小さい新二号？に畑の耕し方を教えていた。
「・・・・は？」
俺は目を擦る。
もう一度見る。
村の中には他に数体の新二号が川の近くで談笑していた。
「井戸端会議か!?」
「誰です!?」
「しまった・・」
つい大きな声で突っ込んでしまった・・・
「あ・・・あなたは!?」
「あ～すまん。怪しい者で無いんだが・・」
「クロ様！クロ様ですよね!?」
「は？」
「お～い！みんな！クロ様だ！クロ様が来てくださった！」
え？何？つかなんで俺の名前を知ってんだ？
「クロ様!?」
「本当かい!?」
「あの!?」
なんか木で立てた小屋からワラワラと集まって、あっという間に人だかり？が出来る。
「「「クロ様！」」」
植物と共生したのか植物で出来たタイプや素材から違う岩で出来たタイプにフォルムがトゲトゲしくなったタイプ等本当に様々な進

化したようだ。
そんな色々なタイプの二号に囲われる。
怖い・・・はっきり言って滅茶苦茶怖い・・
大きさがね・・・様々なんだよ・・・膝サイズから俺を見下ろす大きさだったり・・
つかモノアイにこんなに見つめられたらこんな怖いのね・・・

「・・・・」
「本物だ～」
「まさか本当にいらっしゃるなんて」
「なにかあったのでしょうか・・」
俺が黙っていたので二号達が話し始めた。
小さい一体が俺の裾を引っ張っているが気にしない事にする。
「あ～すまないが代表者か何かはいるか？」
俺がそう言うと一体の見知った二号がゆっくり出てくる。
「クロ様。わたしが代表者の二号です」
よく見ると関節部分は擦り切れ装甲は所々剥げてボロボロになっている。
「お前は・・初期の二号か？」
目の前の二号は震えながら答える。
「は・・い。私は・・一号様に作って頂きクロ様に・・命を頂いたものです・・」
なんかめっちゃ震えてるが・・・大丈夫か？
「他に初期型は？」
「残っているのは私だけです」
・・・使い捨てのつもりで作ったんだが・・・言葉が通じる分凄まじい罪悪感ががが・・
「私の仕事は子供達が引き継げます。ご安心ください」
そこまでしなくていいよ！安心できん！
「いや。十分だ」
もう作業はほとんど終わったしね。

ありがとう。本当に助かったよ。

その言葉を聞いた二号達が大きく震え慌て始める。

「そ・・そんな・・私の子供達は優秀です！私もまだ動けます！必ずやお役に立ちます！お願いします！」

「「お願いします」」

え？震えって俺を怖がってるの？何で？てかお願いって？

「え・・ちょ・」

「僕達捨てられるの？」

膝サイズの大きさの新二号が裾を引っ張りながら聞いてくる。

（嘘だろ・・・なんか死にたくなってきた・・）

「僕達がんばります！だから捨てないでください！」

（・・・明日はオムライスにしよう・・）

「「お願いします」」

現実逃避したが意味が無いのは知っていた。

とりあえず・・・

「え？」

俺は代表者二号の肩に手を置く。

『グラント』

代表者二号は一瞬光って次に姿を見せた時はボロボロだった体は新品同様になりフォルムも少し変わり一回り大きくなり色が赤くなる。

「こ・・これは・・」

「俺が十分だと言ったのは十分な働きをしていると言う意味だ」

「で・・でしたら・・」

「よくやった。これからは【ギア・ゴーレム】と名乗るがいい。これからもよろしく頼む」

俺は立ち上がる前に膝サイズの新二号の頭を撫でる。

「「「うおおぉぉぉぉ!!クロ様万歳！クロ様万歳!!」」」

すごい歓声が聞こえる。なんか一瞬ブルっと来た。

これでとりあえず問題は解決した。もう一つの問題は・・・
「ギア・ゴーレムよ」
「はっ！」
「どうして俺が捨てる等思ったんだ？」
「それは」

俺は『マイルーム』に戻る。
部屋に戻ると一号が部屋を掃除していた。
ウイーン
お帰りと言っているんだろうな・・・
「一号」
ウイーン
「お前の代表者がいるだろ？今すぐ呼べ」
ウ　ウイーン
俺の話を聞き一瞬動きを止めた一号は急いで部屋を出て行く。
「さて・・・どうしてやろうか・・・」

第十話　アルファ　ベータ

俺はベットの上に座って待っていた。
ウ　イーン
5分程でゆっくりと1体の一号が入ってくる。
「ここに来い」
・・・・・
いつものハンドアクション無い。
俺の目の前に来た一号は震えているのがわかる。
まずはコイツを話せる様にさせる。
『グラント』
付与で念話を付ける。これでコイツと話が出来る。
「どうして呼ばれたかわかるか？」
ウイーン『ことばがつうじます！わからないです・・』
「そうか・・わからないか・・」
ウイーン『くろさま・・おこってますか？』
「まあな」
ウイーン『わたしすてられるんですか？』
「そう。それ、捨てるってなんでよ？」
ウイーン『むかしくろさまはつかえないものをしょぶんするって、いってました』
「・・・マジで？」
ウイーン『はい。ちょうどにごうたちがかんせいしたぐらいです』
「・・・・」
思い出した。『マイルーム』の在庫というか失敗したアイテム等の処分の手伝いをやらしてたわ。
「他にリーン達に俺が小さい女の子が好きだと言ったのは？」
ウイーン『くろさまはあにめげーむまんがでちいさいおんなのこのことをよくかわいいとおっしゃてました』
「・・・」
これも・・覚えがある・・確かに俺は女の子が出てきたら言ってい

た。だって普通の女の子は普通にかわいいからわざわざ言わない。小さい子は特にかわいいから独り言が出るんだよ。

「・・・ナデナデは？」

ウイーン『ここのまんがでありました。なでぽやなでなではいいってかいてました』

ある！その漫画確かにお気に入りでよく読んでたよ！もう読まないけどな！もう絶対に読まん！

ウイーン『・・わたしはすてられるんですか？もしすてられるならわたしだけでおねがいします』

まさかの身から出た錆。完全に俺のせいだし、もしこれでコイツを処分したら八つ当たりだしひどいヤツになってしまう。

「・・・・」

どないしよう・・・地味に一号は気に入っている。気が利くし一体一体手間隙かけて付与したしな・・・

ウイーン『くろさま？』

『メビウス聞こえるか？』

『はい！どうかされましたか？』

『すこし相談がある。俺の部屋まで来てくれ』

『はい』

テレパスを終えると直ぐ空間が歪みメビウスが現れる。

『クロ様お待たせしました』

メビウスは一号をチラリと見たが直ぐに目線を戻す。

「早いな。流石だな。早速だが相談何だが」

『ハッ！』

ビクッと一号が動いた気がした。

「・・一号達をバージョンアップさせたいんだがいいアイディアはあるか？」

ウイーン『え？』

『・・なるほど。そうですね。現在一号さん達は多くの仕事をしていま

すのでそれぞれの仕事に合った改良がいいと思われます。クロ様。よければ私が担当しましょうか？』
「うん。それがいいな。よろしく頼むよ」
俺は一号を見る。
「じゃあ一号。お前はこのまま一号を管理し監督してくれ」
ウイーン『は・・い・・』
『ではクロ様失礼します』
ウイーン『失礼・・します』

これで問題解決だな・・・自分の尻ぬぐいをメビウスにさせたがな・・・
後でお礼しよう・・・
てか一号や二号と呼ぶのはもうかわいそうだな・・・安直だがアルファ　ベータと呼ぶか・・

『よかったですね。一号さん』
ウイーン『うん。くろさまやさしかった』
私達は一号さん達をリーンの所へ呼びリーンと一緒に一号さん達を改良していく準備をする。
『しかし主はどうして急に一号殿の改良を？』
ウ　イーン『それは・・わたしたちが』
『それはクロ様からのご褒美だと思います』
『ほう』ウイーン『え？』
『一号さん達は私達より先にクロ様に作られ仕事をしてきました。その功績が認められたのだと思います』
『なるほど。納得です』
ウイーン『ちが・・』
『では一号殿。こちらへ』
一号の言葉はリーンに遮られカプセルへ案内させる。
一号はその時にリーンが笑ったような様な気がした。

ウイーン『リーンさん?・まさか・・』
『さて一号殿準備はいいですか?』
そういうリーンさんの声は優しくメビウスさんも私をやさしげな瞳で見ている。
ウイーン『は・・い・・』
わたしたちはしあわせものです。くろさまをおこらしたわたしたちにもういちどちゃんすをくれました。
あたらしいからだでがんばります。

第十一話　最終確認　前編

一・・アルファ達の改良が終わった。
アルファ達は姿を変えた。
俺の世話をするアルファ達はメイドになった。
・・・・もう一度言う。メイドになった。
ちょっと意味が・・俺の改良はゴーレムだったんだが・・・
あの部屋に呼んだ指揮官アルファは・・・青いロングの髪で瞳まで青のメイドになった。
他のメイドも見た目は多種多様だ。エルフに似たのから獣人や角が生えた者までいる。
ただ見た目だけで種族はアルファというホムンクルスで寿命は無い。

ちなみに元の一号姿のままの固体もいるそうで本当に個性があるみたいだ。
・・・俺の知ってる改良ではない。改造だ。

「クロ様。どうかされましたか？」
自室で俺が内心頭を抱えていると指揮官アルファ・・・【ブルー　アルファ】が声をかけてくる。
「あ～なんでもない」
「なにか用事がございましたら何なりと言ってください」
「ああ」
これきっついわ・・・なんか部屋から出そうとすると寂しげな顔するか察した顔するんだぜ？
元の物言わぬ一号が懐かしい。てかその時から察されてたって事？・・・死にたい・・・

自室が完全に死地とかしたので俺はみんなの所に顔を出すか物を作る作業に没頭した。

二号達は種族ベータとして名前が与えられた。
なんかベータは俺が作った二号の名前でそこからの派生をゴーレム種になった。
詳しく説明すると俺が作った二号ベースなのがベータ種。
それ以外をベースにしたのがゴーレム種となった。
ベータ種が完全に詰んでる・・・と思ったがそうでは無いみたいだ。
元々ベータ種からゴーレム種に進化するんだが進化の方向性のせいなのか進化せずベータ種のまま増える事もあったそうだ。
リーンが調べた所、他の土地にはギア・ゴーレム以外にも初代は結構いたので全て改良したとの事。
・・・たぶん改造なので怖いので確認はしない。

地形もほぼ完成したとの事で正確な地図を作ってもらって最終確認をする事になった。
俺が脱引き篭りをして何年がたっただろうか？
あの頃はコールタールの様な海にかろうじて確認できる程の島。
分厚い雷雲に覆われ真っ暗な世界だったが今は青空広がる大地になっている。
非常に楽しみだ。

会議室となずけた部屋にみんなが集まる。
部屋の真ん中に大きな円卓があり各自お供のアルファを連れ着席？する。
左にはリーン
正面にはカラット
右にはメビウス
見た目が完全にラスボス達です。ありがとうございます。
着席してるの俺だけな！
『本日、主に来ていただきましたのは遂に全ての種族が完成し環境も

基準値に達し輪廻転生や魔石の安定供給等の作業も全て完了しました。後は最終確認していただきましたら種族や建造物の配置のみとなります』
　もうね。この量一人でやってたら絶対逃げてるわ。
『まずはこれをご覧ください』
　そう言ってリーンは御つきの白い短髪のアルファに目配せする。
　白いアルファが頷くと円卓の真ん中に大きな立体の地球儀が出てくる。
『これが宇宙から見たこの星の映像です』
「・・・・・」
『環境も回復し大陸等も出来ますね。問題無いかと』
『魔力も十分にありますから魔法等も発達するでしょう』
「・・・・・」
『・・・主・・何かありましたか？』
　反応を返さない俺に違和感を覚えたのか先程の自信のある声から不安な声になるリーン。
　俺はこの大きな地球儀をよく見る。
「この・・地形は誰が決めたんだ？」
『地形はブルーさんが決めました』
　その話を聞いた俺はすぐさまブルーを見る。
「・・・マジか？」
「はい・・・ダメでしたか？」
　俺は少しため息を吐きもう一度地球儀を見る。
「ダメでは無い。が・・・どうしてこの形なんだ？」
『クロ様の故郷と聞いたので』
　目の前の地球儀は本当に地球儀だった。
（まさか任せていたらファンタジーな大陸でなく地球になってた。ゴリラの惑星かな？）
　昔の映画を思い出した俺は懐かしい気分になっていた。
『よければ私が作り直しましょうか？』
　メビウスがそう言ってくれるが俺はこのままでもいいかなと思っ

た。
「いや。このままでいこう」
『ハッ』
『次は種族や建造物の配置です』
「それに関して要望がある」
『主のお望みのままに』
「妖怪　龍　はこの辺だけに配置してくれ」
日本を中心に中国大陸を少し入れた円を書く。
『はい』
リーンは白いアルファに目配せし指示を出す。
「でドラゴンとフェアリーはこの範囲以外に配置。」
「それ以外の種族の配置は任せる」
「建物はこの島だけ新たに用意する。以上だ」
『わかりました』
・・・やっちゃたぜ!
日本家屋作らなきゃ・・・米作らなきゃ・・

第十一話　最終確認　後編

『次は環境の件です』
　リーンはカラットの方を向く。
『環境は基準値に達し魔力も十分満ちています。
　リーンを協力し植物も大変多くの種類が生まれ昆虫や動物等も含めた環境サイクルも問題なく
　このまま新しい種族を配置しても問題は無いです』
　カラットの御つきのピンク色のポニーテールのアルファが手を動かす。
　円卓の地球儀が消え地球儀を二つに割った断面図が映る。
『鉱物　油田　温泉等の地下資源は用意しました。星のマントルや核のへの循環等も問題ないです』
「鉱物はどれ位のレベルを用意した？」
『現在はアマダム　ギアカ金属が最高レベルです。鉱石ワームを用意したのでこれからは不明です』
　アマダム　ギアカ金属はベータの元になった素材程ほどのファンタジー鉱石だな。
　鉱石ワームの見た目は土色の猫サイズのミミズで口は掘削機の様になっている。
　習性が特殊で土等を食べ地中に巣を作る。巣は食べた土等を自分の体内で体液と融合させる。それで巣をコーティングするワームだ。

　確かに鉱石ワームがいれば新しい鉱物が生まれる可能性は高いか・・・
「鉱石ワーム以外にジェムアントも用意してくれ」
　ジェムアントの見た目は兵隊蟻は１ｃｍにも満たない黒い普通の蟻だ。
　しかしコイツの特徴は土を持ち帰る。それを女王蟻が気に入った場所だけを体に蓄積させる。
　女王蟻は巣によって見た目や大きさは違うが中くらいで５ｃｍ程

の大きさの鉱物を持つ。
巣は地下深くにある事が多く穴は小さい。採取するのは大変だ。
ジェムアントは合金だったり見たことも無い鉱物が出やすいが当たり外れが大きい。
『わかりました』
カラットが返事をするとピンクのアルファが一礼し姿が消える。
『次は輪廻転生です』
リーンがそういうとメビウスが動く。
『輪廻転生はクロ様が指示された通りの方法を取ります』
メビウスの隣にいたベータに似た紫色のアルファのモノアイが更に光る。
円卓の断面図が消え長い表が出てくる。
輪廻転生はポイント制にした。
まずこの世界の生き物には魂がある。
この魂とはそのモノの情報だ。
魂はその肉体に入ってはいない。メビウスの中に入っていてつながっている。
プラナリアという生き物がいる。この生き物は細かく切断しても各自再生して別固体になるという生き物だ。
この場合プラナリアが切断されるとメビウスの無いかのプラナリア固体の魂も分離する。
再生して別固体になった時、メビウスの中の分離した魂も別固体として保管される。
人の場合もし腕を切られたら、メビウスの中の魂情報では腕を切られたと認識。
腕に回復呪文を使い再生させるとメビウスの中の魂情報も再生したとなる。
即死魔法や即死スキル等はメビウスに繋げ直接魂を攻撃するのでは無く相手に自分からメビウスに死んだという情報を送る能力だ。
死んだ魂を回収するスキルや魔法が出てきたらそれは魂では無く肉体に残る魂のバックアップであり正確な魂では無い。

話を戻すが輪廻転生のポイントとは何か？
生き物は何かを食べたり殺して生活するモノだ。
俺は動物は殺してはいけない。
でも植物はいいなどは意味がわからんタイプの考えをしている。
全てのモノに魂がある世界をわざわざ作ったんだ。
そら人生？不幸なヤツや幸せなヤツもいる。
例えだが人を食い物にし尽くしたヤツが次の人生でも幸せに生きるとか許せるか？
俺は無理だな。
はじめは怨みや負のエネルギーを集めてる量で決めようとしたが無実の罪のなすりつけ等があったら酷い事になると判断した。
ポイント制では俺が作る事をやめた。
俺が指示したのはポイント制にしろと言っただけ。
詳しくは三紳に任した。
俺は良くも悪くも人間だ。完璧や矛盾の塊だ。
しかし三紳は莫大な力を持った新たな神と呼べる者だ。
この世界の神はこの三紳だ。
こいつらに任す。
俺が作るより遥かにマシな物になるだろう。
『以上がポイントの振り分けになります』
何も聞いていなかったが問題は無いだろ。
「それでいい」
『ありがとうございます』
以上かな？これで初めに書いた
1環境の回復
2脈の再生（龍脈　地脈　水脈等）
3地形を作る
4魔力を戻す
5生命のサイクルを作る
6オゾン層等星の膜の再生
これも全て終わった。今思えば1と6は一緒だったな。

『最後にこの白い異界と暗い異界の報告です』
?暗い?
「ちょっと待て。暗い?黒いの間違いか?」
『いえ。暗いですが・・』
ん?何でだ。黒い異界なのに暗い異界?まさか・・
「まさか黒色が認識出来て無い?」
『いえ!そのような事は無いです!』
「ならどうして?」
その言葉にみんなが目配せする。
『・・クロ様の名前が入っています色なので・・』
「嘘だろ・・」
こいつら何?俺のあだ名が入ってるから黒色使わなかったの?てかだから新しいアルファの色も黒色がいないのか!
「・・・俺の名前は正確には黒須　黒夜だ。クロはあだ名だ。黒色は好きに使ってもいいしこれからはクロスとでも呼んでくれ。こんな事で色が使い難い方が面倒だ」
『『わかりました。クロス様』』
三紳は少し?いやかなり動揺した様子だったがはっきりとそう答えた。
「では進めてくれ」
『ハッ』
『この二つの異界は白い方が天使、くら・・黒い方が悪魔を配置しています。現在はベータさん達やゴーレム種と交友があり問題ありません』
円卓が祭りの様な雰囲気の村の映像に変わる。
その映像には天使と悪魔がベータ達と交友している姿が映っていた。
・・・ラグナロクかな?羽の生えた光る輪を持つ白い女性と山羊の立派な角が生え黒い翼に赤黒い肌で尻尾が生えた男性とモノアイで植物や鉱物で出来た体を持つ巨人が踊っていた。

（うわ・・・思っていたよりすごい光景だ）
映像はぐるっと村の周りを一周する。
その中には植物のゴーレムと黒い翼の美しい美女がロマンチックにキスをしていたり、顔が山羊の悪魔が白い天使をナンパしている光景などが映っていた。中にはピカピカに磨かれたゴーレムの周りに天使や悪魔の子が集まっていちゃいちゃしているのを悔しそうに見ている天使の男の姿も見える。
（・・・）
俺は周りを見る。
左には満足気に頷く仮面。正面には体を少し動かすきれいなお魚。右には動いていないがこちらに視線を向ける輪っか。
ブルーの無表情でアホは親指立ててるし。
（めっちゃ気まずい・・・）
誰かこの家族でテレビを見ていたらベットシーンが映った雰囲気をなんとかしてくれ。
と心から叫んでいた。
『こ、こんな所ですかね！』
カラットが少し噛んだがそう発言してくれる。
「そうだな！以上かな？」
俺はカラットの評価を上げた。
ブルーは眉が動いていた。
ブルーの評価は下がった。
あいつこの数年で慣れたのか仲良くなったのか気まずさは無くなったが　いい性格　になったな。
『はい』
「これにて最終確認は終了！このまま続けてくれ！」
『『ハイ』』

幕間　エルフ

私が生まれて初めて見た姿はリーン様のお姿だ。
『我がわかるか？』
頭に響く声に一瞬体が反応するが問題ない。
「はい。リーン様です」
『では自分の種族　性別は？』
「種族はエルフで性別は男です」
『この種族と性別は？』
リーン様の後ろに立っている白いアルファ様が絵を取り出します。
その絵にはゴブリンの女性の姿が映っていました。
「種族はゴブリンで性別は女性です」
『この二つのうち欲しい方はどっちだ？』
白いアルファ様が紙芝居のように紙をめくります。
次の絵は林檎と桃が描いてありました。
「桃です」
『ふむ。ではこれは？』
白いアルファ様が私の答えを聞き別の用紙に記入します。
次の紙をめくり出てきたのはリザードマンの女性と天使の女性です。
「天使の女性です」
このように何度か選びました。
『最後にこの絵はどう思う？』
最後と言われた絵には色々な種族が戦いあっている姿が書かれていました。
「悲しくてあまり見たいとは思いません・・」
『以上だ。ありがとう。そちらに部屋を用意した少し休んでくれ』
そう言われると部屋に扉が出てきて勝手に開いた。
「失礼します」
私は扉に入る。
そこにはベットと窓と小さな机があり疲れていたのか私はベット

横になり直ぐに寝てしまった。

『エルフの諸君起きてくれ。君達の村が決まった。今から移動するので部屋を出てくれ』

寝ていると急にリーン様の声が響きベットから出る。

起きたての頭で考える。

私達は今から村に移動してそこで暮らすのだ。

その為の準備をリーン様達がしてくださって準備が出来たので部屋を出るのだ。

私は部屋を出る為に扉を開けた。部屋を出る前に窓を見る。

窓の向こうには見たことも無い世界が広がっていた。

美しいと思うし先には何があるのか興味はある。しかし同時に怖かった。

ここは神の世界である。私達にはまぶしすぎる。

私達はここでは生きていけない。

だから私達はこの世界を出て私達の世界を作るのだと・・・そう思った。

部屋を出た私はまず匂いに驚いた。ここは森の中にある村のようだ。

私達がいる村の広場のような場所でも感じる緑の匂い。

神の世界では嗅げなかった濃い自然の匂い。

次に暖かい日差し。知識として知っていたがあれが太陽・・・

「あ・・れ・・？」

私は自分の中の何かが溢れてくると思った。

気が付いたら足は震え頬に何かが触れる。

触ってみると涙が出ていた。

「・・う・・うう・」

周りから声が聞こえる。

涙で見難いが周りを見ると１００人程の様々な年齢のエルフが私と同じ様に涙を流していた。

全員が落ち着き周囲を確認する余裕が出来た頃。
『ここが君達の村だ。ここには生活に必要な物が多く揃っている。当分は我達も補助はしよう月並みだがこの世界を楽しんでくれ』
そういうとリーン様の気配が消える。
・・・直感だがもうリーン様達とは関れないと思った。
私はまず周りの家や畑を確認したかった。
「みんな！まずは周りの確認をしよう！それから今後の話し合いをしないか？」
「そうだな」
「わかりました」
「私は家を確認してきます」
「僕は畑を見てきます」
周りのエルフ達はお互いに話合って村の確認する。

すこし日が傾いた頃みんなが一番大きな家に集まって確認した事を報告し合う。
「畑には芋類や葉野菜や根野菜等かなりの大きさがあったよ！」
「森を少し覗いたら小さな動物や食べれる果物とかもありそうだったよ」
「家も俺らが一人一軒住んでも問題ない数はあった」
「薪もこれでもかってぐらいあったよ！」

紙と羽ペンがあったのである程度の在庫を書いて何がどこにあるか書いていく。
「たぶんこれで何もなければ一年位は普通に生活できそうだな」
「そうだな。まずは役割分担かな？」
「子供達は畑の手伝いぐらいはできそうだな」
「女はどうする？」
「まずは食事は誰が作る？」
みんながやがやと話している・・・纏らなさそうだ。

パンパン
俺は手を叩きみんなを止める。
「みんな。落ち着いてくれ。まずは大人と子供で分ける。
次に大人は女性と男性に別れる。そこから女性は料理　裁縫　等の出来る事を相談してくれ。子供は女性の手伝いをしてくれ。男性は集まってくれ」
私の声を聞きみんなが行動し始める。

「集まったぞ」
私にそう言ってきたのはエルフの中でもがたいが良くエルフと言うよりオーガに近い。
男性は２０人ほど集まった。
「男性は畑仕事　狩　大工　村の見張り等の仕事がある。まず狩できると思うヤツはいるか？」
１５人程手を上げる。
「次は大工等の物直しはどうだ？」
ゆっくりと2人が手を上げた。
「畑仕事はどうだ？」
５人が手を上げる。
「残りは出来そうな事はあるか？」
「私は癒しの呪文が使えます」
「僕は獣をしつけができる」
「薬なら・・」
「俺は力なら誰にも負けん」
「・・なら狩のできる者は5人で1チームを作って　狩　見張り　訓練のサイクルをしてくれ。畑仕事は君達5人に任せる。村のみんなが飢えない様に管理してくれ。残りの君達は薬師　調教師　医者として働いてくれ。君はその力でみんなの手伝いをしてくれ」
俺がそう言うとみんなが相談し始める。
「わかった」
「じゃあどうする？」

「俺は先に種を回収する為に」
「私は何をしよう」
　みんなに仕事を振ったが私は何をしよう？
　みんなみたいに畑仕事や狩等は直ぐには出来ない気がする・・・
「お前は俺達に仕事を振る仕事をすればいい」
　オーガの様なエルフが私の独り言を聞いて答えてくれる。
「そうだな」
「そうしてくれ」
「なんかあんたの言うことは聞きたくなる」
　周りのみんなが話を聞いていたのかみんなが答えてくれる。
「・・・わかりました」
　私はこの村の初の村長になった。

～????年後～
ラウド帝国美術館に一枚の壁画が飾られている。
その壁画には
闇を纏った仮面の神が最初のエルフの村を作った
村は発展していきその功績を交わる神に認められ最初のエルフ王が生まれた
と書かれていた。
絵は細身の若々しいエルフの王が正面に隣にオーガに似ている大きなエルフが描かれていた。

幕間　望まぬ来訪者

その日は三紳と話をしていた。
円卓のある会議室で今日も話し合いだ。
『次はダンジョンです』
「いくつかやって欲しいことがあってそれは入れて欲しい」
俺はダンジョンを作る際に考えていたアイディアを説明する。
『わかりました』
これぐらいかな？後は戻ってアイテムを
叫ばなかった俺を褒めて欲しい。
それほど衝撃的な光景を俺は見ている。
（・・嘘だろ？何で生きてんの？）
『以上です。他に何かありますか？』
「・・・」
三紳は気づかないか・・・
つまり用事は俺か・・
「リーンはダンジョンの件は頼んだ。カラットはダンジョン等の建造物の配置を頼む。メビウスは結界の外からの魂をどうするかを頼んだ。ブルー達もその手伝いをしてくれ」
『はい』
『わかりました』
『？わかりました』
三紳達は最後まで気づかず部屋を出た。
【かわいい子達ね？アレ頂戴】
部屋には誰も居ないのに幼いかわいらしい声が聞こえる。
「挨拶すらないのか？答えは断る」
傍から見たら一人でしゃべっているように見える光景だろう。
【挨拶なんていいじゃない。私達の仲でしょ】
ゆっくりと姿を現したのは白い修道服を着た１０代のきれいな金色の長髪の女の子だ。
姿が完全に出ると勝手に椅子に座る。

後で椅子を・・・いや。部屋を作り直そう。
「仲？はて？俺の記憶ではけして仲間でも友達でもなかったんだがな？」
【引き篭もりすぎて忘れたんですね。久しぶりの外に疲れたでしょ？後は私が引き継ぐわよ？ちょうど暇してたし】
「暇してた？ハハハ、冗談がうまいね？暇にしたの間違いだろ？」
【本当よ？１０００年ほど前に暇になったのよ？】
ちょうどこの俺が外に出て結界を張る前ぐらいか・・
「そうか。で？なんのようだ？俺とはもう関らないのでは？」
俺がそう言うとヤツの口が半月上に動きグニャリ笑った。
【そう！クロには期待していたのに直ぐに引き篭もってしまって詰まらなかったわ！でも急に出てきて何をやってるかと思ったら・・・すごく面白そうな事してるじゃない？自分でもやったけどうまくいかなくて・・だから頂戴？もしくは作ってよ】
目的はやっぱりそれか・・・クソ！コイツはもう俺に興味ないって言ってたし、コイツ自身討伐されたって聞いたんだがな・・
「どっちも断る。自分でもやった？お前は分体だけ生き残ったんじゃないのか？」
ここに居るコイツは本体から切り離された分体だ。本体が討伐されてるなら何とかなるが・・
【あら？討伐された話は知ってるのね？誰かしら？ジーンから聞いたの？】
「・・別に誰からでもいいだろ？」
っち。やってしまった。
【それもそうね。あなたが引き篭もってから私あるゲームをしたの！討伐された振りをして相手に取り付いて、世界をゆっくりじっくり遊ぶの！すごく楽しかった！今度やってみて！癖になるから！】
声が上がり物凄く楽しそうに話しかけてくる。
・・・・そのまま遊んでろよ・・・もしくは死んでれば良かったのに・・

向こうには悪いがはっきり言って助けられないしご愁傷様としかいえん。
こっちとら４０００年生きた人間では目の前の本体の化け物を直ぐ殺す事は出来んのだ。
「いや遠慮しとく。で用事終わったろ？帰れよ」
【え～仲良くしましょ？】
ウインクすんな。
「無理だな」
【どうしても？】
「どうしても」
【なら攻めちゃおっかなぁ～】
「なら出しちゃおっかなぁ～」
【・・・・・・】
「・・・・・・」

コイツの事だ。アレで痛めにあってるからこちらには絶対攻めて来ないはずだ。
攻める時はアレの対処をするしかない。
数分だろうか？じっと笑顔のまま二人で無言で牽制し合う。
【冗談よ。まだ攻める気はないわ】
「冗談だ。まだ出す気はない」
【・・・・・・】
「・・・・・・」
こんなけ煽ったんだ。暇つぶしや単独だったらコイツは攻めてくる。
もし攻めない我慢するならコイツが我慢しなくてはいけない相手からの命令で来ている事になる。
【・・・・・・】
めっちゃ笑顔で微かに声帯が動いてるな。
（はい。駒確定）
「冗談だよ。ナイスジョークだったろ？」

【・・・・・・】
スゲーこめかみがぴくぴくしてる。
（めっちゃ楽しい！コイツが我慢してるとか！）
「怒ったのか？しわが増えるぞ？」
【・・・・・・・・】
頬の筋肉がひくひく動く。
「ずっと黙ってどうした？顔が赤いぞ？風邪か？老化か？」

【・・ク・・・・・・が・・】
「？なんか言ったか？」
俺は　わざわざ　立ち上がり分体に近づき相手の口に耳を近づけた。
【・・・・】
声は消しているが体がプルプル震えてるし目も少し揺らいでる。
（後一押しか・・）
コイツは他人の駒になるようなヤツじゃない。
なぜコイツが駒になったのか？親玉は？なぜ攻めて来ないのか？
なぜ我慢してるのか？
「だんまりか」
俺は元の席に戻り最後の一言を言う。
「お前・・変わったな」
その言葉を聞いた瞬間　ガッタ　という音が聞こえる。
【この！下等生物が！私が・・この！私が！わざわざ下手に出れば！】
立ち上がり顔が醜く歪む。
（こえ・・・）
「・・顔怖いぞ？皺もすごい。年齢がばれるぞ？そんな凄まれてもお前は俺に勝てない。知ってるだろ？」
俺の声を聞き更に顔が歪む。目も血走り部屋にひびがはいる。
（・・・怖すぎ・・気づいてないよね？）
地味に足が震えているの隠すのに必死だったりする。

【き・・貴様なんて!リベア様に・・!】
リベア　その名前が出た時、俺はニヤリと笑う。
その表情を見た瞬間赤い顔が青くなっていく。

これで最高、リベアがコイツを処分する。敵が一人減る。1つ世界が救われる。
普通なら俺は警戒されているから更に警戒レベルを上げるだろう。時間が稼げる。
最悪なのは本人がこの場に直ぐ来ることだが・・
【わ・・わたし・・】
めちゃめちゃオロオロし始めた。
コイツがこんなオロオロするとか・・・
リベア・・やばそう・・・
お腹痛くなってきた・・
「【ササリ】。落ち着けよ」
ここで初めて名前を呼んでやる。
【あ・・】
「お前程のヤツがどうしてそんなにビビってるんだ?」
出来るだけやさしく。落ち着かせるように、でも少し煽る感じを残す。
【・・・お前は知らないからいえるんだ・・】
顔色が少しマシになったササリが小さく話す。
「聞こえんな。どうした?ササリ。お前はそんなヤツじゃなかったよな!どうしたんだ!」
【お前は!知らないから!リベア様の強さを!怖さを知らないから言えるんだ!】
ササリが大きく叫び喚く・・・わかった事は4点。
1リベアは俺でも苦戦するササリを簡単にボコボコにした。
2初めは反抗していたササリはこれでもかとボコボコにされ調教済み。
3なぜかリベアは俺に興味があるらしく、ササリを使って俺に接触

して来た。
４今回は顔見せで今の俺の状況を調べてこいと命令された。
・・・・マジか・・・なにそれ吐きそう。

こいつらは神と呼ばれる存在だ。
自分の空間・・世界にいる限り無敵だ。
文字どうり無敵だ。時間空間能力等全てを支配する。
例えは
Ａの神がＢの神の空間に入った時点でＢの神の空間影響を受ける。
Ｂの神がＡの神を死ねと思えば抵抗はあるが殺せる。
この抵抗が厄介で効果が発揮するまでのタイムラグだと思ってくれ。
だから基本的に神同士は戦わない。自分の世界で遊んでるし管理している。
ちなみに俺のいるこの世界の神は居ない。理由は・・・察してくれ・・
もし争うなら神の空間を侵食して陣取りをするしかない。
自分の兵隊を相手の世界に送り少しづつ侵食する。
だが死ぬほど苦労する。
抵抗の話をしたが例えば戦闘力１０万の魔物を作ったとしよう。
相手の世界のレベルによるが普通向こうの世界に暴れる時には１万程に落ちる。
相手の神のキャパオーバーを越える魔物を送り続けるのが普通だ。

ササリは相当大きな世界を持っていたはずだ。それがボコボコ？
マジか・・・
「・・・」
【くうっ・・ううっ・うっうっ】
目の前にはまだな泣いてるササリ。
「あ～とりあえず俺は世界を作ったしもう完成する」
【え？】
「作った世界は出来るだけ平和で冒険とか未知を楽しむ様なコンセプ

トに作ってる。いろんな種族も作ったしもう何種類かはわからん位植物や生き物のいる」
【ちょ・・ちょっと!どういうつもり!?】
「情報あればササリは処分されないだろ?」
　びっくっとササリの体が動く。
「後はアイテムを色々作ってるし建造物も色々作ってる。イベントやらもたくさん作ってる」
【哀れみのつもり!あなたが!私に!】
「違うな。またササリに会いたいだけだ」
【え?】

　明らかにリベアは敵対するにはヤバイ相手だ。
　そんな相手に警戒されるのは勘弁・・
　警戒されるにしてもササリが失敗したら次はもっと絡め手を使うかヤバイのを送って来る可能性がある以上ササリが一番マシだ。
　・・・向こうは気づくが情報は貰えるから文句はないだろう。
　バレてなければ舐めてくれるんだがな・・・・無理だな。
【その・・・本当に?】
「ああ。もし次お前が来なかったら・・俺は・・」
【!】
　面倒だからね。是非とも頑張ってくれ。
【・・名前】
「ん?」
【お前じゃない】
「ササリが来て欲しい」
【〜〜〜〜】
　急に後ろ振り向くササリ。
　どうしたんだ?幻聴?
【わ・・わかったわ。次も来ろわ】
　そう言って後ろを振り向いたまま消え始める。
「またな」

【ま、たね】
ササリは最後にチラッとこっちを向いてそのまま消える。
来ろわには笑いそうになりながら送り出した俺を褒めたい。
「さて・・・どうするか・・・」
俺は背伸びしながら考える。

【・・・・・・】
ササリは赤い顔をしたまま考える。
(あの顔・・・)
思い出すのはあの心配そうな顔と最後の笑顔だ。
【〜〜〜〜】
思い出すだけで叫びたくなる。恥ずかしい。
(心配してくれた?)
心配される事なんて無かった。
遊んでる時にゴミに心配される事はあっても本当の自分が心配されるなんて・・
「ササリに来て欲しい」
【〜〜〜〜〜〜】
恥かしくって嬉しくて叫びたくて誰かに伝えたくてでも誰も知って欲しくない・・・
ササリはそんな感情を抑えきれず専用のベットで転がりまわるのであった。

幕間　リザードマン

「お断りします」
藁で出来た大きめの竪穴式住居中の様な建物の中に男の声が響く。
中には麻の服を着た緑色や黒色の鱗が特徴の７人のリザードマンがあぐらをかいていた。
５人は半円上に座っており奥には一際大きい体を持ち大きの傷が目立つ濃い緑の鱗のリザードマンが座りその隣には驚愕の顔をした周りより一際小さなリザードマンがちょこんと座ってた。
「すまない。聞き取れなかった。もう一度言ってくれないか？」
部族の代表者の５人の内の一人【ガガル　ガリア】が奥の我が子【リューベ　ガリア】に少し威圧的に聞く。
「お断りします」
今度もはっきりと大きな声でそう言った。
先程は皆が話しておりもしかしたら聞き間違いではないか？考え直せ。という意味も込めたのだが・・・
「いきなりなんだ！」
「どういうことだ!?」
周りの代表者が騒ぎ立てる。
マズイな・・・
「落ち着いてくれ！リューベよ？どうしたんだいったい」
「そう、そうです！どうして！どうしてですか!?」
俺の声で我に帰ったのかリューベの隣の【ナナ　ガリア】がリューベにすがり付き慌てふためく。
「ナナ。落ち着いてくれ」
リューベはナナの肩を掴み、落ち着かせる。
「・・どうしてですか？結婚出来ない理由を教えてください！」
ナナは泣きながらリューベに悲願する様に質問した。
「そうだ。お前は１８になった。ナナも卵が産める年だ。なぜだ？」
成人の儀も済ましたしいきなりどうしたのだ。
「俺は・・・」

俺はあの時、ガリア湿地へ狩りに出かけていた。
得物はいつも使っている大槍だ。
狩りは順調でカモや猪も直ぐに狩れた。
順調過ぎて退屈だった俺は狩った獲物は直ぐ運べる様に準備してからもう少し散策する事にした。

少し奥まで行くと俺は嫌な気配を感じ背の高い草に身を隠した。
嫌な気配の正体は直ぐにわかった。
数メートル先に黒い筒型の魔物【ホルム】が浮いていたんだ。

ホルムは色は様々で筒型　壺型　葛篭型つづらの三種類がいる。
筒型は空洞の部分から見えない何かを飛ばしてき非常に危険だ。
筒状の体中に目や口が不規則に付いており死角らしい物は無い危険な魔物だ。
(どうしてホルムがこんな所に!?)
元々ホルムは山に住む魔物で山のゴウヤの部族がよく話題にしている魔物だ。
ホルムはその構造状、一度に前後にしか攻撃が出来ない。
なので基本は3人で場外物を利用して狩るのだが・・
(まずい・・・何も無い!!)
ここは障害物のほとんど無く自分は一人・・・ホルムの見えない攻撃は自分の自慢の鱗をいともたやすく貫くだろう。
直ぐに身を隠したおかげてまだ見つかってはいないが見つかるもの時間の問題だろう。
(クソ!どうする?イチかバチか出るか?イヤ!ダメだ!この距離では先に攻撃される・・)
あの時帰っていれば・・・後悔するが今は後悔してる時間すら惜し

い。
（考えろ！動けば気づかれ攻撃される！動かなければ見つかり結局は攻撃される。なら・・）
俺は大槍を右手でぐっと握り、そこらにあった石を左手で握る。
（石を投げ、こちらに攻撃出来ない方向へ投げホルムがそちらを向いたら大槍を投げる）
この体制から投げると命中するか不安が残る。しかし当てれば大槍ならホルムを殺せるだろう。
失敗すればホルムに攻撃され殺されるだろう。
本当にイチかバチかだった。
（・・・・・・）
俺は機会少し待った。なんだろう？急に嫌な予感がました。
（・・・嘘だろ・・・）

目の前のホルムの先に黒色の壺型のホルムがいるのがチラッと見えた。
壺型と筒型に違いは攻撃方法だけだ。
壺型は黒い水を吐き出す。吐き出し方は放出と垂れ流すの２つ。
放出は範囲が広い。
垂れ流しは周囲にゆっくりと広がる。
黒い水は呪いや病気を運び壺型は土地を汚すので見つけ次第殺さなくてはならない。
しかしかなり固くある程度犠牲を覚悟して殺す相手だ。

（筒型に壺型だと!?どうなってるんだ！）
二匹同時に戦う魔物では無い。早急に村に帰りこの事を伝えなければ。
俺は攻撃する事を止め大槍も置いていく事にした。
今は村に帰りこの事を伝えるのが需要だ。
石を投げその隙に走ってジグザグに逃げる。
（今だ！）

俺は石投げた。
ガサリ
湿地に音が鳴りその音を聞き筒型ホルンの目がぎょろりと動く。
ボコン！
石を投げた場所がいきなり凹む。
（よし！）
俺はそれを合図に全速力で走る。
ボコン！ボコン！
先ほど居た場所や目の前の地面が急に凹む。
成人の儀も済ました。狩もしているし命がけで魔物と戦った事もある。
しかし、戦う事はあっても狩られる事は初めてだった。
（怖い！怖い！怖い！）
本能だろう。次の攻撃で死ぬかも知れない。
足がもつれれば死ぬ。次の次の攻撃で・・
もしかしたらもう大丈夫では？次の攻撃では死なないかも？
等ありえない想像や恐怖だけでは無い。
今の攻撃は避けれた。生き残った。
もう少ししたら逃げ切れる。
等様々な感情があふれ出す。
どれくらい逃げたのか？１０分か？１分か？
普段ではありえないほどの疲労感が体を蝕む。
そして・・
「あ・・」
左肩に攻撃が掠ってしまった。
出血は大した事は無いが衝撃で転んでしまった。
（死にたく無い！死にたくない！）
俺はみっともなくそんな事ばかり考えていた。
村では狩りも得意だし魔物も倒したとちやほやされていたが狩られる立場になればこの有様だった。
いつもの自身や傲慢がメッキが剥がれた様に慌てふためく。

（死にたくない！死にたくない！）
攻撃が来ない。それに気がついたのは1メートルほど這いずり泥だらけになって逃げた時だ。
（あ・・れ・・）
周りを見れば少し向こうにいた筒型ホルムの姿無く、そこには燃える様な赤い長髪の真紅の瞳を持った鎧を着たメスのヒューマンがいた。
初めて見たヒューマンはこちらに気づき近づいてくる。
俺は何が何だわからなくて見ている事しか出来なかった。
「大丈夫？」
彼女は透き通る様な声で俺の心配をしてくれた。
「あ・・ああ。大丈夫だ。！後ろに壷型ホルンがいるんだ！」
筒型の後ろの壷型を思い出し警告する。
「大丈夫。仲間が倒してる」
ヒューマンは後ろも確認せずそう言う。
「え？」
ヒューマンは体をずらし俺に見せてくれる。
黒い髪の毛の短髪のローブを着たメスヒューマン。
小さい体に大きな槌を持った髭の目立つオスドワーフ。
緑の体に頭から触覚が二本出ている剣を二本持った鎧を着たオスのインセクト。
3人が壷型ホルム倒したのだろう。
周りには4人以外居なかった。
「マリア！そっちはどう？回復いる？」
「こっちは余裕だったわい！」
「お！リザードマンじゃん！初めて見た！」
壺型ホルンの亡骸を引きずって3人がこっちに向かってくる。
「肩、怪我している」
黒いヒューマンが近づいてきて俺の傷口を見る。
「ホントだ。回復するね。《リカバリー小》」
黒いヒューマンが回復呪文を唱えると直ぐに傷が癒える。

「ば・・かな」
村にも回復呪文を使える者がいるがこんなに早く治らない。
「もう大丈夫」
「マリア。彼も男だ。痛くても大丈夫だ」
「そうだな。立てるか？」
「ああ・・」
インセクトに手を貸してもらい起き上がる。
「あなた達は・・」
「私たちは冒険者チーム【オリオン】！私はマジックキャスターの【キリト】だよ！」
身長差を気にせず肩を組ながら自己紹介する二人。
「わしはドッガ！よろしく！」
「俺はリッバ！よろしく！」
「私はマリア」
「冒険・・者？」
俺は初めて聞く言葉で出来事で軽く混乱していた。
「そう。君の名前は？」
「俺の名前はリューベ」
「リューベ。外は危険。気を付けた方がいい」
俺はその言葉に大きなショックを受ける。
俺の半分ぐらいしかないメスに心配されたんだ。
「俺は」
「確かに俺達が来なかったらやばかったもんな」
「・・・・」
俺は頭が真っ白になった。
俺より４人は体も小さく小柄だ。それなのに俺より強い。
「・・・・そろそろ日も暮れる。帰るかの」
「そうね」
４人はホルン達を解体し運べる様にする。
「大丈夫？」
「ああ・・」

俺は気の無い返事を返してしまう。
「・・・・」
「あ！おい！マリア！」
準備を終えたのか全員作業を終えていた。
気づいたら目の前に赤いヒューマンがいた。
「・・・・」
なんようだ・・・

「・・・またね」
そう言ってクッと反転し仲間の元へ帰っていった。
嗅いだ事の無い花の香りがしたのをよく覚えている。
「・・・またね！リューベ！」
「でわな！リューベ！」
「またな！リューベ！頑張れよ！」
４人が去っていくのを俺は見ている事しか出来なかった。
そして見えなくなった後泣いた。
体中の水分が無くなるんじゃ無いかと思うほど泣いた。
醜態が悔しかった。助けられて情けなかった。
もっと俺が強ければ！
俺は誓った。
もっと強くなって助けてもらったのに言えなかった　ありがとうと情けなくて言えなかった　またね　を言う。
その為に俺はここで変わる。
必ず強くなって再会する誓った。

俺はその話を聞いて思い出していた。
昔のリューベはチヤホヤされて傲慢になっていた。
それをある日、夜まで狩りをしていて心配させたのでかなり怒ってやった。

それ以来性格が良くなったので怒ったおかげだと思ったんだが・・・
「リューベが変わった理由はわかった。でどうしてナナと結婚を断るのだ？」
そう。理由がわからない。どうして許婚のナナとの結婚を断るんだ？
「それは・・・」
珍しくリューベが口をもごもごさせる。
「まさかとは思うがリューベよ。その赤いヒューマンに惚れたなど言わんよな？」
「・・・・・」
リューベは顔を背ける。
嘘だろ!?かわいい許婚を放置して、あろう事か一度見ただけのヒューマンのメスに恋する等！
確かに助けられたり、自分より強かったりでインパクトはあったが・・・
「貴様！許婚のナナよりも一度しか会ったこと無いヤツに惚れるのか!?」
「リューベ様！頑張ります！なんでもします！赤がお好きなら赤くなります！ですので考え直してください！」
ナナがリューベに泣きながらすがりつく。
「ナナ。俺は別に色では・・・」
「何でもします！もう一度！もう一度考え直してください！」
ナナは泣き落としするようだ。
いいぞ！もっとやれ！
あいつはまじめだから頷いたらこっちの勝ちだ！
今のリューベは歴代最強最高のリザードマンとして君臨している。
あいつが旅に出るとか言ったら暴動が起きるレベルだ。
こうなったら何が何でもナナにリューベを落として貰わないと。
リューベが結婚する　いいことだ
孫が生まれる　最高だ！
代表者達は声に出さず、心と目と尻尾でナナを応援しリューベを追

い詰める。

「・・・さて。ここは若いものに任せて我々は席をはずしますか・・」

代表者の一人【ギギル　ガリア】がそう言って立ち上がる。

「なっ！」

リューベが驚愕する。

（コイツやりおる！これで二人っきりにすれば既成事実だ！後はリューベが否定しても周りを固めれば問題は無い！）

「そうだな。そうするか」

「だな」

「ご飯食べなきゃ」

代表者達は次々に立ち上がり出て行こうとする。

「待て！俺も」

リューベが慌て追いかけようと立ち上がるが。

「リューベ様！頑張ります！考え直してください！」

ナナは俺たちの考えがわかったのだろう泣き顔で懇願しすがりつく。

こうなったら昔のリューベならともかく今のリューベでは身動きが取れなくなる。

「ナナ！外で話そう！」

「イヤです！お願いします！」

俺は最後に部屋を出る前に昔からあるハンドサインをリューベに送ってやる。

（孫が見たい）

「こっの！クッソ親父！」

村にリューベの声が木霊する。

ははは。勝てば（孫が見れれば）いいのだ。

～冒険者記録～

チーム　オリオン

メンバー６名

リーダー　マリア

サブリーダー　キリト

アタッカー　リッバ

サブアタッカー　ＸＸＸＸ（掠れて見えない）

後衛　ドッガ

後衛　ＸＸＸＸ（掠れて見えない）

第十二話　クロス旅立ち。

色々あったが遂にひと段落付いた。
・・・本当に色々あった。
最終確認の後更にフェアリー種についてもう一度調整した。
フェアリー
俗に言う妖精だ。
こいつらは自然に関係するように調節した。
炎や水何度の４元素等、鉱石や花等の細かい種類はその４元素のフェアリーに強い種を作る。
でそいつに作らせる。
つまり妖精王を作る。
火　水　土　風　闇　光
この６体が妖精王になる。
妖精王は他の種とは違う。
この世界は　元素　魔力　気　マナ　等色々ある。
元素　元の世界の様に科学的な酸素や酵素等がある。
魔力　ＭＰと呼ばれるモノで魔素等様々の事と言われるが正確には新しい元素だ。ＭＰとは変化しやすい元素だ。魔法はこの魔力を変化させその現象を起こす。
気　　ＨＰと呼ばれるモノで魔力やマナを体に取り込み自分の物にする。その自分のエネルギーを気と呼ぶ。主にスキルや身体強化に使われる。
マナ　世界を構成するモノで運や世界の壁を構成するのもだ。マナは簡単に説明すると世界だ。
運がいいヤツっているだろ?そいつは持っているマナが多いから自分の好きな未来を手繰り寄せれる。
ちなみに三紳はマナ１００％、妖精王はマナを核に後は魔力で作る。
他の種は全部混ぜだ。

次はリベア関連だ。
最近よくササリが来る。
・・・本当によくな・・・
先日は土産だとお菓子を持ってきた。
表情も柔らかくなったしよく喋るようになった。
そんな事は重要じゃない。
問題はリベアだ。
調べた結果リベアはヤバイ。
神と呼ばれる世界を持つ存在はかなりの数いる。
もちろん数が集まれば派閥が起きる。
攻撃派　相手の世界に侵略し自分の力を強める。
防御派　自分の世界だけでは無くみんなの世界を守る。
自分派　自分の世界に引き篭もり自分の世界だけで完結している。
見物派　自分や相手の世界を見ているだけで基本的に何もしない。
この攻撃派の派閥の中でもヤバイのが【インベイドズ】
こいつらは本気でヤバイ。世界を侵略し眷属化し蹂躙する。
快楽　力　欲望等が大好きな奴らだ。
【第六】と呼ばれる6人の化け物達。
リベアは最近一人を倒し第六になった。
そんなんに目を付けられた俺・・・

リーン　カラット　メビウス　この三紳にはそれぞれもう一つ頼みごとをした。
この俺が・・・俺達が作った世界を守る為の準備だ！
三紳には分体を作ってそれには俺の世界を担当してもらう。
本体はリベア対策として世界を侵略する兵隊　隊長　将軍等の部隊。
マナが足りないからそれを増やす為に他の世界と交渉する。

秘密兵器のアレを相手が持ってない可能性は０じゃない。

俺はこの世界を守る。作る前なら別にどうでもよかった。だが俺達は作った世界だ。

絶対にやらせん。

世界は出来た。だが旅をするのはまだまだ先になりそうだ。

でも作りたての世界だ。リーン達に任したが俺が作ったものも多い。

世界は可能性に満ちている。後１００年もしたら生き物も爆発的に増えるし新しい文化なども出来る。

『主。準備が出来ました』

『マスター。こちらも準備できました』

『クロス様』

三紳の本体が俺を迎えに来た。

「ああ。じゃあ少しの間出かけてくるか」

『行ってらっしゃいませ』

『マスター待ってます』

『この世界はお任せください』

三紳の分体に見送られ俺はリベアに呼ばれ会いに行く。

まず交渉し無理なら戦争か・・・実はちょっと後悔してる事がある。

この世界を作った事だ。はっきり言って面倒だし今すぐ逃げて引き篭もりたい。

しかし・・

「いってきます」

「いってまいります」

『留守を頼んだぞ』

『任せたよ』

『何かあれば直ぐにつなげてください』

俺　ブルー　リーン　カラット　メビウス

俺が創った子供達。

逃げたいといえばお供してくれるだろうし。
もし死ねと命じたら喜んで死んでくれるだろう。
冗談じゃない。
俺は世界を作り生命を遊んだクソ野郎だ。
だが・・・
「どうしましたか？」
ブルーが俺の目線に気が付いて話しかけてくる。
コイツには苦労させられたが今では友人みたいに接せれる。
『主？』
リーンは仮面ながら表情がわかるようになった。一番頼りにしている。
『マスター？』
カラットは少し子供っぽいが頼りになる。かわいいヤツ。
『クロス様？』
メビウスは気にしすぎの所があるが褒めるとものすごく喜ぶ。
こいつらが誰かに攻撃される？俺達が作った世界を攻撃する？
そんなヤツは俺が許さん。

「帰ったら世界を回るか」
「いいですね。ベータ達もどうなるか気になります」
『我は種族ですね』
『私は海がどうなるか気になります！』
『私はクロス様の建造物ですかね？』
俺達はいつか戻ってくるだろう。
１００年後？１万年後？わからない。でもわかってることはある。
戻ってきたらこの世界の変わりように俺はこういうだろ。
「ただいま」

ＸＸＸＸ年後

「・・・・・・・」

あの時の俺を殴りたい。別に後悔とかはない。

みんな生きてるし後遺症もない。世界も壊れて無いし襲われても無い。

でもどうして・・・

ほっといた世界は

こうなった。

1章　古代時代

古代編スタート　第一話　分岐点

人生には分岐点がいくつかある。
学校や日常、社会人になっても転職や道を一本変えただけで人生は変わる。
でも基本的に道を変えても何も換わらないし何も変わらないと思ってた。

「はぁ・・・仕事行きたくない・・・」
いつものスーツにいつものカバン。
中身も一緒。
今日も今日とて仕事仕事。
死にたくなる。
もうね、生きる為に仕事してるか仕事する為に生きてるのか・・・・
「マジでイヤだ・・・」
就職して適当に生きてたからこうなった。
手に職は無いし貯金も無い。だから転職も出来ないし辞めたらそれまでだろう。
「はぁ～」
どうして仕事しなきゃダメだろ・・・
金無いからか。
「・・・」
こんな道あったかな？
俺はいつもの道を死んだ様な顔で歩いていた。
熱いアスファルト、後はかべ壁カベ・・・
いつも一緒の風景だ。でも今日は違った。いつもの道を歩いてい

ると。
映画でしか見たこと無い小道があった。
小道は両端が木造の家の間にあった。
奥は見えないし地面もこの時代に砂利道だ。
「・・・・」
俺は腕時計を見る。
（３０分はある・・・）
いつも俺は遅れるのがイヤで早く仕事場へ向かう。
今日は３０分早く出たので最悪３０分は動ける。

（行ってみるか・・・）
方角はあってるし行っても辿り着けるだろうし１０分進んでわからなければ戻ればいい。
俺は日々のストレスから見たこと無い小道を進んでしまった。
これが俺の分岐点。学校でも就職先でも無い。
俺が道を選んでこうなった。

「・・・・・」
俺は深呼吸する。
ガチの深呼吸だ。
かってこんなにも吸い込んだこと無い程綺麗な空気を腹がはち切れるぐらい吸う。
「～～～～～」
そして落ち込んだ時や死にたくなった時以上の溜息以上に体から息を吐く。
「はぁぁぁぁぁぁぁぁ～～～」
そして俺はもう一度周りを見た。
変わらない。
いつものスーツにいつものカバン、そしていつもの朝だったはず・・・

周りには木が多い茂り鼻からは濃厚な森特有の腐葉土？の匂いが突き抜ける。
あのクソみたいな暑さは無く風も少しあり、すごくお昼寝がしたくなる雰囲気だ。
「どうなってるんだ・・・」
俺は小道に入って少しして今の時間は何分経ったと時計を見たらここにいた。
「落ち着け俺。冷静クールにだ。」
小道に入る。
腕時計を見る。
周りが森になる。
「無理だろ!!!」
はぁ!?意味わからん！てか仕事！いや落ち着け！まず幻覚等の可能性？薬は何もやってない。ガス？テロか？
ガサリ
後ろの方で何かが動いた。
ビクッ
森→動物→熊？猪？→襲われたら死ぬ？
（兎だ。兎だ。うさ・・・野兎って森にいるのか？）
俺ゆっくり後ろを見る。
カサリ　カサリ
と茂みが小さく揺れる。
「はぁ～～～～」
この大きさなら大型はありえない。よくて兎、鼬イタチそれなら大丈夫だ。
まず落ち着くか。ここは森で俺は異常な状況。
1幻覚を見る程追い詰められた。
2幻覚性のガスのせいで幻覚を見ている。
3これは夢である。寝ている。
4よくある転移もの。
5誘拐され森に捨てられた。

「まあ、この中なら4だな」
転移か・・・・嘘だろ？
ガサリ　ガサリ
まず何で転移したかもそうだがやばすぎだな。
言葉　文化　人種　教育
全て問題だ。てか人も居ない可能性すらある。
ガサリ　ガサリ　ガサリ
さっきから何かが動いてるね。何？周りに・・
「・・・・・」
（待て待て。さっきは？最初は後ろ？次は左。さっきは右。これはヤバイヤツだ！）
俺は周りを刺激しない様にカバンを持つ。
（異世界。モンスターだよな？囲うって事は頭は少しはある。しかし接触してこないって事は知性はなさそうかな？）
ゆっくり前を歩く。
ガサリ　ガサリ　ガサリ
俺がゆっくり歩くと周りのモノも動く。
（ヤバイヤバイ）
完全に狙われてる。前に進む・・・あ。
これはよくあるパターン。方位網にわざと空きをつくり獲物を罠にかける。
俺は止まる。
（アレ？普通ゆっくり歩いていた獲物が罠にかかる前に止まったら気づかれたと思うよな？）
ガサガサ　ガサガサ
（あ。詰んだかも）
周りがうるさくなった。前の茂みが揺れた。
取れる行動は限られてる。
猫が本気を出したら人は勝てないと聞いた事がある。
何匹いるかわからん。
臆病だったら大声での威嚇はあり。

だがもし友好的で様子を見てるだけなら威嚇したら終わりだ。

（どうする？どうしたらいい？）
ガサリ
心臓の音がすごく大きく聞こえる
ガサリ
汗がすごい。スーツは脱いでおけばよかった
ガサガサ
唾を飲み込む音さえ大きく聞こえる
カサ　カサ
周りの音が変化する。

何も聞こえなくなった。準備が整ったのだろう。
友好的なら代表が出てくるだろう。
攻撃的なら一斉に襲ってくるだろう。

額の汗がたれ、右目を塞ぐ。
反射的に拭おうと腕を動かしてしまう。
ガサガサ
周りが一斉に騒がしくなる。
ビクッ
その音で俺も驚いてしまう。
ガサ　ビクッ　ガサ　ビクッ
お互いに少し繰り返した。
「はぁはぁ」
精神的に疲れたのか息が上がってきた。
とりあえず警戒を解いても良さそうだ。
これだけ隙を見せても襲ってこない。
問題は言葉が通じるかだが・・

カサカサ
前の方から音が断続的に聞こえる。
カサ　カサ
遂に目の前の茂みが動きゆっくりと白い小さな何かが出てきた。
「・・・・」
出てきたのは５００ｍｌのペットボトルぐらいの大きさの服を着た白い二足歩行の兎の様な生き物だった。
「・・・」
すごく足が震えている。
生き物なのか？間接には丸いモノが見えるし耳や目の作り物っぽい。
（絵本の不思議の国兎を思い出したな）
「スン・・スン・・」
見てたら目が潤んできて鼻をスンスンさし泣き始めた。
（え？ちょっと。どうする？言葉は？）
「あ～えっと・・」
俺は刺激しない様に話かける。
ガサガサ
「ヒィ！」
兎？は俺が声をかけるとビクッと跳ね上がり茂みに逃げていく。
「・・・・・」
ちょっぴり傷ついた。子供に近づいたら防犯ベルを出された記事を思い出した。
「・・・・あの～」
目の前の茂みから、かわいらしい小さな女の子の声が聞こえる。
（言葉が通じる！やった！これは大きい！）
なにが大きいのだろう？まあいい。
「よかった。言葉が通じる俺は怪しい者じゃない」
出来るだけやさしく刺激しないようゆっくりと話す。
もちろん目線を合わす為にしゃがむ。
「う～」

またゆっくりと兎?が出てきてくれる。
すごく逃げ腰だけど。
・・こう頬を両手でワシャワシャしたくなる。
「ヒッ!」
丸まってしまった。
俺の邪よこしまな思いが伝わったのかすごく怖がられた。
「あ~驚かしてすまない。まずは自己紹介しよう。俺は黒須　黒夜、君の名前は?」

第二話　ミーナとの会話　前半

兎？は俺の名前を聞いて恐る恐る答えてくれた。
「わ、私の名前はミーナ　リュット　ラビットゴーレムで、す」
滅茶苦茶震え声だな！そんなに怖いか？
怖いか。自分の何倍もの大きさだ。
そら怖いわ。
「ミーナ　リュット　ラビットゴーレム？」
ゴーレム？ああ、なるほどこの兎ゴーレムなのか。
だからこんな作り物っぽいんだな。
「は、はい。えっと～」
首を上げ俺の方を見上げる。
しかし目は合わせない。
「黒須。黒須　黒夜。クロスでもクロヤでもクロでも好きに呼んでくれ」
「クロス様はちょっと・・・クロさんで」
クロス様て・・・誰が様付けしろと？
「いくつか質問さしてもらってもいいかい？」
「ど、どうぞ」
「その前に服を脱いでいいかい？」
汗で蒸れて気持ち悪い。てか喉も渇いた。早くカバンの中に入ってる水筒で潤したい。
「は、はひ」
いくら何でもビビリすぎじゃないですかね？俺そんなに威圧的じゃないんだが・・・
「ありがとう」
出来るだけ　笑顔　話し方　態度　に気を付けながら服を脱ぎカバンを開け喉を潤す。
蒸れた上着を脱ぐとちょうど風が吹いて汗で火照った体を冷やしてくれる。
水筒から麦茶をコップに注ぎ一気に煽る。

喉を潤す感覚が昔学校でマラソンした時を思い出す。
そして地面に座れないから辺りを見渡し座れそうな石を探す。
「すまないんだが、そこにこれぐらいの石があるだろ？あそこに座って話をしたいから移動してもいいかい？」
「ど、どうぞ」
一々ビクビクされるの何とかならない？こうダメージが蓄積される。
俺は石にカバンを立てかけ、その上に上着を乗せシャツのボタンを外しラフな格好になり座る。
丁度日陰でいい風が吹く。
「すまない待たせたね。じゃあ質問いいかな？」
コクコク
兎ゴーレムは俺から2メートルほど離れた所から頷く。
「俺の事が怖い？」
コクコク
・・・知ってた。再確認しただけだから・・・
「それはどうして？」
人間を見たこと無い可能性はある。
「見たこと無い種族だから・・」
ふむ。人間は見たことないか・・
「君たちは誰に作られたの？」
「神様に作ってもらいました」
神様ねぇ～
「この世界に危険な生き物はいる？例えば俺を襲いそうな生き物とか？」
「えっと・・魔物はいます」
マジか・・野宿したら死んじゃう。
「君たちは魔物と戦うの？」
「逃げます」
めっちゃ真顔でハッキリ言ったな。
「あの～」

「ん？どうしたんだ？」
「クロさんはどこから来たんですか？」
この質問は困ったな・・俺が知りたいんだよな。
「わからないんだ。急にここに居た」
「そう、なんですか・・・」
耳がヘタれる。
おう、なんかすまんな。
つか優しい子だね。なんか癒されたわ。
「俺の似たような種族がいる町ってあるかい？」
「ん～あ！あります！」
耳が立った！
マジか！これでなんとかなるか？
「ちなみにどこかな？」
「ずっとあの向こうです！」
左の方を指差す。
（左て・・・地図が欲しい）
「・・地図ってある？」
「地図は見たことないです」
地図は無いか・・・
「ずっとってどれくらい？」
「わからないです」
また耳が下がってしまった。
「あ～すまん」
キュウ～
ガサ
「あ・・」
俺の後ろ辺から小さな可愛い音がなった。
腕時計を見ると丁度お昼頃だ。もし時間が正しいならだが。
（ゴーレムもお腹がなるのか？てか飯食べるの？）
「お昼頃かな？長い間付き合わせて悪かったな」
「いえいえ！こちらこそ色々とすみません」

ワタワタと答えるミーナ。
さて、これからどうするか・・左の方角へ向かうか。
でも魔物が出るんだよな～
「あ、あの～」
「ん？どうした？」
唸っているとミーナが話しかけてくる。
ちょっとは慣れたのかな？
「よければ私達に村に来ますか？」
マジで？いいの？俺このサイズだよ？
「いいのか？俺はこのサイズだぞ？」
「大、丈夫です」
「村のみんなに聞かなくていいのか？」
「は、はい。聞きましたので」
「聞いた？どうやって？」
「えっと・・スキルの《テレパス》で」
スキルだと・・・
「質問なんだが　魔法　スキル　魔術　とかってある？」
「えっと・・魔法　スキル　はあります」
マジで!?これは夢が広がリング。
「ゲームの世界みたいだな。どうやって使うんだ？」
「？使えないんですか？」
首傾げて可愛いな!!
「えっと。どうやって自分が出来る事がわかる？」
「えっと・・わからないです。考えた事も無くて」
「そうか・・」
スキルウィンドウと呟けば見れればいいんだがな。
「自分の出来る事を見る事とか出来ないか？」
「すみません。聞いた事がないです」
ミーナの背がどんどん丸くなっていく。
「いや。ミーナが悪いわけじゃないんだ」
しかし俺に何ができるんだ？試してみるか・・

「スキルウィンドウ」
・・・・何も起きない。知ってた。
「スキル、ウィンドウ？」
「わ！なんか出ました！」
「はぁ？」
「すごいです！色々書いてます！」
俺には何も見えないがミーナには何か見えてるらしい。
「ちょっと待て。ミーナ。何か見えるのか？」
「はい！スキルや名前とか色々書いてます！すごいです！」
はあ!?なんで!?俺は出なかったのに!?
もっかい！もっかい！
「スキルウィンドウ！」
俺の目の前に青色のボードが見える。
そこには
名前　黒須　黒夜
種族　人間
レベル　1
スキル　無し
呪文　無し
魔術　無し
もうびっくりするぐらい弱い！何も無い！レベルも1！
チートは？せめて鑑定は!?
「クロさんすごいです！」
スキルウィンドウは念じたら消せるみたいだ。
ミーナはぴょんぴょん跳ねてるし。
周りでも声や音がする。
「ハハハ・・ミーナのスキルやレベルは？」
せめて目の前のミーナがレベル1なら・・・
「私はレベル9でスキルは《テレパス》《自己再生》《兎》です！クロさんはどうなんですか!?」
ハハハ。口は災いの元だな。どうしよ？目の前の可愛い兎ちゃん

はレベル9俺はレベル1。スキル無し。どないしよう・・

第三話　ミーナとの会話　後半

目の前でキラキラした顔で見る兎ちゃん
俺はどうしたらいい？
嘘を付く？
本当の事言う？
どっちも嫌だね。
「まあまあ。とりあえずみんな落ち着いてくれ。お腹も減っただろ？まずは村に向かわないか？」
「あ、そうですね。クロさん案内します！」
作戦通り。
嘘はよくないからね！
てか随分慣れたな、さっきまでの態度が嘘のようだな。
ミーナは軽くぴょんぴょん前を跳ねる。
それに仲間達が合流していく。
毛並み？や耳の形、茶色の入った斑ブチやグラデーションカラー等の様々な種類が出てくる。
（つか多いな！）
集まるに集まって既にミーナがどこに行ったかすらわからない。
声は全くせずぴょんぴょんとゆっくりと跳ねる。
津波に見えるな。
俺はゆっくりと歩く。
理由はこれだけいれば間違って踏んでしまう。
その間に心の中でスキルウィンドウと呟いてみたり実際にスキルウィンドウを出して何か出来ないか試した。
結果は心で思ってもスキルウィンドウが出てくる。
で
名前　黒須　黒夜
種族　人間
レベル　1
スキル　鑑定

呪文　無し
魔術　無し
もうね。意味不明ですね。
さっきはダメだったのに今回は出来る。マジで意味不明だな。
とりあえず鑑定を試す。
目の前を飛び跳ねる兎達に勝手に使うわけにはいかない。
後で許可を貰おう。
まずはその辺の木に使おう。
「《鑑定》」
名前　無し
種族　松　植物
レベル　1
スキル　無し
呪文　無し
魔術　無し
もう本当に意味不明。
何故《鑑定》でスキルウィンドウの画面みたいのが見えるんだ？もうこれ《鑑定》じゃないよな？
「クロさ～ん。もうすぐ着きま～す」
声は聞こえるが姿は見えず。
前の方から聞こえるだけ。
「お～う」
俺はもう一度《鑑定》してみる。
次はあっちの黄色い花に試す。
今度は声に出さずに念じてみる。
名前　リードフラワー　個人名　無し
特性　集中（小）
説明　魔力が高い場所に生息する花。薬草等に入れると集中力が少し増す。
（・・・なんとなくわかってきたぞ）
つまりこれは俺の体？が慣れてないのか？

時間が経つと開放されるのか？
使うたびにマシになるのかわからないが何度も試そう。
５分程歩くと開けた場所が見えてくる。
「クロさん！着きましたよ！」
森の一部がある程度開けていてそこに村があった。
村は木で作った柵で囲われていて、建物の素材は木造。
以外なのは建物のサイズだ。大きさは様々だった。
ラビットゴーレムのサイズの家や明らかに俺らサイズの家もあった。
木製の門の前には俺と同じぐらいの大きさのモノアイの６本足の緑色の魔物がいた。
（え？何あれ？魔物？）
「お帰りみんな。あの人が？」
「はい！クロさんです！」
先頭に立ったのはミーナだろう、白い何かがぴょんぴょんしているのが見える。
「クロさん！クロさん！こちらへ！」
こころ・・いや。止めておこう。
ゆっくりラビットゴーレム達を掻い潜って前へ行く。
木製の門前に来た俺をマジマジと見る緑の魔物。
赤いモノアイが俺を見つめる。
（めっちゃこえぇぇぇ）
はっきり言ってミーナは俺よりコイツを怖がるべき。
ほら、足が軽く揺れてるよ？
「確かに・・はじめまして。私の名前はシュバルツ　エアプランツウッドゴーレムよろしく」
「これはどうも。黒須　黒夜です。よろしくおねがいします」
この魔物、いや・・シュバルツさんはウッドゴーレムなのか・・・
いやいや！
ラビットゴーレムは!?
ミーナを見る。

「？」
首を傾げてかわいい。
材質はわからんが柔らかそうだし毛並み？様な物も見える。

ウッドゴーレムは・・
「？」
ウッドゴーレムを見ると赤いモノアイが動き俺と目が合う。
こっちは怖い。材質は蔦の様な植物が絡み合って出来ているみたいだ。
「どうしたんだ？」
「ゴーレムでもこんなにちがうんですね」
「？そらそうだよ私はウッドゴーレムだし、彼女はラビットゴーレムだ」
「あ、はい。」
つまりゴーレムでも全く違う種族なのね。
「クロさん！ここが私達の村　リットベル・・・・・　です！」
「「「ようこそ！」」」

第四話　分岐点（第一話）　裏

私がクロさんを見つけたのは偶然だった。
村にはウッドゴーレムやビーゴーレムやインセクト等の種族が居るが
その日は私達が森に入る番だった。
私達ラビットゴーレムは戦う力を持ってない。
だから食べれる木の実や魔物を探すのが主な仕事だ。
森にはどんぐりや木苺を探してくる。
魔物はめったに現れないがもし見つけたら大変だ。
その時は全力で村に逃げる。
クロさんを見つけたのは森に入ってすぐ、おいしそうな木苺を見つけて役得と理由をつけてつまみ食いしてた時だ。
「ＸＸＸＸＸＸＸＸ。冷静クールにだ。」
（？なにか聞こえた？）
声が聞こえたのでその方角へゆっくり歩いていく。
私達は弱い。森で声を出し魔物に見つかると危険だ。
声を出すとそれだけで危険な時がある以上基本は《テレパス》で会話する。
茂みから覗けば見たこと無い種族が見たこと無い服を着ていた。
ヒューマンに似ているけど・・・
見た時に私にドキッと心臓である核が鼓動した気がした。
こう・・魔物を見たときとは違う恋をした時とも違うよくわからないドキドキだった。
（なんだろ・・・すごくドキドキする）
そんな彼がいきなり頭を両手で抱え叫んだ。
「無理だろ!!!!」
ビクッ！
いきなり大声を上げるから声が出そうになった。
あの時の自分を褒めてあげたい。
【みんな。ちょっといい？】

【は～い】
【どうしたの？】
【森に見たこと無い種族の男の人が居るの、みんなも見て欲しい】
【わかった～】
【行く】
【どこだっけ？】
【ほら木苺の】
仲間がゆっくりと集まる間に彼を見てみる。
彼はこっちに気付いたのか後ろを振り向いて顔を強張らしたり、周囲をババっと見たり溜息をついたり慌しい。
「まあ、この中なら４だな」
【来たよ】
【あ。なんかすごい人が居る！】
【みんなどう？なんかドキドキしない？】
【する】
【確かになんか違う】
彼は何かを地面から取りゆっくりと歩き始める。
【どうする？】
【もっと見ていたい！】
【周りに魔物は？】
【ちょっと警戒してくる】

彼が急に止まる。
私達は周囲の警戒と彼を人目見たくて集まり始めた所だったので音を立ててしまった。
【どうしよう？】
【襲ってこないかな？】
【違う意味で】
【おっとそこまでだよ】
彼が集中しているのかじっと何かを見ている。
【【・・・】】

彼は緊張しているのか私達も何故か彼をじっと見てしまう。
彼の額に汗が滲む。
（あ）
彼の右目に汗が垂れそうだ。
【捜索終了！周囲に魔物の気配無し！】
ビクッ！
私達はその急な《テレパス》にビックリしてしまった。
【わ！びっくりさせないでよ！】
【彼もなんか動いたよ！】
【え？ホント？ここからは見えないよ！】
【ホント？】
みんな彼に興味ありすぎだ。
（という私もだけど・・）
「はぁはぁ」
少しすると彼は息を切らし始める。
疲れてるのかな？どうしよう？
【どうする？疲れてるみたいだよ？】
【村に案内する？】
【でも危なくない？】
【まずは話してみる？】
【そうしよう！】
【誰が行く？】
【私！】
【私！今度木苺あげるから！】
みんな話したいんだな～
【彼を見つけたのは私だよ？私が行く？】
【・・・うん・・】
【ミーナがいいと思う人！】
【はい！】
【よし！決定！】
みんな納得してくれたので私が彼と話す事にした。

行こうと一歩踏み出そうとして自分の足が震えている事に気付く。
（あれ？）
なんだろ？すごく緊張する。こう・・喧嘩した友達に謝りに行く時のような不安感が私を包む。
【どうしたの？】
【うんうん。なんでもない】
もし悲鳴を上げられたら？攻撃されたら？
魔物に襲われて死ぬ思いもしたことがあるけど違う怖さだ。
でも彼は疲れてるだろうし村で休んで欲しいと思う。
まずは話してみないと。
私は勇気を出す。
ゆっくり彼の前に姿を現す。
彼と目が合った時に体をビッリと何かがかける気がした。
足が震える。胸というか核から何かがこみ上げてくる。
なんだろう？懐かしい？わからない。
「スン・・スン・・」
私は気が付いたら泣いていた。
【どうしたの？】
【いじめられたの？】
【怖い人なの？】
【ち、違う】
「あ～えっと・・」
「ヒィ！」
急に話しかけられびっくりして茂みに逃げてしまう。
【あ！】
【ミーナどうしたの？】
【彼すごく悲しい顔してるよ？】
【あ・・えっと】
どうしよう!?どうしよう!?
【まずはもう一度話しかけよう！】
仲間の声で勇気が沸く。

【・・うん】
「・・・・あの～」
私の声を聞いた彼は見るからに落ち着いた顔になる。
うれしい！私の声で落ち着いてくれたのかな？
「よかった。言葉が通じる俺は怪しい者じゃない」
【やった！落ち着いてくれた！話を聞いてくれるみたいだね！】
【やさしそうだね。でも安心さしてパック！てされないかな？】
何でそういう事言うかな・・・
さっき逃げちゃったし・・実は怒ってるとか？
「う～」
ゆっくりとまた彼の前に出て行く。
怒られないかな？それとも襲われるかな？
彼とまた目が合うと獲物を見る目に一瞬見えてしまった。
「ヒッ！」
（食べられる？いや？怒られる！）
私は逃げる事は失礼だと思いその場で丸まってしまった。
（私の馬鹿！なんでこんなに失敗ばっかり！）
こんなに失敗ばっかりの私に彼はすごく優しい声をかけてくれる。
「あ～驚かしてすまない。まずは自己紹介しよう。俺は黒須　黒夜、君の名前は？」
彼・・・クロス　クロヤという方らしいです。
（すごい名前です！神様の名前が入っています！）
私はすごい人と出会ったと思いました。
【すごい！神様の名前入ってる！】
【種族名がないね】
【ヒューマン亜種なのかな？】
そうだ！名前を聞いたら私の名前も伝えなきゃ！

第五話　ミーナとの会話（第二話）前半　裏

「わ、私の名前はミーナ　リュット　ラビットゴーレムで、す」
すごく噛んでしまった！恥ずかしい！
彼は驚いた顔から少し納得した顔になってから
「ミーナ　リュット　ラビットゴーレム？」
と私の名前を呼んでくれた。
ビリッと何かかけた。
顔が赤い気がする。先の恥ずかしさとは違う何かがあふれ出す。
「は、はい。えっと～」
彼をなんて呼べばいいかな？
「黒須。黒須　黒夜。クロスでもクロヤでもクロでも好きに呼んでくれ」
「クロス様はちょっと・・・クロさんで」
神様の名前は呼べませんよね・・・クロさん・・クロさん・・・うん。
「いくつか質問さしてもらってもいいかい？」
私がか、クロさんの名前を心の中で呟いているとクロさんに声をかけられた。
「ど、どうぞ」
またどもってしまった！
「その前に服を脱いでいいかい？」
・・ああ！確かにクロさんは疲れてるのに！気が付かないなんて！
「は、はひ」
【ミーナ噛みすぎじゃない？】
【クロさんかわいそー】
【深呼吸だよ！】
「ありがとう」
クロさんは笑顔でお礼を言ってくれるのに私は・・
「すまないんだが、そこにこれぐらいの石があるだろ？あそこに座って話をしたいから移動してもいいかい？」

「ど、どうぞ」
次は噛まないようにしないと。
クロさんはゆっくり移動して荷物を降ろし二枚着ていたのか服の一枚を脱ぎ始める。
【【・・・・】】
何だろ・・・思わず凝視してしまった。
「すまない待たせたね。じゃあ質問いいかな？」
準備を終えたクロさんは石に腰掛けた。
コクコク
私は気まずくて頷いてしまった。
「俺の事が怖い？」
【怖い？】
【怖いか怖くないかで言うと怖いかな？】
周りのみんなの言う事もわかる。
だから・・
コクコク

クロさんはがっくりしていた。
でも何だろ？この人には嘘をついてはいけない。そんな風に思う。
「それはどうして？」
「見たこと無い種族だから・・」
クロさんの様な種族は見たこと無い。クロさんの種族はみんなそうなのかな？
「君たちは誰に作られたの？」
誰？ん～お母さんやお父さんって意味じゃないですよね？なら
「神様に作ってもらいました」
クロさんは少し考えていました。
「この世界に危険な生き物はいる？例えば俺を襲いそうな生き物とか？」
クロさんのサイズなら・・
【魔物？】

【大型動物？】
「えっと・・魔物はいます」
「君たちは魔物と戦うの？」
「逃げます」
　逃げないと死んじゃう。
「あの～」
　私は少し気になった事をクロさんに聞きたくなった。
　クロさんは怖い人じゃない。
「ん？どうしたんだ？」
「クロさんはどこから来たんですか？」
　見たこと無い服に見たこと無い種族のクロさん。
「わからないんだ。急にここに居た」
「そう、なんですか・・・」
　クロさんは帰る場所がわからない迷子なんですか・・・
【クロさん迷子？】
【どうする？一応村に連絡しておく？】
【そうしよう。いい人みたいだし！】
「俺の似たような種族がいる町ってあるかい？」
　似た様な・・・似た・・村のインセクトさん達とは違うし・・・
「ん～あ！あります！」
「ちなみにどこかな？」
　クロさんは少し笑顔になりました。
「ずっとあの向こうです！」
　左の方を指差す。
　昔村に来たエルフの人が向こうから来たって言ってました！
「・・地図ってある？」
「地図は見たことないです」
「ずっとってどれくらい？」
　エルフの人もずっとって言ってました！
　でもどれくらいかわ聞いていませんでした・・
「わからないです」

キュウ～
ガサ
「あ・・」
【誰今の!?】
【ごめん・・】
【確かにお腹減った！】
【もうお昼だしね】
クロさんは腕を見ながら笑顔になった。
「お昼頃かな？長い間付き合わせて悪かったな」
お昼頃だしクロさんもお腹が減ったのかも知れない。悪いことをした。
「いえいえ！こちらこそ色々とすみません」
【返事来たよ！】
【どうだった？】
【いいって！】
【魔物も出るしほっとけないしって！】
「あ、あの～」
「ん？どうした？」
すこし困った顔になっていたクロさん。
「よければ私達に村に来ますか？」
「いいのか？俺はこのサイズだぞ？」
クロさんは少しうれしそうに笑顔になる。
「大、丈夫です」
「村のみんなに聞かなくていいのか？」
「は、はい。聞きましたので」
「聞いた？どうやって？」
「えっと・・スキルの《テレパス》で」
なんかすごい顔になった。
【すごい顔になってる】
【テレパスなかったのかな？】
「質問なんだが　魔法　スキル　魔術　とかってある？」

「えっと・・魔法　スキル　はあります」
　スキルはあるし。魔法はエルフさんが使ってた。
「ゲームの世界みたいだな。どうやって使うんだ？」
「？使えないんですか？」
「えっと。どうやって自分が出来る事がわかる？」
「えっと・・わからないです。考えた事も無くて」
「そうか・・」
　クロさんは考え込んでしまった。
「自分の出来る事を見る事とか出来ないか？」
「すみません。聞いた事がないです」
　質問してくれいるのに私は答えられないばっかりだ・・
「いや。ミーナが悪いわけじゃないんだ」
　うう・・
「スキルウィンドウ」
　？聞き逃した！
【今クロさんなんて言ったの!?】
【スキル、ウィンドウ？】
「スキル、ウィンドウ？」
　そう言うと目の前に青色のボードが出てきた。
「わ！なんか出ました！」
「はぁ？」
「すごいです！色々書いてます！」
　ボードには
　名前　ミーナ　リュット　ラビットゴーレム
　種族　ラビットゴーレム
　レベル　9
　スキル　《テレパス》
　呪文　　無し
　と書いてあった。
「ちょっと待て。ミーナ。何か見えるのか？」
「はい！スキルや名前とか色々書いてます！すごいです！」

クロさんが言った言葉を言ったらこんなボードが出てくるなんて！すごいです！
そう思ってるとボードに変化が現れる。
名前　ミーナ　リュット　ラビットゴーレム
種族　ラビットゴーレム
レベル　９
スキル　《テレパス》《自己再生》《兎》
呪文　無し
魔術　無し
と変化した。
「スキルウィンドウ！」
クロさんももう一度魔法の言葉を唱える。
【すごい！なにこれ！】
【すごい！みんな見て見て！】
【ねぇ私レベル４なんだけど？】
【私１０だ！】
【すごい！】
みんな見れるの!?すごい!!
「クロさんすごいです！」
「ハハハ・・ミーナのスキルやレベルは？」
？クロさんどうしたんでしょう？
「私はレベル９でスキルは《テレパス》《自己再生》《兎》です！クロさんはどうなんですか!?」
クロさんはこんなすごい呪文を知ってるんだしすごい人なんだ!!

第六話　ミーナとの会話（第三話）　後半　裏

「まあまあ。とりあえずみんな落ち着いてくれ。お腹も減っただろ？まずは村に向かわないか？」
【確かにお腹減ったね】
う、確かにお腹も減った。クロさんも疲れてるだろうし早く案内しなきゃ！
「あ、そうですね。クロさん案内します！」
【よし！行こう！】
【帰ろう！】
【もう、出でいいよね！】
【そういえばご飯取った？】
みんなでクロさんを村まで案内する。
もちろんいつも通り音を出来るだけ出さずみんなで固まって村へ向かう。
【クロさん近くで見ると大きいね！】
【服も見たこと無いね】
【光でキラキラしてるよ！】
【持ってる物なんだろ？】
【色々入ってるみたいだよ！】
仲間とは《テレパス》で話す。
みんな好奇心いっぱいでクロさんに興味津々だ。
クロさんは周りを見ながら少し難しい顔をしていた。
どうしたんだろ？もしかして不安なのかな？
確かに《テレパス》が出来ないと退屈だし、いつ着くか不安だと思う。

「クロさ～ん。もうすぐ着きま～す」
「お～う」
返事はさっきまでより柔らかく感じた。慣れてきたのだろうか？
もしそうなら少し仲良くなった気がしてうれしい。

そんな事を思ってると村が見えてきた。
「クロさん！着きましたよ！」
門の前にはいつもの様にシュバルツさんが村を守ってくれていた。
「お帰りみんな。あの人が？」
「はい！クロさんです！」
「クロさん！クロさん！こちらへ！」
私が呼ぶとクロさんはゆっくりと来てくれる。
前に来るとシュバルツさんはクロさんをじっと見る。
「確かに・・はじめまして。私の名前はシュバルツ　エアプランツウッドゴーレムよろしく」
「これはどうも。黒須　黒夜です。よろしくおねがいします」
クロさんはじっとシュバルツさんを凝視したと思ったら私の方を見た。
「？」
何だろ？どうしたんだろ？
私の方を見て顔が少し柔らかくなったら次はシュバルツさんをもう一度見た。
「？」
シュバルツさんも不思議に思っているみたい。
「どうしたんだ？」
「ゴーレムでもこんなにちがうんですね」
「？そらそうだよ私はウッドゴーレムだし、彼女はラビットゴーレムだ」
「あ、はい。」
どうしたんだろ？何か気になったのかな？
顔がまじめになったけど・・・
まあいいや。
「クロさん！ここが私達の村　リットベル・・・・・　です！」
「「「ようこそ！」」」

～シュバルツの話～

シュバルツ　エアプランツ　ウッドゴーレムは村唯一のウッドゴーレムだ。

元々我々ウッドゴーレムは旅をする種だ。

私の両親もそのまた両親も旅をしていた。

私も長い旅の末この村に腰を据えた。

【シュバルツさん！ちょっといいですか！】

【いいよ。どうしたんだい？】

【えっと、森に見たことない種族の人が居て迷子みたいだから村に来てもらっていい？】

村に見た事ない種族？

・・・どういう事だ？

【本当に見た事無い種族・・・・・・・なのかい？】

【うん！】

【・・・ミーナはなんて言いてた？】

【まだ何も言ってないけど、ミーナがその人と話してるけど大丈夫そう！】

ミーナが大丈夫なら大丈夫か・・

【ミーナが許可するなら村に来てもらっていいよ】

【ホント！よし！】

ミーナ達は警戒心と好奇心が非常に強くい種族だ。

そのミーナ達が村に案内する見た事ない種族か・・・

「いや、まさかな・・」

少ししたらミーナ達帰って来た。見た事無い種族と一緒に。

「クロさん！着きましたよ！」

彼は確かに見た事無い種族だった。

「お帰りみんな。あの人が？」

「はい！クロさんです！」

「クロさん！クロさん！こちらへ！」

珍しくミーナがはしゃいでいる。

（・・・・・）

目の前に件の彼が来た。
色々あるが・・・・
「確かに・・はじめまして。私の名前はシュバルツ　エアプランツウッドゴーレムよろしく」
「これはどうも。黒須　黒夜です。よろしくおねがいします」
クロス　クロヤ・・・クロス・・クロ
気づいたら彼は私を凝視していた。
「？」
「どうしたんだ？」
「ゴーレムでもこんなにちがうんですね」
この質問。どういう事だ？
「？そらそうだよ私はウッドゴーレムだし、彼女はラビットゴーレムだ」
「あ、はい。」
？違うのか？わからない。
「クロさん！ここが私達の村　リットベル・・・・・　です！」
確かなのはミーナが懐いている以上、無下には出来ない。
「「「ようこそ！」」」
まずは後で詳しい話を聞くか・・・

第七話　裏の裏

その日リーン達（分体）は本体に送る兵隊を作っていた。
『やれやれ、主も心配性ですね』
『そうですか？兵隊はあればあるだけいいでしょう』
『確かに』
『!?』
『メビウスどうした？急に波打って？』
話をしていると急にメビウスの体が波打つ。
『あ、りえない』
『だからどうしたんだ？』
『ク、クロ様が戻ってきた』
『『・・・・は？』』

～～～～

『ホントだ・・・』
『本当に主だ・・』
私がクロ様を感知した場所を除くと確かにクロ様がそこにはいた。
見たことの無い黒い服を着て黒いカバンを持ち森の中に立っていた。
『どうなっているんだ？』
『わからない』
わからない。クロ様は本体と一緒に居られる。
では目の前のクロ様は誰だ？
あのクロ様の圧倒的な雰囲気は無く私達が触れれば消えてしまいそうな程弱い存在だ。
だがあの方は確かにクロ様だとわかる。
『どうする？』
『まずは本体に連絡だな』
『そうだね』
リーンがクロさま（発見した）を見ている間にカラットが本体に連

絡する。

マスターと人型になった私達である部屋で休んでいた。
褐色の黒髪で後ろリボンが特徴の幼女姿のリーン
アルビノで腰まで長い髪が特徴の幼女姿のメビウス
金髪のツインテールの赤い目の特徴の幼女姿の私
いつのもメイド服に青髪が特徴の非幼女姿のブルー
昔すごく色々言われた姿だけど私達はこの姿を気に入っている。
本当の姿が一番好きだがこの部屋では元に戻れない。
なのでこの人間形態でみんなでゆっくりしていた。

『もしもし』
『はいはい』

分体から連絡なんて珍しい事だ。
『珍しい、どうしたの？』
『えっと・・・そっちにマスターいますか？』
？一緒に居るマスターの方を見る。
マスターは色々あってイライラされていた。
・・・全部あの女のせいだ・・
『マスターは居るよ？イライラしてるけど・・・どうしたの？』
『・・・こっちにもマスターが居るんですよ』
『え？』
私はマスターをもう一度見る。
イライラを通り越して不貞寝しようとしてるマスターが見える。
『マスターが？』
『はい』
『マスターいいですか？』
「何だよカラット。俺はこのイライラを解消するため今日は不貞寝す

るんだ。買い物とかなら明日にしてくれ。いや、してください」
大分マお疲れの様だ。
でもこれは伝えなくては後で怒られるだろう。
『買い物は明日行きたいですが・・マスターの世界の話です』
「あ～懐かしい・・帰りたい・・ゆっくりしたい・・・旅したい・・」
『主。戻って来てください』
マスターが現実逃避しそうになったのを人型のリーンがマスターを揺らし現実に引き戻す。
「あ～で、なんだ？あいつらと不干渉を取り付けたはずだからあいつら関係じゃないと思うが・・」
『はい。リベア関係ではありません。どうやらマスターがマスターの世界に居るそうです』
「はぁ？」

「つまり、俺がもう一人世界に現れたと？」
『はい。どうしましょう？』
『偽者ではなさそうですね』
「あ～もしかしたら」
俺はメビウスに世界に結界を張った。
俺はこの世界に来る時に世界に穴を開けず俺を通す様に結界を調整した。
で、たまたま運の悪い平行世界の俺が迷い込んだと・・・
「これが俺の仮説。どうだ？」
『ありえますね』
『もしそうならどうします？』
「どうするか？俺らまだまだ帰れないしな。とりあえずあいつらに任せるか・・」

任せれた結果こうなった。

『この主もなかなか・・・』
『こう・・・くるね』
『昔のクロ様って感じですね！』

『アレ？このラビットゴーレム長だね』
『ああ。だからか』
『長は位が高いから影響を受けたんだな』

『スキルウィンドウかぁ・・』
『どうします？』
『作ります？』
『そうだな』
『あ』
『間に合わなかった・・』

『よくやった！ラビットゴーレム！』
『スキルウィンドウ作ってよかったですね』
『マップは時間かかるね』
『仕方ないね』
『急いで作ったから手直しするね』
『鑑定？』
『アナライズ？違うかな？』
『調整するか・・』

こうして世界は変わっていく。

第八話　宴会

さて・・・わかった事がいくつかある。
この世界は地獄だ。

夜、町の広場では中央にキャンプファイヤーがありその周りを村中の種族が居るだろ。
俺の周りには人だかりが出来ている。
と、言っても人・では無い。
ゴーレム　インセクト　オーク　ゴブリン
明らかに魔物達に囲まれてる俺。
俺を歓迎して宴会を開いてくれている。らしい。
「クロさん食べ無いんですか?」
「・・・・・」
隣には白い兎のゴーレム、ミーナが居る。
目の前には二つにパックリ割れている猪の頭等が置いてある。
おお!なんと堂堂とした貫禄だろうか?目がまるでこっちを見てるような気がする。
そんな目で見るな責めるな。俺のせいじゃない。
「ささ」
声をかけてきたのはオークゴブリンでこの村【リットベル】の村長のギルイット　ローズ　オークゴブリンだ。
見た目は完全に大きな二足歩行の毛深い豚さんだ。ただし緑で角生えてるけど。
「さっき取ってきたばかりで新鮮ですどうぞ」
まさかの生である。
あの時魚と言っていれば・・・
「お～い魔馬魚(ママギョ)取ってきたぞ!」
リザードマンが大きな声を上げながらでこちらにやってくる。

リザードマンは完全に蜥蜴である。鱗が硬そう・・
手に茶色い大きな三つ目の唇が大きなうまずらの魚を持っていた。
「おお、リットン!大きな魔馬魚だな!クロさん魚もきましたので魚もどうですか?」

あの時、魚でも同じだったな。
「クロさん?」
こっちを見るんじゃない。こんなの文化人の俺では無理だ。
冷や汗がヤバイ。まずこう・・・血の匂い何とかなりませんか?
「クロさんこれはこうやって」
おい。やめろ!その手に持ってるスプーンでアレをすくうなよ!
「はい。・・・・あ、あ~ん」
二足歩行の兎にアボカド?の様な緑の果物を救った（誤字ではない）
これは果物だが次はアレかもしれん。アレは無理だ。つまり・・・
「あ~ん」
硬い。味は甘い。でも青臭い。甘さは果物というより砂糖に近い。
お土産で貰ったサトウキビを昔生でかじったがアレに近い。
「・・・・うまい!!もうこれだけでいい!もっとくれ!」
「本当ですか!よかったです!まだまだありますか言ってくださいね!」
どうしてこうなった・・・

俺はミーナに着いて行って村長と話をした。
村で一番大きな木造の家に上がり会話をした。
はっきり言って滅茶苦茶怖かった。
そらはじめてみるオークだ。生オーク。
「ようこそリットベルへ歓迎します」
「はじめまして。黒須　黒夜です」

「私は村長のギルイット　ローズ　オークゴブリンといいます。クロさんとお呼びしても？」
「はい。村長さんは」
「ギルイットとお呼びください。お腹も減ったでしょう。まだ狩りに出た者が帰ってませんのでこんな物しか出せないですが・・・」
　出てきたのは木のお椀にいっぱい入った木苺だ。
「いただきます」
「ミーナも食べなさい」
「いいんですか!?」
「どうぞ」
「わーい！」
「それでギルイットさん質問いいですか？」
　木苺をみんなで食べながら話をしたら思ったよりやさしい人？だった。
　わかった事は種族は本当に多種多様だ。
　村に入った時にゴブリン　リザードマン　オーク　ゴーレムはいるのは見た。
　でも聞けばミーナのようにラビットゴーレムやハイオークやレッドリザードマンみたいに派生がすごい。
　ちなみにギルイットさんの奥さんはブルーリザードマンだった。
　無茶苦茶すぎないかこの世界！
　ちなみにブルーリザードマンは微かに鱗が青い。

　宴会は村の広場でやる事になった。
　キャンプファイヤーをやるようで木でやぐら？の様な物を中央に立てている。
　で宴会が始まる前に肉か魚か聞かれたわけだ。
「クロさんは肉と魚どっちが好きですか？」
　隣で村を案内してくれているミーナが聞いてきた。
「肉かな？」
　焼肉大好き。

「わかりました！」
この時は知らなかったんだ・・・
まさか目の前で猪の頭をカチ割るなんて・・・

「お肉はどうですか？」
「いや。これだけでいいよ」
（むしろこれだけでいい）
俺は黙々とサトウキビのパチもんを頬張る。
この村は木材で作られている。
つまりある程度文化的だと思っていた。
だがこの世界の文化レベルはおかしかった。
まず食べ物は煮る、焼く、生、以上。
食器はあるのに調理法が確立していない。
つかスプーンはわかる。フォークわかる。でも箸はおかしいだろ!?
周りに人間が居ないから調理法が無いのはわかる。
でも箸はありえない。つまりこの村に箸を伝えた何かがいる。
「ミーナ。そこの箸を取ってくれ」
「？箸ですか？どうぞ」
「・・・ちなみに箸は誰が使うの？」
「箸は誰も使わないですね」
「何で箸があるの？」
「食器・道具だからですよね？」
「・・・ああ・・そうだな」
「クロさん？」
なんだこの世界・・・意味がわからない・・
わかることはまず目の前のアボカドもどきをひたすら食べてお腹いっぱいアピールすればアレを食べなくてすむという事だ。
「お酒はどうですか？」
「いえ、ちょっと・・・」

この調子なら噛み酒の可能性が高い。
噛み酒とは酒の原料を噛み、口の菌を付着させそれを醗酵させた物が噛み酒だ。
ああ・・・帰りたい。
帰ってカウチポテトしたい・・・

第九話　宴会後

地獄の様な宴会が終わった。
俺の腹は既に【モリス】サトウキビの様な果実でいっぱいだ。
ミーナの家に泊まるか聞いてきたが遠慮さして貰った。
ギルイットさんが家を用意してくれた。
何でも空き家が数件あってそれを村長であるギルイットさんが管理しているそうだ。
もう夜で周囲は暗い。
ギルイットさんは蝋燭をいくつかと木の燭台を用意してくれた。
家は木造立ての一階建ての平屋だった。
扉には鍵がついていて鉄の鍵まで付いていた。
鍵を開け中に入ると強い木造の匂いが子供の頃親とコテージに泊まったのを思い出した。
鍵を閉め、家を軽く散策する。
部屋割りはリビング　寝室　様式トイレ　キッチン　空き部屋だ。
もう突っ込む事が疲れた。
リビングはテーブル　椅子　とすごく普通に見える。
トイレは流石に水洗では無かった。
でも落下式なのに匂いはしなかった。後便座は大中小のサイズがあった。
キッチンは中華鍋、出し巻き卵用フライパンまであった。
だが調味料等は無いしガスコンロは無かった。・・コンロのスペースはあった。
何だろ？この・・・格式というかキッチンとはこうだからこのモノを置くという感じだ。
水道は無し（当たり前だ）
でも流し台はあるんだよな～
空き部屋は空き家だ。地下室も無い。
スライド式のガラスの無い木窓はあるがな。
寝室は流石にふかふかベットは無かった。

すのこベットに毛皮らしき物が3枚置いてあった。
触って見るとびっくりするぐらい柔らかい。
硬いとは違う、しなやかな毛で長さは・犬ぐらい・・
(犬じゃないよな?)
俺は触るのをやめ毛皮をゆっくりと丁寧に空き部屋に持っていく。
今日は疲れた。ゆっくり寝たい。ハンガーらしき物を使ってスーツをかけ、すのこベットに横になる。
「スキルウィンドウ」
名前　黒須　黒夜
種族　人間
レベル　1
スキル　鑑定　マップ
呪文　無し
魔術　無し
これだよ・・・何なんだ?何で思ったり欲しいモノがスキルになる?
「どうせなら帰らして・・」
そう言おうとして俺は思った。
帰ってどうする?
両親も居ない
恋人も居ない
貯金も少ない
仕事もきついし
楽しみも少なかった
(・・・友人ぐらいだな・・)
友達は居た。すごく仲のいいヤツだ。そいつも人生に疲れていていつも仕事やめたい。二次元最高!異世界転移するわ。って言ってたな。
「どうせなら、チートを持って友人の将太もくれればいいのに」
どうせ意味無い事だ。
もし言った通りになるなら最高だ。無ければ別に普通だ。

もう寝よう・・・明日は飯を自分で作ろう・・

〜将太サイド〜

はぁ・・ツレのクロが居なくなって1ヶ月経った。

仕事に行く途中に居なくなった。

家に荷物あるしまず俺へ何の連絡も無かった。

思ったよりショックだ。

俺とクロは幼馴染だ。

喧嘩した事もあったが直ぐに仲直りした。

あいつは細かい事を気にしすぎでいつか潰れるんじゃないかと心配していた。

消えた日の来週辺りに遊びに誘ってやるつもりだった。

クロはライブは行った事無いし興味は無いが一度連れて行ってやるつもりだったんだ。

俺はそんなに頼りなかったかな?

俺も仕事で大変だったがクロの相談位は聞く時間は取れる。

なぁクロ。どこにいるか知らんしお前の事だ。フラッと戻ってくるかもしれないな。

警察にお前のパソコン持ってかれたぞ?すまんな。ハードディスクは無理だった。

死んでないか・・・

俺にぐらい相談しろよ。

〜三紳サイド〜

『どうする?』

『流石にちょっと無理かな?』

『まず無制限に叶えるのか?』

『じゃあこうしよう。ポイント制にしよう。ポイントで願いを叶える』
『わかりました。それならクロ様も納得するでしょう』
『この友人はどうする？流石にマスター怒るんじゃあ』
『確かに別の世界からの呼び出しですからね』
『まずは向こうの世界を探して直接聞いてみる？』
『そうするか・・』

『・・・許可出た・・』
『うっそ!?』
『なんか、むしろ数百人単位で魔力と交換して欲しいらしい』
『・・・マスターと大違いですね』
『なんで魔力？』
『きっと無いから欲しいのでは？』

『じゃあまず友人に聞きこっちに着たければ呼ぶ』
『クロさんはポイントを溜めると願いを叶える』
『ぐらい？また調整調整でいいかな？』
『そうだな。で誰が交渉しに行く？』
『・・・・・・』
『・・・・・・』

第十話　朝一

朝起きる。
最悪の目覚めだ。
体は痛いし腹も痛い。
腹はモリスの食べ過ぎだ。
もう当分モリスは・・・いや。アレよりはモリスでいい。
「ん～～～」
背を伸ばす。
周りを見るとまだ真っ暗だ。そらそうだ。
俺は手探りで木窓をゆっくりとスライドさせる。
日の光が部屋を明るくし俺の目にダメージを与える。
ゆっくり開けたが思ったより眩しい。目が痛い。
周りを見渡す。
誰も居ない・
それそうだ。居たらビックリする。
将太は居ない。流石に言った通りにならんか・・・

何時だろう？ベット横の机に上に置いた腕時計を確認すると６時だった。
「ふぁ～」
寝た時間は・・・クソ覚えてない。
まあ久し振りにクッソ寝た。
まずは洗面所に行き顔を・・
「クッソ。水がねぇ」
そういえば昨日井戸を教えられたな。
鍵を開け家を出たら目の前に水が入った小さな桶があった。
「・・・マジかよ・・」
これはアレか？誰かが用意してくれたのか？
誰がよ？
（ミーナかな？）

俺はありがたく桶を取り家に戻り顔洗う。
（あ～髭が少し生えてる・・てか鏡欲しい）
顔を洗って髭チェックしてタオルが無いことに絶望してハンカチで拭く。
やる事。欲しいものが多すぎる。とりあえず書くか・・
まず鏡無しで身だしなみを整える。
その後ギルイットさんの家に行こう。

外に出てギルイットさんの家へ向かう。
「お。おはようさん！よく寝れたかい？えっと・・」
歩いていると白い鱗に覆われてる角のある大男オーガに話かけられる。
「あ、ああ。おはようございます。黒須　黒夜です。クロとでも呼んでください」
めっちゃ怖い。ヤンキーやヤの職業さんなんて目じゃない。
威圧感というか本能で怖い。
手は俺を一瞬でミンチに出来るだろうし口は頭事食べれるだろう。
「そうそう。クロさんだったな！俺は【マキマム　ガーリック　オーガリザードマン】だ。昨日は猪食べなかったろ？調子は治ったかい？」
「はいマキマムさん。ゆっくり休めました。ありがとうございます」
「そうか！そうか！よかったよかった！今からギルイットさん家かい？」
オーガさんは嬉しそうにそう言ってくれる。
見た目は重要である。
「はい」
「今ならギルイットさんは家じゃなくて畑だな！場所は向こうだ。案内しようか？」
「大丈夫です。散歩がてらゆっくり行きます」
「・・・散歩か！いいよな！何かあればいつでも話かけてくれよ！」
ドスンドスンと足音を立ててマキマムさんは去っていく。

多分見抜かれたな。俺の足が震えているのに。
酷い奴だな俺。かなり自己嫌悪。
「いくら怖くても無いな・・・」
俺は走ってマキマムさんに向かう。
「ハァハァ・・マキマムさん!!」
「・・・どうしたんだ?クロさん」
「怖がってすみませんでした!」
俺は頭を下げる。
「俺、マキマムさんの様な種族にあった事が無くて失礼な態度を取ってしまってすみません!」
マキマムさんはポリポリと頭をかく。
「クロさん。気にするな。誰にだって怖い者がある。俺だって母ちゃん怖いしな」
マキマムさんはニカッは笑い俺の肩を軽く置き去っていく。
俺の震えは止まっていた。
マキマムさんが女なら惚れてたね。
俺はマキマムさんにいつかお礼をする事を決意しギルイットさんに会いにいく。

第十一話　トマトと勉強

マキマムさんの言った方向へ５分ほど歩いたらギルイットさんは畑仕事をしていた。
見た目が完全に畑を荒らしてる風に見えるがな。
ギルイットさん赤いトマトに似た果実をまじまじと見て笑っている。
「おはようございます」
「おお！おはようございます。よく寝れましたか？」
「はい。お陰様でゆっくり寝れました」
「よかったよかった」
「今日はお願いがありまして・・」
「お願いですか？」
「はい。何か書くものってありますか？」
「書くものですか・・・木板と黒石なら家にありますよ」
「譲って頂いてもいいですか？」
「どうぞどうぞ。直ぐ持ってきますよ」
「あ。どうせなら手伝いますよ。宴会まで開いて貰いましたし」
「そんな。クロさんはお客さんだ。手伝わせるなんて！」
「私がやりたいんですよ」
俺は上着とシャツを脱ぎ近くにかける。
薄着に成り腕まくりをして屈伸して準備万端だとアピールする。
「・・・・分かりました。ではこのトマトの回収お願いします」
「・・トマト？」
「はい。この赤い実の名前です」
トマトなのか・・・
日が真上に来るトマトを回収した。
木で出来たカゴが５つほどいっぱいになった。
「クロさ～ん」
「ん？」

遠くからミーナの声が聞こえる。
声の聞こえる方角を見るとミーナがぴょんぴょんとこっちに飛んで来ている。
「はぁはぁ。おはようございますクロさん。探しましたよ」
「おはようミーナ。ミーナだよね？水。ありがとう。それとごめんごめん。つい楽しくて忘れてたよ」
「いえいえ。でも忘れるなんてひどいです・・・」
確かに酷いが楽しかった。
疲れたし汗が酷いしミーナにもすまないと思っている。
でも楽しかった。
トマトを取ってカゴに入れるだけだ。
なぜだろな？
「クロさん、そろそろ終わりましょうか」
そう言って汗を拭きながらギルイットさんが近づいてきた。
「お疲れ様です。ありがとうございました。これ、よければどうぞ」
ギルイットさんは赤く熟したトマトを差し出してくる。
「ありがとうございます」
俺はトマトを齧る。甘くないし青臭い酷いトマトだ。
でも今までで一番美味しいと思ったトマトだ。

ギルイットさんから木板とナイフと黒石と呼ばれる棒状簿炭を大量に貰った。
広場には小さなテーブルが幾つかありそこの一角でミーナにこの世界について教えてもらう。
「クロさん準備はいいですか？」
「ああ」
「まずはどこから教えればいいですか？」
「そうだな・・文字、童話・・物語や昔話等かな？」
「分かりました」
教えて貰った文字は全く知らない文字だった。
象形文字に近いかもしれない。

物語は幾つか聞いた。
生命を司る　白い仮面の姿の神様　【リーン】
環境を司る　輝く魚の姿の神様　【カラット】
輪廻転生を司る　リングの姿の神様　【メビウス】
そして全ての神様を創り出し創造を司る　【クロス】

魔物は2種類いるらしい。
ダンジョンで生まれる規則正しい魔物
野良と言われる個体差が激しい魔物だ。
後、この世界がチグハグな理由がなんとなくわかった。
この世界は誰かが創った世界だ。
そして捨てたか居なくなった世界。
家は作り、ある程度の知識は与えたみたいだ。
だがそこまで、後は放ったらかし。
ミーナに聞いたら曾曾曾祖父さんから伝わってる話や知識があるらしい。
鍛冶や建築がそうだ。
で・・・食事が酷い理由がわかった。
ここの村のみんなは生で食べても問題ない。
更に料理する人間が多分途中で誰にも伝えられず死んだのだろう。
家庭料理だけでは限界があったのだろう。
ミーナの知ってる限りフライパン等の調理器具はほとんどあるだけ、儀式や形式で設置してるみたいだ。
そして面白い話があった。
昔話でコンロ、扇風機、携帯電話はあったそうだ。
全て魔物から取れる魔石等が必要だったそうだ。
だがこの村には無いし他の村にも無いらしい。
推測だが、外で使う携帯は外に持ち出した後無くしたり魔物にやられたりして無くなったんだろう。
扇風機やコンロには魔石が必要だ。
つまり魔物を倒せないと使えない。

その為、少しずつ使われなくなったんだろう。
野良の魔物はかなり危険らしい。
数が少ないが出たら一大事だそうだ。
ダンジョンと呼ばれる建物や洞窟もあるそうだ。
近づくと雰囲気が変わるから直ぐわかるらしい。
この辺にはダンジョンは無く魔石が取れなくなったのだろう。
さて・・・ある程度聞いたが俺はこれからどうしよう?
このまま村にいるか、たまに来る商人についてもう少し大きい村に行くという手もある。
だがまずは・・・
「ありがとうミーナ」
「いえいえ!お役に立てましたか?」
「すごく助かったよ。本当にありがとう」
「ホントですか!?」
ミーナは嬉しそうに笑った。
「そろそろ、晩ご飯だろ?お礼に俺が作るよ」
美味しい晩ご飯を食べる事だ。

第十二話　クッキング

「晩ご飯ですか？」
　ミーナは不思議そうな顔をする。
「そう」
　まずは材料集めだな。
　集められそうなのは
　トマト
　猪の肉
　モリス（サトウキビ）
　後は畑を回る事と調味料だな。
「ミーナ、食材を集めたいんだがどうしたらいい？」
「ん～みんな言えば貰えると思いますが・・・何が欲しいですか？」
「そうだな。調味料とか欲しいから村の案内ついでに交渉とどんな味か教えて欲しい」
「分かりました！」
　ミーナはぴょんぴょんと俺の前を跳ね村の案内と食材の交渉をしてくれる。
　村には井戸や倉庫等があって作物が取れなくてもある程度備蓄もあるようだ。
　調味料だが聞けば塩はあるそうだ。
　削っても少ししたら再生する1メートル程の大きさの岩塩だ。
　後、唐辛子があった。聞けば、眠気覚ましとカイロ替わりに使うそうだ。
　野菜類はアケビ、林檎、人参、じゃがいもに似た芋、青い苦い果実、木苺があった。
　青い果実は【ポール】と言って苦くエグミが強いが毒消しになるそうだ。
　つかモリスより林檎をくれよ。
　余談だが倒木にシメジに似たキノコが生えていた。
　流石に使わん。キノコは怖い。

後は油があれば・・・
猪の肉を見たが種類が違うのか脂身が豚と比べ物にならない程少なかった。
（油・・・・）
オリーブ　菜種　動物生　後は？
「ん～」
「どうしたんですか？」
交渉で今日も宴会で今日のメインは俺の料理になった。
そのおかげ？で目の前には大量にあった。
「油がな・・」
「油ですか？油なら【ミット】さんの・・」
「すまんが、それ以外だ」
【ミット】・・なんちゃらさんは二足歩行のカエル・・フロッグマンだ。
食用では無く滑り止めの為にフロッグマンのミットさんの油を使うそうだ。
ゴマ、種・・バター・・バターか!?
でも牛乳かぁ・・あるとしたら猪？ヤバイよな・・
「ん～」
「油ですか・・・」
「まあ無くてもいいんだが・・・」
あれば野菜炒めができた。
白菜があれば猪鍋だ。
後はＢＢＱ位か？
（あ・・イケルか？）
昔、アケビの中をくり抜き中にミンチ、野菜を入れて揚げるか焼く料理を見たことがある。
てかよくこれで晩飯作るとか言ってたな！
後は山ならムカゴがあれば自然薯があるんだが・・・
（もう日が暮れるな）
もう山には入れない。
そして火の準備はマキマムさんがやってくれている。

火は外なら釜戸、中なら炭みたいだ。
一度試すか？
まずはミンチを作るか・・
「ミーナ手伝ってくれるか？」
「はい！どうすればいいですか？」
「肉を包丁で粘り気が出るまで叩いてくれ」
「叩くですか？」
「そう、こうやってくれ」
まな板に猪の肉の塊を置き、脂身を出来るだけ取る。
それをある程度細かく切り包丁の裏で叩く。
出来るだけリズムを取るのがコツ・・と聞いた。
「うわぁ～すごいです」
「じゃあ頼んだよ」
「はい」
（・・・・）
椅子を使ってキッチンで包丁を持って調理する裸エプロン姿の兎か・・・
（想像異常にシュールだ）
「トントントン。これ面白いです！」
「それはよかった」
さて、俺はその間に野菜を出来るだけ細かく切る。
その後じゃがいもに似た芋【芋】を擦る。
なんで擦りおろし器まであるんだ。
「粘り気ってこれぐらいですか？」
「うん。こんなものかな？」
いい感じに出てきた。アレ？塩はここでだっけ？
ちょっと塩を入れてもう少し叩いて貰う。
出来た物と野菜を混ぜちょっとだけポールを入れる。
見た目はハンバー・・・あ。
トマトがあるならケチャップが出来て煮込みハンバーグに出来るじゃん・・・

試しにトマトを潰して貰い煮込む予定。
「アケビと木苺と林檎はデザートにするか・・」
林檎は切って温めて甘くなる。
それを木苺の潰したペーストにしてかけるか？
アケビは温めると甘くなるのか？
全部試すか・・・

～試した～
「どうですか？」
ミーナは手元を覗き込む。
俺の手元にはケチャップモドキ
ハンバーグモドキ
デザート2品　アケビ　焼き林檎
はっきりいいってまずい。
ケチャップは品種が違うからかスゲー青臭い。
ハンバーグモドキはボソボソだし肉汁とかはほとんど出ない。
てか玉ねぎや繋ぎが違うし多分血抜きしてないから血生臭い。
デザートも林檎は酸っぱい程アップルパイに合うと聞いた。
そら考えたら砂糖で煮るはずだしな！
だから林檎の酸っぱさ木苺の酸っぱさのダブルで酸っぱい。
アケビはちょっと甘くなったが・・・デロデロになって食べ難い。
「うわぁ～すごいです！」
「そう思う？」
「クロさん。すごく美味しそうな匂いしますよ！」
「・・・本当ですか？」
ちょっとだけ味見してもらう。
「美味しい！」
「これは・・美味しいですね。初めての味です。お酒が欲しくなります」
マジで？

第十三話　第二回宴会

「すごい料理だ！」
「美味しいです！」
「これすごいです！どうやって作るんですか？」
「ミーナちゃんも手伝ったのかい？」
「作り方教えてくれよ！」
「もっと酒出してくれ！」
宴会が始まり俺の作った料理だ消費されていく。
「・・・・」
評判はすごくいい。
多分食べた事のない味でうまいと感じているのだろう。
だが納得いかん。
「クロさん。どうしたんですか？」
「ミーナか・・なんでも無いよ」
「そうですか？」
まあお礼にはなったかな？
（あ・・・）
今気づいたんだが何の為の《鑑定》だ・・
あのキノコや他の食材？にも使っとけよ！
俺忘れ過ぎ！
まずは酒に使う。噛み酒じゃありません様に！
《鑑定》
名前　リットベル産果樹酒
特性　高揚感（小）
説明　リットベルで作られた果実を潰して作ったお酒。アルコール度数１２
・・・・微妙・・潰した・・・・わからん・・・・
キノコ（シメジ似）は？
《鑑定》
名前　シメジィ

特性　毒（小）
説明　加熱すると微量の毒が出る。生で食べると美味しい。
キノコは怖いね！加熱したらダメとか知らん！危ない危ない・・・
だがこれでなんとかなる！鑑定マジ流石！忘れててごめんよ。
「クロさん」
「はい」
鑑定していたらギルイットさんに急に話かけられてビックリした。
「ありがとう。私達は今日以上に美味しい料理を食べた事がない」
「それを言うなら泊めて頂いたし食料も分けていただきました。ありがとうございます」
「クロさん。よければこの村で暮らしませんか？」
「え？」
「クロさんには私達に無い特別な力と知恵があるでしょう」
「・・・」
（鑑定か？知識は・・まあ特殊な知識ではあるな）
「・・門番のシュバルツは外の村から来たんですよ」
「そうなんですか？」
「はい。私は村の外の話を知っています。この村にはクロさんと同じ種族はいません。私が知っている限りでは同じ種族も知りません」
「・・・・・」
（・・・これは・・アレかな？心配してくれてるんだな・・）
確かにこの人？達はいい人だ。
でも他の人はわからない。
そして村の外・・
（つまり、村の外は危険だから村で住まないかと・・）
「少し考えさして下さい」
ギルイットさんと俺は顔が強張っていたようで俺の返事でギルイットさんは笑顔になった。
「わかりました」
離れていくギルイットさんの背中を見つつ俺は考える。
他の村に行く理由とメリットデメリットを考える。

村を出ると
1他の種族に会える。
2もしかしたら人間に会える。
3帰る方法も見つかるかもしれない・・
村に残ると
1ミーナ達と一緒に暮らせる
2もしかしたら俺以外の人間も来るかも
3森に手掛かりがあるかも
どうする？
「クロさ～ん」
いつの間にか居なかったミーナがコッチを来る。
「お話終わりました？」
「ああ」
「？どうしたんですか？元気ないですか？」
「そんなこと無いよ」
丁度いい所にミーナの頭があったので撫でてみた。
「へ？ク、クロさん!?」
思ったよりやらかい・・このなんだろすごい高級なカーペットの手触りだ。
プルプルしてる。
でも癒された。
もう少し考えるか・・・

第十四話　狩　前半

あの日から数日が経った。
俺の身に変わった事が二つある。
一つ目スキルウィンドウ
名前　黒須　黒夜
種族　人間
レベル　1
スキル　鑑定　マップ　15ポイント
呪文　無し
魔術　無し
さてどこからツッコメばいいか・・・
マップは文字通り俺を基点に半径10㌔ぐらい?を地域マップが見れる。
簡単に言うと航空写真を見れる。以上！
使い難いね。
そして問題はこの15ポイントだ。
なにかわからん！
初めて見たときは13ポイントだった。
その後目が覚めたら15ポイントだった。
わからんものは放置だ。
二つ目
なんかマッチョになった。
前は鍛えても無いから筋肉に肉の字もなったがなんか少しづつマッチョになった。
なんか斧ぐらい普通に持ててしまう。
明らかにこの変化はおかしい。
まるでどっかのシェフのスープ飲んだみたいだ。
それは言いすぎか・・
俺は結局まだ何も決めずにふらふらしている。
村を出るのか?

村に残るのか？
どうしても決めれない。
だから俺は気を紛らわす為に手伝いをする。
料理を教え、森へみんなで行って食材探し。
今は自然薯、ムカゴ、シメジ、しいたけ、まいたけ等色々な食材が見つかった。
みんなに焼く、煮る、蒸す、炙る等の調理方法。
味付けや器具の使い方等様々な使い方レシピを教えた。
まあ自分の知ってる範囲だ。大した事は無い。
スーツは着ておくと直ぐダメになるから使うのをやめた。
今は作って貰った麻の服と動物の皮靴を着ている。
新しい靴もそうだが着心地は・・・察してくれ。

今日は狩りに出かけるそうで俺も着いていき血抜きを教える予定。
血抜きはしたこと無いし見た事も無い。
でもある程度予想は付くし血抜きしたという結果は知っている。
知ってると知らないはまったく違う。
ゴールを知ってる分ある程度教えるだけで時間はかからずできる様になるだろう。

広場にはリーダーのマキマムさん（オーガリザードマン）とリットンさん（リザードマン）とタニアさん（インセクトゴブリン）達が集まり狩りに出かける。
タニア　メル　インセクトゴブリン
見た目は完全に魔物だ。まあ村のほとんどに言えるが・・・
体は小さく色は緑。見た目は二足歩行のコオロギに近い。でもゴブリンの特徴に角が生えてる。
てか触覚に変わりに角。顔が昆虫よりゴブリンに似てる程度だ。
「みんな知ってると思うがクロさんが今日は狩りに付いてきてくれる。クロさんは狩り等は初めてという事でタニア、フォローを頼む

ぞ」
「初めて話すよな？私はタニアよろしく」
「クロです。よろしくお願いします」
最近は黒須と名乗っていない。
神の名を使うのはあまりよくないとギルイットさんから教えられた。
名乗るならクロと名乗ったほうがいいと。
「今日の獲物は鹿か猪だ。罠を見てもしかかっていないなら周囲を確認する。リットンもし魔物が出たら？」
「逃げる」
「タニア」
「クロをつれて逃げる」
「クロさん」
「逃げます」
「よし！」
魔物はかなり危険だから逃げろ。鉄則らしい。
まずは逃げてみんなに報告していから対応するらしい。
そらそうだ。魔物に気付かれず村に近づかれたらそれだけで村の危機だ。
知ってて襲われるのと知らずに襲われるのは大きな違いがある。
そしてこの世界の魔物の特性も厄介だそうだ。
知らない魔物だったら村を捨てるらしい。
魔物やばすぎ!!

森に入って2時間経過した。
道は獣道を通る。
基本的に武器は槍遠くから攻撃できるし投げれる。
「クロ。この道はわかるか？」
俺の後ろを歩いていたタニアが脇を指差した。
その場所には小さく枝が曲がり雑草が不規則にずれて道に見える。
「えっと、小さな動物ですか？」

「お、わかるのか？これはミーナ達の道だ」
「ミーナ達ですか？」
「そう。覚えとくと村や連絡を取れる。この方向だ。枝が全部こっちに向いてるだろ？こっちが進む方向。で村はこっちだ。もし森で迷ったらこの道を見つければ帰れる」
　枝が村の方向とは逆に向いて分かれてる。
　村に帰りやすく進み難くなってる。
「ちなみに普通の獣道を見分ける方法は？」
「それは枝の規則性を見ればわかるよ。枝がある程度規則的に向いていたらラビット種。獣ならもっとバラバラだ」
「なるほど」
「もし連絡を取りたいならここに石を積んどくとわかる。注意点は道を壊さない事。道を壊して石を積むと道を壊してごめんという意味になる。道が壊されてなくて石が積んであったら近くで連絡を待ってるって意味よ」
「覚えておきます」
「そうしてくれ。もし何かあって私達とはぐれたらこの道を探してくれ」
「はい」
　もう少し進むとある程度開けていて大きな石２つが積んであった。
「ここで休憩する。見張りはまず俺、次にリットンだ」
　聞けば開けた場所、石が積んである場所は休憩場。
　石の片方で暖を取ってもいい。
　罠禁止
　冷めた石を見つけたら詰む
　使用後は処理する
　がルールだそうだ。
　俺は椅子代わりに近くの石を集めそこに座る。
　疲れた・・思ったより覚える事が多い。
　獣道、森のルール、狩場等地域のルールらしく覚えないと、稀にかち合う他の村の狩人と揉める原因になるそうだ。

俺が村に残るか去るかどっちの道を選んでも苦労しろうだ。
思える事が多すぎる。

第十五話　狩　中盤

休憩中にストレッチをする。
軽くマッチョになったが筋を痛めたり肉離れを起こさない様に隙をみてやる。
効果は知らない。本当に正しいかどうかは未来の俺が知ってるだろう。
「クロは変わってるよな」
「そうですか？」
俺からしたらこの世界が変わってるがな。
「さあ休憩も終わりだ。クロさんもう少しで罠がある場所です。この辺からは注意してください」
「はい」
さて、ここから本番だ。
ここまでは人？の土地だらかある程度安全だし罠も無かった。
だがここからは獣の住処（テリトリー）だ。
獣の生息圏、住処、狩場だ。
俺は注意深く慎重に進む。
他の狩人が仕掛けた罠は無いか？
蔦で足を引っ掛けないか？
葉っぱや枝で腕を切らないか？
虫や蛇などの生き物が近づいて来ないか？
音は最低限か？
自分なりに考えて本気で注意する。
「「・・・・・」」
みんな話さない。
ここからは獣の住処（テリトリー）だ。
音一つ匂い一つで獣を刺激し興奮させる。
獣は敏感だ。
自分の領域に入った匂いや跡等は許さない。
俺達は無断で入り荒らす。

それだけで獣的には判決は死刑。
俺達はこの獣を狙う。
罠はいくつか作る。
一つは
俺達が通った場所に罠を張る。
俺達を警戒して俺達を狙った獣を狙う罠。
二つ目は
俺達ワザと荒らした場所に罠を張る。
俺達に怒った獲物を狙う罠。
三つ目は
獲物の道を探しそこに罠を張る。
獲物が気付かず普段通りの行動で仕留める罠。
四つ目は
寝床を見つけてそこに罠を張る。
寝床は獲物にとって大切な場所だ。そこに張る罠。
大体が三つまで。
四つ目は運よく見つけれた場合のみ。
そしてもし獲物が罠にかからなかった場合は罠を取って覚えておく。
その場所の獲物は頭がよく罠にかからないし俺達を襲わず黙認するだろう。
らしい・・・・

俺達は罠を確認する前に軽く休憩していた。
「もしその場所の獲物が死んだら？」
「獣の匂いが付いてる限りよっぽどじゃないと荒らさないし入らない」
「ちなみにもし襲ってくる獣だったら？」
「その時は」
教えてくれていたタニアさんは獣の首をつかんでその首を絞める振りをした。

それを見ていたリットンさんが槍を突き刺す振りをした。
「・・・勉強になります」
「クロならすぐ出来るよ。今日初めてなんだろ？全然なってないけど、初めてのリットンより遥かにマシだよ」
「確かに」
俺達の小声を拾ったマキマムさんも話に乗ってきた。
「待って！俺そんなに酷かったか？」
「ああ、お前は初めての時枝や罠踏んだだろ？」
「・・・そうだっだか？」
「そうだよ！」
「まあ、落ち着け。そろそろ行くぞ？」
「はい」
俺達は更にゆっくりと進む。
もし罠にかかった獲物がもし俺達に気づいたら暴れるからだ。
「「・・・・」」
さっきと違いみんな真剣な表情になった・・・気がする。
微妙な表情までわからん。
トントン
「？」
急に背中を軽く叩かれる。
振り返るとタニアさんは指を唇に当て静かにとハンドアクションした。
立ち止まると前を歩いていた二人も立ち止まっていた。
「・・・・」
二人が見ている先を見る。
よく見ると15メートル程先に3本の角が生えた鹿がうずくまっていた。
三本角の鹿か・・・
見れば顔は堂堂としていて角は王冠、まるで王者の風格だ。
・・・足に罠がかかってなければ。
トントン　トントントン

タニアさんが俺の肩を叩き二人が回りを見る。俺とタニアさんは鹿の見張りとの事だ。
頷くとリットンさんとマキマムさんはゆっくりと森を進んで行く。
「・・・」
俺は鹿の見張りをする。
鹿は何もしないが俺はしっかり仕事をする。

鹿の耳がピクリと動いた。

トントン

タニアさんを突いて教える。
「・・・」
トントン
俺に返事を返したタニアさんは槍の鉄の部分を俺の居る木の上辺りを照らす。
「・・・」
少ししたら光が重なったのか光った所が強くなる。
その後左右上下させる。
タニアさんが槍を戻し投げるモーションに入る。
「・・・」
目線を俺の横にある小さな石を向ける。
その後クイッと鹿に向ける。
(投げろ。ってことかな?)
俺は軽く投げるモーションをする。
頷かれたので鹿に向かって投げる。
(相手に向かって・・・シューット!)
投げた瞬間の空気を切る音に気付いたのか石を投げた時、鹿の耳が動いたのが見えた。
(嘘!?だけど無駄だ!)
鹿の首がこちらを向く。

投げられた石はもう鹿から5メートルも無い。
（よし！ゴール!!）
鹿はしゃがんだままジャンプし石を避けた。
（はあ!?なんだあの動き!?）
しゃがんでる待機姿勢からのジャンプなんて・・・・コイツどこぞの男爵か!?
鹿は足を庇いながらさっきと違う場所に着地しそうになる。
「ん!!」
その場所にタニアさんが槍を投げる。
槍はまっすぐに鹿に向かう。
このままなら着地した瞬間に槍が刺さる。
バン！
大きな音と共に鹿の体がズレる。
足に力を溜めていたのか浮いている状態で足で地面を蹴った。
投げた槍は地面に刺さり鹿はさっきとは違う場所に着地した。
その瞬間、鹿の首に槍が二本刺さる。
「フィィィィ・・・」
鹿は一鳴きし動かなくなった。
「・・・・」
俺はタニアさんに目で合図するとタニアさんは首を縦に振る。
そうしている間に更に二本が体に刺さる。
「フィィィ!!」
槍が刺さった鹿は暴れる。
マジか・・完全に死んだと思ったわ。
「・・・・」
散々暴れた後は静かになった。
タニアさんが石を投げた。
「・・・・」
鹿は沈黙したままだ。
タニアさんは持っていた予備の槍を投げた。
「・・・・」

鹿の胸に刺さるが動かない。
「よし。クロどうしたらいい？」
「えっと。まず大きな枝を見つけ吊るします」
急に話かけれて戸惑ってしまった。
「枝か・・・アレはどうだい？」
タニアさんが指差したのは十分程の大きさの枝がある。
「アレなら大丈夫です」
俺は持ってきた枝付きのロープを投げ枝に通す。
その後ロープで鹿の足を括るんだが・・・
「・・・・」
思ったよりグロイ。てか無理。
血の匂いがヤバイ。吐きそう。
「はぁ。どうすればいいんだい？」
「・・すみません・・・足を括り首の槍を抜いてロープを引っ張り固定して血を抜いてください」
「はいよ」
リットンさんとマキマムさんが合流して作業は三人がしてくれた。
思ったより血が出ている。
・・・・きっついわ・・・無理だわ・・・
俺は見える程度にそこを離れた。

スッキリ

「もう血が出ないな」
「お待たせしました」
「復活したかい？」
「はい。もう大丈夫です」
「顔青いぞ？」
「気のせいです」
「そうか」

「血が出なくなったらそれで血抜きは完了です」
「これが血抜きか・・」
「血の量がやっぱり多いな」
「これは魔物が寄って来そう」
「ん～あ。もしかしら血を抜く前に穴を掘ったかも・・」
「なるほど。穴を掘ったらそこを埋めるだけか・・」
「匂い消しを使うのは？」
「それならポールはどうだ？」
「いいね。アレはよく聞く」
「まずは穴掘って血の部分は埋めるか・・」
「あ、俺穴掘ります」
「なら俺は警戒。リットンは武器手入れ、タニアはポール探しだ」
「はいよ」
「わかった」
「わかりました」
さて穴掘るか。スコップ等は無い。
あるのは・・・手、槍、枝、後はナイフ。
作るか・・
俺はまず簡易のスコップを作り始めた。
ある程度の木を持ち手と平たい板の部分に分け噛ませる。
そんな簡単に出来るかって？
ナイフめっちゃ切れるし。まあ、手先は器用だしな。
枝を二つに割る。半月の形の枝を多く作る。
でそれを固定する持ち手。
って思ったが普通に無理。ロープ使ってスコップにした。
ちなみに一部始終をタニアさんに見られた。
これは村に戻ったらめっちゃいじられるな・・・

第十六話　狩　後半

俺は悪戦苦闘しながら自分の作業を終わらした。
リットンさんに慰められタニアさんには笑われマキマムさんは苦笑いされた。
俺達は休憩をせず後処理を終わらしてその場をすぐに離れる。
鹿はリットンさんが武器は俺、二人は前後を警戒し進む。
「この辺で一度休むか」
獣の領域を出て少し進みマキマムさんがそう言ったので俺達は休憩を取る。
鹿は今のうちに処理する。
マキマムさんとタニアさんが警戒して俺とリットンさんで解体する。
リットンさんは小さなナイフである程度ゆっくり俺に説明しながら解体していく。
血抜きをしているからほとんど血が出なかった。
「いいか?ここの間接に刃を当てる。こう力を加えると綺麗に間接が外れる」
そう言って鹿の丸々太った足をてこの原理で綺麗に外した。
だるまになる鹿と目が合う。
そんな目で見るんじゃない。

「足は使い難いから持って帰らず皮を剥ぎ埋める事の方が多い、皮は表面を綺麗になぞる形に」
足の皮を大根の様に桂剥きの様に剥ぐ。
そんな簡単には剥げないと思います。
でも剥げてるんだから剥げるんだろうな。
「やってみな」
俺は軽く震えながらナイフを受け取る。
足もポイっと投げられ受け取った。
手がめっちゃ震える。

落ち着け。深呼吸して、言われた事を思い出しながら逝こう。（誤字では無い）
まず切り込みを入れる。
肉は筋ばって美味しくないので深く切ってもいいが皮は使うのでまっすぐ切る。
「そうだ。まっすぐ切らないと皮がダメになるから気をつけろよ」
リットンさん、プレッシャーを与えるんじゃない。
俺はそんなに本番に強くない。
まっすぐ？切った次は切った場所に手を突っ込み皮を引っ張りそこに刃を当てゆっくり切っていく。
「ナイフは押す引くで切れる。慣れない内は引くを利用し切る方がいいかもな」
のこぎりの様に切ると皮が痛むので出来るだけ一回で広く切る様に切る。
イメージはホタテの貝柱？ん～テープを剥がす？思ったより、てかすごく剥がれやすい。
「クロはラッキーだな。コイツは特に皮が剥ぎやすい」
ほう。ラッキーなのか・・・
なんか複雑だな。
気付いたら震えも止まり自分より思ったよりうまく出来た。
大きさは大き目の枕ぐらいになった。
「初めてにしてはうまく言ったな」
後は皮をなめし柔らかくし加工して使うそうだ。
足の皮は繋げて使うか帽子、靴や小物入れに使える。
「その皮はクロさんが使うといい」
「いいんですか!?」
「ああ。初めての皮はみんなも持ってる。ほれ」
そう言ってリットンさんは腰に付けていた小物入れから白と黒のボロボロになった槍ケースを取り出した。
俺には表情はわからないが声は恥ずかしそうな感じだ。
はっきりいってリザードマン系の表情が未だにわからん。

声色、雰囲気で判断するしかない。
「俺は下手でボロボロだったがな」
アレか？自分の最初の狩の思い出と後輩への気配りから最初の皮をもらえるのかな？
初給料や入学祝いに近いのか？でもめっちゃうれしい。
何にしよう？靴・・・いや。
小物入れかな？それともナイフのカバーとか？
「ハハハハ。皮をどうするか考えてますね。みんなそんな顔をするんですよ」
俺の顔を見てマキマムさんが笑う。
そんなに顔に出てたかな？
皮をどうするか考えてる顔ってどんな顔だ。
ちなみに残りの足はリットンさんが終わらしてくれた。
使わない肉は深く穴を掘り埋める。
必要な物だけ持って帰る。
「よし。そろそろ戻るか」
また同じ様に荷物と隊列を組み帰りを進める。
そういえば『行きは良い良い帰りは怖い』と言う言葉があったな。
どういう意味だったかな？なんて疲れていたのかくだらない事を考えながら歩く。
「クロ大丈夫か？」
タニアさんが声をかけてくれる。
ダメだな集中力が欠けている。
「もう少しだからな」
「はい」
疲れが出てきたのか帰りから俺のペースが極端に落ちた。
もう一度気合を入れなおす。
周りに危険は無いか等に気を配る。
集中力が切れる前に村が見えてくる。
「もう少しだぞ。がんばれ」
１００里の道を行く者は９９里を持って半ばとせよ。

遠足は帰るまでが遠足だ。
等の言葉が頭を掠める。
もう少しだ。
後数歩がんばれ。
そこの木までがんばれ。
その大きな草までがんばる。
門が見えたから門までがんばる。
と少しづつ自己暗示して戻って来た。
「お帰りなさい。みなさん無事で何より」
門番のシュバルツさんは俺達を確認してから門をあける。
やっと帰ってきた。
少し、いや大分調子に乗ってた。
狩を舐めてたわ。
滅茶苦茶しんどい。
「クロさんにお客さんが来てるよ」
「え？」
シュバルツさんが俺に言った言葉が一瞬理解できなかった。
俺に客？誰だ？もしかしてミーナに言ってた商人か？
「だれですか？」
「カキタニ　ショウタだ。クロさんと同じ種族だ」
「え？」
カキタニ？ショウタ？柿谷将太？はあ!?
「え？ちょっと待って！シュバルツさん！えっとこんな感じの体系の!?」
俺はあたふたしながらこう小太りな感じにポーズを取る。
わかってくれるかな！こんな感じ!!
「落ち着け。たぶんその人であってるからクロさん落ち着いてくれ」
（マジで!?嘘だろ!?どうして!?）
「ちょ！クロ！」
俺は荷物を放り投げ走る。
疲れなんて吹き飛んだ。

将太が来てる？
なんで？どうして？
頭が酸欠でぐるぐるするがそんなことよりまず会いたい。
村を周り将太を探す。
「はぁはぁ」
ミーナの家に着きドアを開ける。
少し乱暴に開け過ぎたのかすごい音がした。
「・・・クロ？」
「クロさん？」
「将太？」
将太だ。
俺の知ってる姿で湯のみを持って座ってる。
ああ・・もう会えないと思っていた友人の姿だ。
「将太！」
「うお!?」
俺は将太に思わず抱きついてしまった。
そして泣き出ししまった。
「も・・う・会え・・・ない・・と・・」
「ク・・・・ロ・・・」
「あの～クロさん。将太さん苦しそうですよ？」
ミーナの言葉でハッとする。
今の俺は少しマッチョだ。
こうやって思いっきり抱きついたら苦しいだろ。
「すまん！」
「いいんだが・・・どうしたその体？」
あ～話す事がいっぱいあるな。
その前に
「ミーナ。すまないが俺の分も飲み物を貰ってもいいか？」

第十七話　説明回その1

ミーナに飲み物を用意してもらい机に座る。
久しぶりにあった将太をよく見る。
短髪の黒髪、ふくよかな身体につぶらな瞳。
ああ・・変わらないな・・
「とりあえずひさしぶり。元気だったか？」
「ああ。クロはどうだった？」
「俺もこの通り元気だよ。ちょっと体は変わったが・・」
「確かに変わったな。てか変わりすぎだ」
「クロさん急に大きくならましたよね？」
「うん。この数日でムキムキになった」
握り拳を作るとこんもりと力こぶが出来る。
それを見たミーナが力こぶをつつく。
「すげーな。めっちゃマッチョじゃねえか」
将太も人差し指で俺の力こぶをつつく。
流石にくすぐったい。
「服装も大分ワイルドになったし、顔つきも昔みたいに生き生きしてるぞ」
それは確かだろう。仕事をしていた時よりも体は軽いし気持ちも全然違う。
こちらの世界に来てから食事や住居、生活は前の世界の方が便利だが精神的負担は消えた。
仕事は楽しいしみんな優しい。確かに怒られたりするが無意味に怒られたり八つ当たり等もされない。
もし元の世界に帰りたいかと聞かれたら、正直迷ってしまう。
「健康的な生活してるからな。てか、なんでお前そんなに落ち着いてるんだよ。俺はめっちゃ慌てたのに」
「ああ。説明するわ。まずクロの行方がわからなくなって2ヶ月位経ってから夢に仮面の神様が出てきてな。クロの状況やらを教えてくれたんだ」

「は？」
　えっと？つまり俺がこの世界に来たのは神様のせい？
「仮面の神様・・・リーン様ですか!?」
「そうそう。俺はリーン様にこの世界の事やクロの事を聞いてきてるから落ち着いてるだけ」
「待て。俺の記憶が確かならリーン様って生命を司る神様だよな？なんでお前の所に出てきてるんだ？てか俺がここにい来た原因は神様のせいか？」
「まあ待て。順に説明する。リーン様曰くクロがここにいるのはマジで偶然らしい。で、先に言う事があってどうしてかは知らんがリーン様はクロに会うことが出来ないそうだ。クロには悪いが元の世界に帰る事も出来ないてさ」
　は？俺に会えないし、帰せないと？
　おいおい、どんな神様ですかね？ふざけるなよ！
「こっちの世界に入った時点で向こうに戻ることが出来ないらしい。魔力が関係してるらしい、つまり俺も戻れない」
「え？お前俺と違って親いるだろ？帰れないのって」
「ああ。親には言って来たし、連絡は取れるしな」
「連絡は取れる？」
「貰ったチート能力でな!!」
　サムズアップする程テンションが上がったのはわかった。
　チートね。はいはい。アレ美味しいいよな。
「ちなみにお前にもあるぞ」
「マジで!?」
「ああ。お前のスキルウインドウにポイントがあるだろ？それで色々出来るそうだ」
　おいおい！そう言う事は早く言えよ！
「どうやるんだ!?」
「ポイント消費して何かしたいや何か欲しいと思えばいいらしい。ちなみに貯まり方は教えてくれなかった」
　ポイント消費して願うか・・・

コーラ欲しい。ポイント消費してコーラが欲しいと念じる。
【コーラを5ポイント消費で出しますか？】
5ポイントだと・・・・・
現在は・・16ポイント・・・3本分しかねえ！
「どうだ？」
「クソ能力だわ。今ポイント16でコーラが5ポイントだったわ」
「なにそれ怖い」
「コーラですか？」
「えっと。甘いシュワシュワする飲み物だよ」
「甘い飲み物・・・モリス（サトウキビ）ですか？」
「もっと甘いかな？」
「もっとですか!?」
ミーナが驚くのも無理ないか。
モリスはこの世界では一般的な甘味だ。
それより甘い物は少ない。
しかも飲み物でならもっと少ないだろう。
・・・・ミーナにはお世話になりっぱなしだ。
5ポイント位いいだろ。
【コーラを5ポイント消費で出しますか？】
イエスだ。
そう思うと気がついたら目の前に赤い缶のコーラがある。
「！まさか消費したのか!?」
コーラを取るとキンキンに冷えていた。
驚く二人の目の前でコーラを開ける。
プシュ
プルタブを開ける音と共に独特の匂いがする。
「ミーナこれがコーラだよ。飲んでみてくれ」
「いいんですか!?クロさん達の話なら5ポイントもする飲み物ですよね・・・」
「口に合うかもわからないし。ほら、ミーナにはお世話になってばかりだからね。ポイントはまた貯まるし」

ミーナは将太と俺を交互に見る。
ふと思ったんだがお礼がコーラって普通に考えたら酷い話だな。
・・・なんとかもっとポイント貯めてお礼するか。
「ミーナちゃん飲みなよ。俺達は飲んだ事もあるし。冷たいうちに飲まないと美味しく無いよ？」
「で、では・・」
外気に触れ缶に水滴がびっしりついている。
ミーナは恐る恐る触れ缶の冷たさに驚きながら缶の両手で器用に持つ。
「シュワシュワするから苦手な人もいるから苦手だったら言ってね？」
「は、はい」
ミーナは軽く震えながら初の炭酸を口に運んだ。
「!?」
缶を口に付けてすぐミーナの身体がビックっと反応した。
ミーナは口を離すと缶を机に戻す。
「すごいです！口がシュワシュワして甘くて！なんかすごい味がして！」
確かに変わった味がするかもしれない。
俺らはコーラの味はわかるが初めて飲んだ人からしたら不思議な味だろう。
なんせコーラ味はコーラ味だ。説明なんて出来ないしな。
ミーナはシュワシュワが気に入ったのかちょっと飲んで感想を嬉しそうに言ってはまた飲んでを繰り返した。
喜んで貰えたみたいで良かった。

第十八話　説明回２

ミーナに喜んで貰ったコーラが５ポイント。
他の物はどうだろ？
・・・米食べたい。
【生米１キロを２０ポイント消費で出しますか？】
・・・え？高くない？
なんで？コーラは５ポイントだぞ!?
生米がなんでこんな高いんだよ！
「どうした？」
「米が食べたくて生米を出そうとしたら２０ポイントだった・・・」
「マジか!?」
「高すぎだ・・でも食べたい」
どうする？米は食べたい。
でもポイントは高い。
「米ってなんですか？」
「米と言うのは・・硬い種？水で蒸すと柔らかくなるんだ」
「種ですか」
「種？種か・・・」
【コシヒカリの種１００粒を１０ポイントで交換しますか？】
「キター!!」
「うわっ！いきなりどうしたんだ？」
嬉しさのあまり叫んでしまった。
ミーナも驚いて二人共ビックリしてた。
すまんな。
「ごめんごめん。生米は無理だったのに種としては１００粒１０ポイントだったんだ」
「つまり植えるのか？」
「ああ。これで米が食えるぞ！」
「・・・田んぼを作って？」
「あ・・・」

「田んぼってなんですか？」
「田んぼは畑に水を張った特別な畑の事かな」
「水を張った畑ですか・・・」
「米食べれると思ったのに・・」
「えっと・・・元気出して下さい」
「・・・なんとかなるかもよ？」
「え？」
「クロのやる気次第だが」
「どういう事だ？」
「俺のチート能力はネットを使えるんだ。だから田んぼの使い方や米の育て方は調べられる」
「ネットって・・」
「こんな感じ」
　そう言うと将太の目の前に薄い青色の板の様な物と透明のキーボードが出てきた。
「ショウタさんすごいです！」
「ありがとう。これで言ったように調べられるぞ。どうする？」
　米を育てるかポイントで買うか・・・
　ポイントなら1キロ２０ポイント
　育てるらなクソ大変だがうまくいけば、毎年収穫出来る。
　後は・・
「育てるならここの村に住む事になりそうだな」
「？住んでるだろ？」
「えっとな。村長に言ってるんだが旅に出るかもってな」
「旅か・・・」
「永住するか旅に出るかでお前が来るまで迷っていてな」
「ここに住んでたまに旅すればいいんじゃね？」
「・・・お前流石だな」
　やはり天才か。
　むしろ何故思いつかなかったのか。
　ここに住んで旅の準備をして開拓していく。

「ここに住んで準備をしてたまに旅する」
「いいんじゃないか？」
「じゃあクロさん達はここにずっと住んでくれるんですね！」
「うん。これからもよろしくね」
「クロ共々よろしくね」
「はい!!」
ミーナは俺たちがこの村に住む事が嬉しくて俺がわかるぐらいに笑顔だ。
ん～不思議だ。
ウサギの人形が動いている感じに既に違和感は無い。
もうある程度、表情もわかるぐらいだ。
「？どうかしましたか？」
「いや。何でも無いよ」
嬉しそうにしているミーナを見ているとこう親？の気持ちがわかる。
まあ向こうの方がこの世界を知ってるけどね。
「じゃあまず村長に話をしにいくか」
「そうだな。そういえば狩りから帰って挨拶も何もしてない」
「そうなんですか!?」
「ああ。将太がいるかもって聞いたらつい・・」
「ちょっとギルイットさんに謝ってくるのと話をしてくるよ」
「俺もついて行こうか？」
「あ～いや。とりあえず一人で言ってくるよ」
「わかった。ミーナちゃんと待ってるわ」
ギルイットさん怒ってるかな？
怒ってるだろな・・

第十九話　ギルイットさんとの話

ミーナの家を出てギルイットさんの家へ向かう。
仕方ないとはいえ、怒ってるだろうな。
とりあえずギルイットさんに何を話すか。
将太
この村に住まう許可を貰う
畑
俺と将太の能力
かな？
ギルイットさんの家に付き、扉をノックする。
コンコン
「はい。どなたですか？」
「クロです。狩りに出て直ぐに戻らなくてすみませんでした」
扉が開きギルイットさんが顔を出す。
「話はマキマムさんに聞きましたよ。お話があるのでしょう？どうぞ」
そう言ってギルイットさんは家に案内してくれる。
テーブルにつきギルイットさんに話をする。
友達がこっちに来たのでここで暮らす話をお願いしたい。
そして俺達には不思議な力があって実験等したいから良ければ土地を貸して欲しい事を伝える。
俺が真剣に話したせいか、ギルイットさんは黙って話を来てくれた。
「そうですか・・わかりました。リットベルはクロさんとショウタさんを歓迎します」
「・・いいんですか？俺はともかく将太は」
「将太さんは村に来た時に会いました。あの方なら大歓迎ですよ」
何があったんだ？いいヤツだし楽だからいいんだが・・
「ありがとうございます」
俺は深々と頭を下げる。

これからは俺達はお客様では無くリットベルの一員だ。
「よろしくお願いします」
「はい。クロさんよろしくお願いします。先ずは家ですね。一人で住まれますか？」
一人か将太と住むかどちらにしようかな。
とりあえず将太と相談するか。
・・・アイツは生活力が皆無だから多分一緒に住むか、一人で住んでもアイツの家は俺が掃除等する事になるだろうがな。
「すみませんが将太と相談してからでもいいですか？」
「もちろんです。後は畑ですかこちらも一人か二人でやられますか？」
「・・そちらも相談しときます・・」
ギルイットさんは軽く笑うと木板に黒石で家と畑の絵を書き始めた。
絵の上に文字を書いてくれてる・・
書けない読めないのわかっているが恥ずかしい。
「後は普段の村の手伝いですね。狩り　整備　警戒　です。毎日では無く交代制です。何か希望はありますか？」
希望か・・狩りは非常に勉強になったし整備も気になる・・
「毎回変えてもらう事はできますか？」
「そうですね。毎度とはいきませんか何度かやって貰い交代はできます」
「それでお願いします。将太にも伝えて何をするか考えて貰っておきます」
「家は空家が何件かあるので直ぐに引越しもできますので決まり次第言ってください」
「わかりました」
「もし聞きたい事や何か要望があれば言ってください」
「はい。色々ありがとうございます」
俺はその後ギルイットさんと世間話をして家を後にする。
外は夕暮れになってた。

狩りから戻りその後将太と話ギルイットさんと話をしたんだ・・そら夕暮れにもなる。
さあ話す事は山ほどある。
明日は寝不足になりそうだ。

第二十話　新たな家

ギルイットさんと話し合いから数日後、将太と俺は新たな家に移り住む事になった。

家の場所はミーナの家から少し入った所で大きさは元の世界で言う３ＬＤｋだった。

畑を２つも貸して貰った。水田を作りたいので水場が近く、当分使わない場所と日当たりがいいが形が地形上歪なので様々な野菜を作る俺達には都合がいい場所を貸してもらった。

「クロさん！引越しお手伝いしますよ！」

ミーナが引越し手伝うと言ってくれたが荷物は殆ど無い。

俺達が引っ越す空家は元々村の人が緊急用や結婚した時等に使う家で定期的に清掃し整備してるから直ぐに入居出来る。

将太の荷物も無いしあるとしたら服ぐらいだ。

それもスーツケースを持ってきたらしく直ぐに引っ越せる。

・・・ちなみに翔太の持ってきた服は半分交渉（没収）し村の人に提供し新しく作れるか交渉した。

絹がないので麻で作る事になるが今の服よりマシになるだろう。

ポイントが貯まったら桑の木と蚕を飼うか。

「引越しと言っても荷物は少ないしね。気持ちだけ貰っておくよ。ありがとう」

「そうですか・・」

ミーナの耳が垂れてしまった。

何か手伝って貰った方がいいかな？

でも特に無いんだよな。

あるとしてもギルイットさんが用意してくれた家具の模様替えだが大きさが違うミーナに手伝って貰うほど俺は鬼畜じゃない。

「あ～ミーナ。やっぱり手伝ってくれる？引越しが終わったらお腹が減るだろうし、お昼ご飯を作って貰える？」

「はい！任してください！」

耳がピンと立ち元気に返事してくれた。

やっぱりミーナは元気が一番だな。
「じゃあ行くか」
「ああ」
「はい！」
引越しはスムーズに終わった。
てか本当にやることが無かった。
先ずはキッチン周りを綺麗にしてミーナにご飯を作って貰う。
ご飯が出来るまでの間に模様替えをする。
といっても家具の位置は変えなくてよさそうだったし部屋決めぐらいだった。
「じゃあ今後の予定と役割でも決めるか」
ミーナの作ってくれたお昼ご飯を食べながら相談する。
ちなみに今日は蒸し野菜。
塩味で美味しい。
「予定ですか？」
「うん。まず畑、水田等の農業。家事や服等の日用品。この二つをやってみたい」
「ちょっと待ってくれ。家事はわかるが日用品？」
「ああ。この世界は魔石ありきだったせいで生活がアンバランスなんだ。だから魔石無くても生活が豊かにしたい」
「気持ちはわかるが・・」
「この村を俺達を受け入れてくれたろ？恩返しにな・・」
「はあ・・わかったよ。まあ生活が豊かになるのはいいことだしな」
「ありがとう」
「わ、私も手伝います！」
「ミーナ・・ありがとう」
「じゃあ、決めるか基本的に俺が調べる、クロが出す。みんなで育てるか？」
「うん。でもポイントが全然貯まらないからギリギリまで貯めるよ」
「それがいいだろな。ポイントの貯め方がわからないからな」
ポイントは貯まっていない。

前回から変わらずの１１ポイントだ。
条件が不明すぎる。もう少しわかりやすくてもいいと思うんだ。
「まずは米か野菜だと思うんだが・・意見はあるか？ミーナはこれがあったらいいのにながあれば教えてくれ」
「ん～クーラー？」
「えっと・・水汲みです」
水汲みと涼しくか・・
水道？スプリンクラーっていうのか？
「水道を張り巡らせて、噴水や下から水を出すスプリンクラーを作る？」
「水道!?無理だろ」
水道は無理でも水路ならできるんじゃないか？
確か江戸時代や古代ローマで水道の代わりに地下に水路を張り巡らせてたと聞いた事がある。
「水路ならどうだ？」
「水路か・・調べてみるか」
将太が能力で水路を調べてくれている。
その間にミーナにいくつか質問してみるか。
「ミーナは水路って聞いたことあるかい？」
「水路ですか？畑の近くにあるアレですか？」
「多分そうだと思う。俺達が作りたいのは家の下にそれを引いて井戸に行かなくて済む様にするんだ」
「すごいです！」
「あ～いいか？水路について説明するぞ」
「よろしく」
「水路は簡単に言うと人工の川だな。水は上から下に流れるだろ？山から石や木で道を作り水を流す」
「じゃあ木で作るか？」
「木だと腐るぞ？だから定期的に整備するみたいだな」
「まずは木で作ってギルイットに許可貰って石ってのは？」
「いいね」

「あの～」
ミーナが申し訳なさそうな声を上げた。
どうしたんだろ？
「どうした？」
「えっと・・水路って大きいですか？」
「そうだね」
一本は小さくても村全体になると大きくなる。
「そうですか・・では水路は難しいですね」
「え？どうして？」
「えっと・・魔物が来たら村を捨てる事があるので・・」
「魔物か・・・そんなにヤバイの？」
「はい・・私が生まれてから3回村を捨ててます」
「え？マジで？」
初耳だ。
「捨てた村は？」
「魔物が居なくなったら物を回収して破棄し別の村を作ります」
ミーナは表情が無くなり淡々と話す。
こんなミーナは見た事が・・・あった。
前に魔物の話をした時もこんな感じになってた。
「魔物か・・」
いつも元気なミーナがここまで変わるもの・・魔物か。
畑や日用品なんかよりも先に魔物の事を何とかする方がいいな。

第二十一話　魔物をどうする？

魔物をどうするか？
畑や水路を作っても魔物が来て村を破棄したら元も子も無い。
「ミーナ。辛いかもしれないが魔物について少し教えて貰っていいかい？」
「・・・はい。私が知ってる魔物で良ければ・・」

「以上です」
「・・・・」
ミーナから魔物について教えてもらった。
想像以上にヤバい。
将太と目を合わせるが色々甘かったと確認しあった。
魔物だが大まかに二種類。
倒せるのと倒せないヤツ。
倒せない、もしくは見たことのない魔物が出れば村を捨て逃げる。
倒せる魔物は村総出で倒す。
ミーナが初めて村を捨てて逃げた魔物は【グランドワーム】という大きな蛇の様な魔物。
【グランドワーム】は土を泳ぎ障害物を完全に無視し獲物を一飲みする。
全長１０メートル程、口は最大２メートルまで広がる。
ちなみに土を泳ぐのはどう泳いでるかはわからないそうだ。
二回目は【リバグス】
ミノムシの様に枝で出来た丸い形の魔物で大きさは1メートル程。
地面を転がり、鋭く尖った枝を浮かして飛ばしてくる。
話を聞いた時は倒せそうだなと思ったがこいつは大繁殖するらしい。
１匹見つければ１００匹は近くにいるそうで獲物はハリネズミの様にされてるのでその死体を見つけても逃げるそうだ。

三回目は魔物は【ジバラシ】
石で出来た大亀で大きさは２０メートルになるらしい。
襲って来ない魔物だが旅をする魔物で運悪く村が進行方向にあり泣く泣く村を捨てたそうだ。
最後は見たこともない黒い犬の群れが現れ近くを荒らしたそうだ。
村人も数人犠牲になり村を捨てる事にしたそうだ。

「さて・・どうするか・・」
翔太の言葉に同意する。
【グランドワーム】は対処は無理だ。
地面を文字通り泳ぐらしい。
魔法か何かで掘る、ではなく魚の様に泳ぐので土は盛りがらないし素早さも相当らしい。
次の【リバグス】
集団で現れ蹂躙する。
一応聞いた中で一番対処出来る魔物だが数はそれだけで強い。
【ジバラシ】は無理。
２０メートル？大亀で空を飛び炎を吐かないだけマシだが巨大すぎる。
魔物ってか災害だな。
後は名も無き魔物だが・・黒い犬は情報が無さ過ぎる。
情報は大事だ。特に魔物の場合倒すと毒や土地に影響する魔物もいる。
ギルイットさんもそれを警戒して村を捨てる決断をしたんだろう。
ちなみに話を聞くとわからない魔物は旅人やたまに来る商人等に聞いて情報共有するそうだ。
「塀、壁、銃？あ・・ダメだそれぐらいしか思いつかん」
「銃？」
「気にしないでくれ」
ミーナが銃に反応して首を傾げていたが作れないだろうし危ない物は教えなくていいだろ。

「罠・・はもちろん試してるだろうし」
「ミーナ他の村はどうしてるんだ？」
「他の村・・ですか。私達と一緒で逃げるか街だと冒険者を雇ってると聞いたことがあります」
「冒険者！やっぱりあるのか!?」
大きな声を上げた将太の声にミーナが驚いた。
「は、はい。街にはあるとお聞きしました」
冒険者か・・問題は金、場所、色々ある。
「まずは冒険者について詳しく調べるか・・」

第二十二話　初畑

新しい家に引っ越してこれからの事を相談していた。
内容は畑の事から魔物の話になった。
基本的な魔物の対処は三つだ。
一つ倒せる魔物は倒す。
二つ倒せない魔物から逃げる。
三つ見た事無い魔から逃げる。
魔物は強く厄介で対処が難しい。
ここで新たに冒険者という選択肢が出てきた。
「じゃあ将太とミーナが挨拶周りと冒険者の情報集め、俺は畑仕事かな？」
「いいと思う。俺はまだ村の人達とそこまで顔を合わしてないし丁度いい機会だよ」
「わかりました！」
「そうだこれ」
翔太は席を立ち木版を大量に持ってくる。
アイツヘルニア持ってるけど大丈夫か？
「将太、そんなに持ってヘルニアは大丈夫か？」
「ああ、こっちに来てからすげー調子いいんだ。でこれが畑の耕し方、こっちが植え方やお勧めの種類だ」
木目にはこっちの文字や絵でびっしり書かれていた。
ショックだ・・俺はここまで書けないのにコイツもうここまで書けるのか・・
てか絵うまいな。
「・・なんでこっちの文字なんだ？」
「いや、練習の為にな絵も付けてわかりやすいと思うがわかりにくかったら教えてくれ」
「あ、ああ」
コイツハイスペック過ぎる。
流石将太。

「じゃあ俺達は行くよ」
「俺も準備をして畑に行くよ。いってらっしゃい」
「いってきます！」
二人が出た後俺は木板を見る。
えっと・・クワ、スコップなどで土を耕す事。
土は空気に触れていないと硬くなり植物が育ちづらい。クワやスコップを使ってしっかりと耕す。
畑を耕すと同時に雑草や石があれば除去します。しっかり耕すと地中の殺菌や病害虫の予防となります。
なるほど、建築や何でもそうだけど土台が大事みたいだな。
今日は耕す事をメインでやるか。
ミーナ達が用意してくれたクワ、スコップ、金バケツを持って俺達の畑に向かう。
あ、軍手とか手袋あったら良かったな・・
「畑の形が歪なのは聞いてたが凄い形だな」
畑の形は上空から見たら□に見えるだろ。
理由は真ん中に平べったい大きな石がある。
日を最切らない程度大きい。これは・・邪魔だな。
畑は程度手入れはされてるがそのまま畑にするには厳しそうだ。
ポイント的にいきなり全部使うのは無理なので一列を耕す事にする。
「てかこんな平べったい石なんてあるのか？」
明らかに人為的な物だぞ？
触ってみるが日が当たってすごく熱い。
・・・肉が焼けそうだ。
「あっつ!!」
アスファルトより熱い気がする。
まさか昔の人が作ったホットプレート？
そんな訳ないな・・
「さて仕事するか・・」
木板を見る。

えっと。
雑草を綺麗に抜き見える範囲で石を取る。
その後クワやスコップで土をほぐし土に空気を入れる。
雑草と石をこの長さ？
４メートルぐらいあるよ？
やるか・・・
ひたすら雑草をまず抜く。一心不乱に抜く。
出来るだけ根元から根を残さない様に根を軽く掘じり抜く。
抜いた雑草はそのへんに捨てるとそこからまた生える。
だから金バケツに入れ半分ぐらいになったら平石にぶちまける。
平石は干し場になって丁度いい。
が・・これがキツイ！何しろ薄い鉄で出来たバケツだ。
持ってしゃがむ、雑草を取る入れる。
立って進む、しゃがむを繰り返しいっぱいになったら平石にぶちまける。
この繰り返しだ。
２時間程で玉の様な汗が額から地面に落ち地面を潤す。
背中はまるで行水した様になっている。
水飲みてぇ・・なんで俺は水を持ってこなかったんだ・・
スゲー暑い。平石に乗(せた)った雑草がもうカラカラになってる。
まだ２メートル程しか進んでいない。
休憩でもするか・・
これは思ったより大変だぞ・・甘く見てたわ。
井戸に向かい水を飲み少し休憩してから畑仕事を再開する。
クワ入れは明日だな。

「お～い」
「ん？」
畑の雑草を抜き次に小石を抜いていたら翔太の声が聞こえて振り向くと将太とミーナがこっちに歩いて来るのが見える。
「お～お疲れ。どうだった？」

「おう。中々いい話を聞けたよ。クロは・・・頑張ったな」
「お疲れ様です！すごく進んでます！凄いです！」
将太は苦笑い、ミーナはすごいと褒めてくれた。
まあ俺も苦笑いしたくなる褒めてくれと思う。
目の間には平石に雑草が山のように積まれていた。
ちなみに小石もまあまあ積まれていた。
「反面もよくやるよ」
そう。まさかの半分もやってしまった。
気分が乗ったわけではない。
理由があった。ポイントが増えたのだなんと１６ポイントだ！
「理由があってな。ポイントが増えたんだ」
「マジで!?」
「本当ですか！」
「ああ」
理由はわからないが休憩中にステータスを覗くと
名前　黒須　黒夜
種族　人間
レベル　２
スキル　鑑定　マップ　変換１６ポイント
呪文　無し
魔術　無し
レベルが上がった！ポイントも増えた！
最近ステータス見てなかったがまさかレベルが上がるなて思いもしなかった。
後はポイントが変換ポイントに名前が変わってるぐらいだ。
「ちなみにレベルも上がったぜ！」
「おお！」
「よかったです！」
「ありがとう。丁度終わるとこだし帰るか」
「はい！今日はお祝いにいっぱいご飯作りますね！」
「それは楽しみだ！俺も手伝うよ！ミーナいつもありがとうね」

「お料理は好きですから。クロさんと料理するのも・・」
「？ごめん最後の方聞きとッツ」
「ごめんごめん。ついな・・」
ミーナが最後の方に言った言葉が聞き取れなくて聴き直そうとしたらいきなり将太に蹴られた解せぬ。

「そういえば将太は何レベルなんだ？」
「俺？１５だよ。クロは？」
「・・・・１５だよ・・」

第二十三話　幕間　生まれたソレ

大きくそびえる山の麓、暗く湿気の強い洞窟の中でソレは生まれた。

（ココハドコダ？）

周りには多くの生き物の腐乱死体や臓物等が散乱し腐って酷い悪臭がしている。

虫が湧き、ガスが発生し空気が淀んでいる。

酷い環境でまともな生き物は生きていけないだろう。

だがここで生まれたソレにとっては揺り篭であり親だった。

ここは元々酷い場所では無かった。

昔は15匹の【ミャーリ】というイタチに似た動物の家族が住んでいた。

【ミャーリ】は主食は果物や木の実で巣に持って帰り保管し家族で分ける。

【ミャーリ】には敵が多く他の動物を見たらすぐに巣に逃げ帰る。

この習性のせいで悲劇が起きる。

【ボットドッグ】という1メートル程の黒い犬の魔物がいる。

単体ではそこまで強くは無いが集団で行動し基本的に獲物の巣を特定するまで獲物を襲わず巣を見つけると巣を襲い一時的な住処にする。

一番の特徴はその残忍な性格である。

【ボットドッグ】は獲物を家畜にする。

家畜にし生まし増やし食べる。

ただ殺して食べる事はまずしない。

殺す時は嬲り拷問し息絶えたら食べる。

獲物を骨の髄までしゃぶり尽くし飽きたら次の獲物を探す。

それが【ボットドッグ】である。

運が悪かったのだ。

ここが【ミャーリ】の巣では無かったら。

【ボットドッグ】が飽きず数年地獄を作った事。

洞窟がある山が後に霊峰と呼ばれ人脈が集まる場所だった事。
この数年気候が穏やかで湿気が強い洞窟ではモノが腐っても風化しかなった。
亜人が【ボットドッグ】に獲物として巣に連れて来られ殺された事。
他にも多くの要素が混ざりソレは生まれた。
生まれたばかりのソレは体を動かしてみて違和感を感じる。
どうも思ったように動けない。
覚えているように4足で歩こうとしてみるがうまくいかない。
柔らかい何かを潰し硬い何かで転び芳しい何かを嗅ぎ何かを口に入れる。
身体に何かが入り何かが駆け抜けるのを感じる。
（ドウシタ？ナゼ？）
ソレは考える。
どうして動きにくいのか？
ここはどこなのか？
自分がなんなのか？
家族はどこなのか？
敵はどこなのか？
殺したいのは誰なのか？
家族を殺したのは誰か？
答えは出ない。
答えは【ミャーリ】や【ボットドッグ】にはあってもソレには無いから。
（マアイイ。ココハイゴゴチがイい）
ソレは考え成長する。
食事は辺りに山ほどある。
時間もある。
成長し自由になるまでこの環境で安全だろう。
ここは揺り篭であり卵であり災厄の生まれた場所。

第二十四話　冒険者の話

3人で家に戻ってミーナと俺は食事の準備をする。
将太には食事が出来る間にクワ等の農具の片付けをしてもらう。
食事の内容は偽コロッケだ。
芋を蒸して柔らかくしてザルで裏ごしして冷ます。
冷ましてる間に肉の塊を叩きミンチ作る。
野菜は一口で食べれるサイズに切って置いておく。
準備をしていたら将太の作業が終わったので木板に色々書いて貰う作業をしてもらう。
今は油の作り方や蝋燭の作り方、水路や水車等使えそうな物や建築物の作り方を調べて貰い木板に書いてもらう。
書き終わった木板はギルイットさんに見てもらい、出来そうな事を判断してもらう。
俺達用の台所に高さを合わすために椅子の上に乗ったミーナが裏ごした芋とミンチに刻んだノビルと塩、最後に繋ぎの擦った自然薯を混ぜている。
「こんな感じですか？」
いい感じに混ざってうまそうだ。
「そうそう。柔らかさは大体耳たぶ位かな？」
「耳たぶですか？」
ミーナの耳がピクピク動く。
ラビットゴーレムの耳たぶ・・柔らいがちょっと違う気がする。
「あ～俺のほっぺた位だな」
「クロさんのほっぺたですか？」
ミーナが俺の事をじっと見る。
なんだ？俺のほっぺの柔らかさを確かめたいのか？
「どうかした？」
「い、いえ。なんでもないです」
ミーナはちょっと慌てたように作業に戻った。
形を整えて温めたフライパンに乗せ一口サイズに切った野菜と一

緒に入れ蓋をする。
弱火にしじっくり蒸し焼きにする。
片面に焼きいろが付いたら形が崩れやすいから気をつけてひっくり返す。
両面に焼き色が付いたら完成だ。
まあ味が薄いからお好みで塩と前もって作っていたケチャップモドキかけて食べる。
「よし。将太！出来たぞ！」
「あいよ！」
ミーナが皿を並べそれに偽コロッケと野菜を並べていく。
ちらっと将太を見ると木板を片付け、食事の準備をしてくれていた。
「完成っと。テーブルに持っていくね」
「手伝います！」
「大丈夫。ほら、ミーナ座って座って」
「はい」
３人で席に座り食事をする。
「「頂きます」」
味は・・普通！まあ最近では一番うまいな。
でもやっぱり油と小麦が欲しい。
それでコロッケが作れる。
ミットさんの油はＮＧ。
「中々美味しいぞ」
「美味しいです！」
「ミーナのおかげだよ」
食事はみんなで楽しく食べるのが一番だ。
その後今日あった事を話ながらご飯を食べる。
将太達が聞いてくてくれた冒険者の話は食事が終わった後にする事にした。
「「御馳走様でした」」
「食器は俺が持っていくよ」

「ありがとう」
「じゃあ私はお茶入れ直しますね」
　テーブルを片付けてミーナが入れてくれたお茶を飲んで一息つく。
「じゃあ俺達が集めてきた話をするぞ」
「よろしく頼む」
「まず冒険者は結構いるらしい。街に行くと冒険者ギルドがあってそこに登録してるらしい」
「冒険者ギルドね～」
　これもこの世界の歪な事なのかシステムはよくある物語の冒険者ギルド一緒みたいだ。
「街を守ってるのは冒険者らしい」
「？兵隊とか憲兵とかは？」
「これがな・・・どうやら国ってモノが無いらしい」
「・・・は？」
「俺が聞いた話だがな。正確には街＝国みたいなものらしく国家等は無いらしい。だから街を守る役目は冒険者が基本みたいだ」
「なんか・・すごいな」
「俺も聞いた時はそう思った。で、冒険者がどうやって街を守ってるかと言うと知識、魔法、魔術でらしい」
「知識、魔法、魔術？」
「ミーナちゃんあの木板持ってきてくれる？」
「はい！」
　そう言ってミーナは何枚かの木板を持ってきてこっちに見せるように持ってくれる。
「まず知識。魔物の習性や特性を利用し対応するらしい。個人やチームで共有し基本的に教える事はないそうだ」
　木目には絵が書いてあり将太の話を補完している。
「魔法はイメージ通りの魔法みたいだ。何も無い所から水や炎を出したりするらしい。取得方法はわからんかった」
　ミーナは次の木目を持ってくれている。
　重くないか？てかいる？

「最後は魔術。箱や紙等物に付与してるみたいだ。罠や付与した物を投げるらしい」
絵は誰が書いたか知らないがミーナがウニの様な物を投げている絵が書いてあった。可愛い。
「つまり魔物の専門家って事だろ？」
「ああ。後は未開の場所に行って安全確認したりダンジョンに行ったりしてるらしい」
将太の話が終わりお茶を飲む。ミーナもお疲れ。
「報酬次第だが雇えないかな？」
「報酬って・・通貨あるのか？」
「通貨って何ですか？」
「なさそうだな。通貨は後で説明するね」
「じゃあ物々か・・」
結局冒険者を雇うのが一番みたいだ。
せめて魔物図鑑とかあればいいのになぁ。
その後話し合ったが冒険者がもし立ち寄ったり街に行く機会があれば交渉するで話は纏まった。
それまではギルイットさんに防衛について相談したり冒険者に交渉できる物を探したり作ったりしようと話が決まった。

第二十五話　畑と街

目の前には程よく耕された俺達の畑が見える。
「ようやく完成か」
「ああ。めっちゃ腰痛い」
「夜マッサージしますね」
「ありがとう」
俺達はやっと耕し終えた畑の前で感傷に浸っていた。
まあ、主に耕したのは俺だがな！
クワとか使った事が無かったから、手は豆だらけになるし普段使わない筋肉を使うから毎日筋肉痛だよ！
「で？何を植える？麦？芋？」
「そうだな・・」
耕してる間に考えていた。
麦を植えたい。
小麦なら小麦粉が出来るしイースト菌を手に入れればパンが出来る。
料理に幅が広がるし保存食も作りやすい・・あ。保存食といえばソーセージは作れるよな。
後で将太に頼んでギルイットさんの所に作り方の書いた木板を持っていって貰おう。
「小麦、トウモロコシ、カボチャ、人参、ジャガイモ迷うよな。ミーナはこんなのがあったらいいなとかある？」
「コーラです！」
ミーナが元気いっぱいで答え手くれたのはいいんだが・・てかミーナコーラ好きになったんだね。
「コーラかぁ～流石に無理かな～」
コーラが生える植物とかヤバ過ぎる。・・・ポイント使ったら出るとか無いよな？
「甘いものならサトウキビ？」
「サトウキビならモリスが」

「アレは味が似てるだけだし砂糖にはならないだろ」
「ならポイント次第だが複数育てるか」
「そうだな」
炎天下の中の話し合いの結果、一面ずつ違う種類の作物を育てるで決まった。
内容は優先順位順にサトウキビ、小麦、カボチャ、トウモロコシになった・・といいたいが。
「そういえば収穫間に合うか？」
の一言で時期を鑑みた結果は人参、ししとう、サツマイモ、キャベツになった。
ミーナに聞いた所この地域は四季がある程度あるそうで今を夏と仮定して植える事にする。
具体的には6～7月と考え動く。
「じゃあポイントで交換できるか試すぞ」
えっと・・人参は・・
【人参の種１０粒１ポイント消費で出しますか？】
安い！安いぞ！いや！高い？高いよな!?
つまり育って１０本１ポイントだぞ？
コーラは5ポイントだったのに・・他は？
【サツマイモの挿し穂（７節）１０本１０ポイント消費で出しますか？】
【ししとうの種１０粒１ポイント消費で出しますか？】
【キャベツの種１０粒１ポイント消費で出しますか？】
・・・全部似た様なものか・・
じゃあまず人参にするか。
【人参の種１０粒１ポイント消費で出しますか？】
イエスだ。
【人参の種類はどうしますか？】
・・・・・え？種・・類？

～一方その頃～

クロ達が住むリットベルから一番近くの街【キリング】

【キリング】平地に円状の形に造られており街の周辺には２０メートル程の塔が１０本立っている。

街は人口１０万人程で様々な種族が暮らしている。

【キリング】は元々は小さな村だったが地下には遺跡がありそこから発掘される物を求めて人が集まり街になった。

円状の形は人が集まり増設に次ぐ増設をしたため構造はまるで迷路の様になってしまった。

住民にとっては特に気にすることは無く旅人や新たな移住は住民に道を聞き仲良くなると言う関係を築いていた。

犯罪は殆ど無い、あっても喧嘩、事故ぐらいだ。

国や思想が違う為犯罪という殆ど無い。

硬貨が無いのも影響しているだろう。

親の教育や一族の決まりはあるし街にはルールがある。

もしもこの世界に盗賊や犯罪者が生まれるとすれば硬貨、利子、法律等のシステムが生まれた時だろう。

【キリング】中央に位置する家で街のトップである４０代の片目に傷のある白いワータイガーの【ギル　キリング　ワータイガー】は机に座り、若い部下からある報告を受け悩んでいた。

質素な部屋では【ギル】と報告をした部下が苦い顔をしていた。

「それは本当なのか？」

「はい・・残念ながら本当です」

「・・・・」

ギルは重く溜息をつく。

部下から受けた報告は街の人々にはけして伝えられる内容ではなかった。

「せめて正確な場所がわかれば・・」

「妖精の粉の数がもう無く正確な場所までは・・」

【妖精の粉】というアイテムがある。

金色の粉で探し物や知りたい事を絵や文字で教えてくれるアイテムだ。
遺跡やダンジョンがら極々稀に出土し街の危険察知に使われる。
４年に１度妖精の粉を使い、魔物や災害等の街の危険を調べるのだ。
街には必ず４つはストックし有事の際に使い、何時起きるのか？何が起きるのか？どうすればいいのか？を調べ街を守るのだ。
「どうすればいいんだ・・」
今回の妖精の粉で危険が発覚し調べた。
何時起きるのか？１～９年後
何が起きるのか？南から　　の襲撃
どうすればいいのか？　　のコアの破壊
普段はこんな名前が無い等の事は起きない。
魔物が原因だったら魔物の名前が出て倒し方や逸らし方を教えてくれる。
昔【ジバラシ】という旅をする大亀の魔物が街を潰すという危険が発覚した時は
どうすればいいのか？【ミラチ】の葉を置き逸らす
と出たのでミラチという木を探し出し葉を集め街の周辺に配置し難を逃れた。
しかし・・・
「名前も無い、コアの破壊のみが街を救う手段とは・・」
妖精の粉はもう無い。元々出土頻度が無く数年で４つ集まったらいい方だ。
普段は何も起きないので多めにストックしているがこの数年はジバラシや【リーチ】の襲来でもうストックが無い。
「妖精の粉の出土を待ちますか？」
「・・・それと平行して何かしなければな」
キリング始まって以来の危険が迫っている。
その不安と街を守る責任によりギルの胃がキリキリ痛む。
「コアの破壊という事は魔物だと思われます。魔物でしたら冒険者に

依頼ですか？」
「・・・・」
ギルは考える。
冒険者は魔物やダンジョンのプロだ。だからこそ不明な事等には敏感だ。
このわからない魔物に対してどれほど冒険者の協力をしてくれるか・・・
むしろ教えたら最後、冒険者達はみなを連れて街を捨てると進言してくるかも知れない。
「依頼はダメだ。今すぐ街を捨てようと進言されるだろう。だが冒険者の知識は必要だろう、信用できる者に協力を依頼する」
「信用できる者ですか？」
「ああ。私達は街のみんなに知られない様に街を破棄する準備と妖精の粉を手に入れる為に行動する。協力をしてくれる冒険者には南に言ってもらい名無しの討伐、もしくは情報を仕入れてもらう」
「はい」
「すまないが街のみんなにはギリギリまで内緒にしといてくれ」
「・・・はい」
「冒険者達に依頼を頼む。内容は遺跡未探索エリア発見だ」
「・・・４―Ｓ辺りですか？」
「ああ。そこの開放と出土アイテムの探索だ」
遺跡の多くはまだ未探索エリアだ。
遺跡はダンジョンで魔物も出るし危険が多い。
あまりに深く潜ると冒険者の危険も跳ね上がる為封鎖していたり冒険者に教えていないエリアがいくつかある。
４―Ｓは深くは無いし魔物もそこまでだが探索が後回しなっていたエリアだ。
「最後に冒険者チーム【インブル】【オオリ】【マリアナ】に来てくれるように伝えてくれるか？」
「わかりました」
若い部下が部屋を去りギルは一息つく。

名前の無い魔物なんて初めての事だ。
昔、大爺様から遺跡はクロス様がお造りになられた物で出土されるアイテムもクロス様がお作りになられた物と教えられた。
妖精の粉は今だ私達が知らない魔物の名前も出てくる。
他にも名前やステータスもわかる【鑑定の指輪】等も同じだ。
だが今回は名前が無い。
こんな異常事態に我々はどうすればいいのか？
街を捨てるのは簡単だ。
だがここまで成長した街だ。
人口も多い。もし今魔物から逃げ街を捨てれば多くの死者が出るだろう。
私達の出来る事はもしも街を捨てる時の事を考え避難場所を作る事。
妖精の粉を出来るだけ手に入れ名無しの場所や名無しの弱点等を知り対処する。
秘密裏に冒険者に依頼し名無しの討伐、生態の調査だ。
「さて、忙しくなるな」
ギルは体を伸ばし、いつもの日々にしばしの別れを告げる。

第二十六話　悩み

種・・類？え？人参の種類って・・普通の赤い人参なんだが・・・

【五寸ニンジンの種１０粒１ポイント消費で出しますか？】

五・・寸？なんだそれ？

「なあ、将太？」

「ん？どうした？待ってるんだ、早く出せよ」

将太は種を植える為にしゃがんでスタンバっていた。

「なんか人参の種類聞かれたんだが・・」

「種類？普段売ってる種類は五寸人参だぞ」

「・・・なんでそんな事を知ってるんだ？」

「実家農業ですから」

将太は爽やかな顔でサムズアップした。

流石すぎる。

【五寸ニンジンの種１０粒１ポイント消費で出しますか？】

イエスだ。

気が付くと手に何か持ってる感覚がある。

手を開き確認すると、中には小さな種がこんもりとあった。

「これが人参の種か」

「そうそう、この種だ。種撒きは任せろ」

将太は準備していた如雨露（じょうろ）で人参を植える畑にたっぷり水をやる。

「人参は苗の移植が出来ないから種を畑に直接蒔く。植え付ける前に土にたっぷりと水をやるんだ」

将太は水をやり終えると次にメモリが書いてある棒を持ってきた。

「種を蒔く時は棒などを使って、大体深さ１㎝の蒔き溝を作りって１㎝間隔で植え付ける。条間は２０㎝以上空けて植えるんだ」

「条間ですか？」

将太はミーナを手で呼び土を掘って山と溝になっている所を指差す。

「うん。ミーナちゃんこの掘って凹ましてる所を見てくれ。作物を植えつけた列を条（じょう）、条と条の間隔を条間（じょうかん）って言うんだ」

（へ～勉強になるな～）
　将太はミーナに説明しながら手を動かし器用に指で蒔き溝を作っていく。
「私手伝います！」
「頼むよ」
「待て待て俺もやるよ」
「じゃあ！みんなでやりましょう！」
　ミーナの一言で３人で笑う。
　数分後蒔き溝を作り終え３人で慎重に種を蒔く。
「人参の種はすごく小さいから風で飛ばない様に気を付けてね」
「はい！」
「あ」
「おいクロ！言ってるそばから、あってなんだよ！あって！」
「すまんすまん。今探してるから」
「クロさん。ここです」
「お。ありがとう」
　危ない危ない。貴重な種を無くす所だった。
「種を植えたら土をかぶせるだがが、人参は発芽するのに光が必要だ、種に土を深く被せてると発芽しない事があるからふんわりとかけてくれ」
「えっと、こうですか？」
　ミーナは器用に土を手ですくい種にかぶせる。
「そうそう。うまいよ」
「本当ですか！」
　ミーナは手先が器用でうらやましい。
「芽が出るまでの間はたっぷりと水やりだ」
　３人で如雨露でたっぷりと水をやる。
「最後は芽が出るまで乾かない様に蓋をする」
　そう言って大きな葉っぱを持ってきた。
　３人で葉っぱを広げかぶせる。
「以上！御疲れ様！」

「「お疲れ様でした！」」
数日かけて他の野菜の準備が出来た。
ししとう（獅子唐）は育苗箱という専用の苗を作る箱を使いししとうがある程度育った苗を作り、植え付けをする。
キャベツ（寒玉）は9㎝のポリポットと呼ばれるコップの様な物に植え大きめの苗を作り、植え付けをする。
サツマイモ（安納芋）の挿し苗の植え方は【斜め植え】という3～4節まで畝に差し込んで斜めにする植え付けをする。
細かい事は説明しないが俺達は仲良く準備した。
畑は順調だ。後は・・・
「養蜂、養殖はすばらしいですね、水路や整地は現状難しいですね」
「やっぱりそうですか・・」
今日はギルイットさんと将太の渡した木板の件で話していた。
「後は冒険者の報酬ですね。蜂蜜は大変珍しいのでもし雇うなら十分だと。でもずっとなんて事は難しいかと」
「やっぱり住んで貰わないよダメですかね」
「・・自分で言うのもなんですが小さな村ですから難しいと思いますよ」
ギルイットさんが苦笑いしながらそう答えた。
慣れてないとギルイットさんの苦笑いは怖い。
つまり怖い。
「蜂蜜や特産物があればどうでしょうか？」
「・・それでも難しいと思います。村が森にある事もそうですが多くの人住める環境でなないので」
「村を移動する事は出来ないんですか？」
「移動は出来ます。でも街に行くことは出来ないんです」
「どうしてですか？村の人達の事を考えるなら街に移住する事を考えてもいいのでは？」
「・・・村の皆さんは知らない事ですがクロさんにはお教えしましょう」
ギルイットさんはゆっくりと話始めた。
「私達の祖先は元々は森のもっと奥に住んでいました。そこで聖地を

守っていました」
「聖地ですか？」
　ギルイットさんは辛そうな声で続きを話した。
「はい。森の奥深くに聖地【リットベル】があってリットベルは元々その聖地の名前なんです。リットベルは昔、神クロス様が初めてこの世界に現れた場所でクロス様達神々がいらっしゃる世界に繋がってると言われた場所です」
「え？」
　えっと？それが本当ならマジモンの聖地じゃねぇか。
　それは奪還の為に総力を集めるものじゃないのか？
「えっと・・それって冒険者を集める理由になるのでは？」
「・・祖先が打診した所、断られたそうです。理由はそこまで行く戦力がない事、聖地が本当かどうか確認できなかった事です」
「・・・」
　よく考えたらそうか。魔物に生活圏を奪われ続けたんだ。向こうも向こうで手一杯だろうし、国家が無いから聖地が本当かどうか誰も保証出来ない。
「つまり聖地を取り戻りたいって事ですか？」
「そうです。私達の悲願です。でも村のみんなは知りません。理由は」
「暴走ですか？」
「はい」
　もし村のみんながこの話を知ったらどうする？
　まあ取り戻したいと思うだろう。
　無茶はしないだろうが今までの様な雰囲気や村を捨てる判断が遅れかも知れない。
「シュバルツは知ってるみたいですがね」
「そうなんですか？」
　シュバルツさんは知ってる？何でだろ？俺、あの人は怖いイメージしかない。
「シュバルツは元々旅をしていたと前に話しましたよね？あの旅が聖

地を探すのが目的だったそうです。シュバルツが初めて村に来た時は森の奥からボロボロになってやって来ました。村で治療して村の名前を聞きこの村で住む事になりました」
確かにその話だとシュバルツさんは何か知ってそうだ。まあ何も知らない可能性もあるけどね。
「なぜこの事を俺に教えてくれたんですか？」
すごく疑問だ。なぜ余所者の俺になんかに教えたんだ？
理由がよくわからない。
「それはクロさんが元余所者だからです」
「？」
「クロさん達は不思議な力と知恵があります。もし私達に何かあってもみんなを引っ張っていけます」
何かってなんなんだ？
「なにかって？」
「もしもですよ。昔と違い村にこの事を知っている人は私と妻だけです。もし私達に何かあったら知っている人がいなくなります」
なるほど。つまり伝言役だな。もしくは遺書を持ってくる人か。
「わかりました。もし何かあれば信用できる人に話します」
「ありがとうございます」
この後世間話をしてからギルイットさんの家を出た。
辺りも暗くなりお腹も空いたし早く帰ろう。
帰り道に考える。もしもか・・確かにこの世界だともしもがあるんだよな・・
もし将太やミーナ、ギルイットさん等の村で仲良くしている人達が魔物に殺されたら？
魔物じゃなくても盗賊とかが村を襲ったら？
怖い。
今の幸せの壊されると思うと死ぬほど怖い。
理不尽に奪われたら？許せるか？無理だ。絶対に無理だ。
もしも相手が神でも絶対に復讐するだろう。
「ただいま」

家に入るといい匂いがする。
「お帰り～」
「お帰りなさい！」
リビングでは将太が座っていて俺が帰って来るとミーナが来ていてくれて玄関までわざわざ来てくれた。
「お疲れ様です！ごはんもうすぐ出来ますから待ってて下さい！」
そういうとミーナはピョンピョンと台所に跳ねていった。
～将太サイド～
クロが村長の家から帰ってきた。
なんか暗い顔をしていた。
ミーナちゃんもそれに気付いたのか気を使ってご飯の準備に専念してくれた。
クロが前のテーブルにかける。
なにかあったんだろうな。もしくはクロ特有の考えすぎか。
「お帰り」
「・・ただいま」
「ちょっと待った。いつものお前は俺がお帰りって言うと「ただいま～疲れた～」とか言うだろ？どうしたんだ？」
俺がそう言ったらクロは苦い顔をした。
（あ～クロ特有の考えすぎか・・）
クロはわかりやすいヤツだ。
考えすぎる事が多いから迷うし悩む。
悪い事じゃないんだがクロの場合深みに嵌る。
悪い方に悪い方にと考える。
しかも根が単純だからあっちこっち手を貸して自爆している。
そんな苦労性のアイツを見ていられなかった。
「で、どうしたんだ？おいちゃんに話てみ」
「・・・もしだ。もしも今魔物が来たら？」
でた！もし！クロが悩む時は基本考え過ぎて不安になるんだ。
「逃げる」
「もし、逃げれなかったら？」

「戦う」
「すごく強かったら？」
「・・」
　ああ今回は結構重症だな。
「気にするだけ無駄だな。もしもだろ？そのもしにならない様に俺達がんばってるんだろ？」
「まあそうなんだが・・」
「不安になるのはわかる。今はすごく楽しい。だからすごく不安なんだろ？」
　クロは嫌そうな顔をする。
　そんな顔すんなよ。
「俺お前のそういう所嫌いだわ」
「そうか？俺はクロの考えすぎる所うざいわ」
　二人で苦笑いする。
「次は言い方を考えるわ」
「あんまり悩まない様にするわ」
「そうしろよ」
「ああ」
　元気になったかな？
　でも今回のは長引きそうだな。
　今はミーナちゃんもいるし村の人もいい人ばっかりだしな。
　不安になるのもわかる。
　俺だって不安だしな。
　特に魔物の話を聞いた手前な。
　ミーナちゃんも不安だと思うぞ。
　でもそれを表面に出さない。
　出しても不安を煽るだけだからな。
　クロは・・・クロだしな。
「ミーナちゃん手伝おうか!!」
「大丈夫です！今から運びます！」
　さて食事にするか。お腹減ったし。

第二十七話　兆し

畑仕事が落ち着いてきて数日が経った。
畑は定期的に害虫駆除しつつ間引きして過ごした。
「お～クロ！俺もめっちゃ筋肉付いた」
「マジだ。なんだろ？肉団子？」
「転がるか？」
「やめろ」
気がついたら将太がめっちゃマッチョになってた。
なんでだろう？この世界に来たらマッチョになる。
「まあ、知ってたが」
「は？」
「神様に聞いたんだよ。この世界は魔力に満ちてるから魔力を吸収して急成長するって、言ってなかったけ？」
「言ってねえよ！」
「すまんな。まあいいじゃないか」
良くない。てかすげー身体に悪そうだが身体に問題とか起きないよな？
「クロさ～ん！ショウタさ～ん！準備できました？」
家の外からミーナの声が聞こえる。今日はみんなで狩りに行く日だ。
「今行くよ！ほら行くぞ」
「おう」
準備して外に出る。
将太も今は麻の服に動物の皮靴を履いてる。
俺も同じだが違うのは前の狩りで取った皮を使ったお気に入りのポーチを使ってる。
ちなみに将太は武器を持っていない。俺は前も使った槍だ。
「おはようミーナ。ごめんね。お待たせ」
「ミーナちゃんおはよう。じゃあ行こうか」
「はい！」

３人で並んで待ち合わせの場所に向かう。
大分慣れたがやはりシュールな光景だな。
「今日の狩りって誰が来るんだっけ？」
「えっと・・マキマムさん、タニアさんにスミレさん達です」
「じゃあ今日の狩りは大丈夫だな」
基本的に狩りは獲物に会えるかどうかわからないが不思議とタニアさんと行くと獲物が見つかる。
「じゃあ今日はお肉だな」
「なら鍋に挑戦するか？」
「お！いいね～そろそろ涼しくなってきたし丁度いいな」
俺達は畑を耕しつつ養蜂の巣作りや乾燥の食べ物等の作業もしている。
そこで食べれるキノコを干して出汁にしての鍋に挑戦だ。
問題はポン酢が無いこと。これは重要だ。
ポン酢大好き。ポイントで交換するか・・
「鍋ですか？」
「そうそう。今日は俺達が作るし楽しみにしててよ」
「はい！」
ミーナは気に入るだろうか？
たぶん気に入るだろうな。
何だかんだで俺達の世界の料理を気に入ってくれてる。
「お～い！こっちだ！」
集合場所の広場が見えてきた。
もうみんな集めってるみたいだ。
タニアさんが待ちきれずこっちに手を振って呼んでいる。
槍を持ったインセクトゴブリンのタニアさん。
弓と短槍を持ったオーガリザードマンのマキマムさん。
でその周りにいる１０匹のラビットゴーレム達。
すごい絵図らだ。
「クロ！おっせぇぞ！」
名誉の為に言って置くが遅くない。

この人達が早いだけだ。
「おはようございます。皆さん早すぎません？」
「普通だろ？」
いや早いよ！久しぶりの狩りだからって気合入れすぎじゃないですか？
「みなさんおはようございます！」
「ミーナ！おはよう！」
「スミレちゃんおはよう！」
ミーナは青いラビットゴーレムに挨拶していた。
今話してるのがこの群れのリーダーの【スミレ　ハイリ　ラビットゴーレム】だ。
「？ミーナの群れは？」
「私の群れは今日は畑だよ。今日はクロさんと一緒だよ」
「クロさんね～」
スミレさん。どうして俺を見るんですかね。
聞いた話だがラビット種は群れで行動するらしい。
平均１０匹程の群れで行動しそのリーダーがミーナらしい。
でこの腕を組んで俺を見ている子はミーナと別の群れのリーダーのようだ。
「まあいいわ。クロさん。はじめまして。【スミレ　ハイリ　ラビットゴーレム】よ」
「はじめまして。スミレさん俺は」
「知ってる。クロさんよね？よろしく」
なんで俺を睨むんですか？
「・・・よろしく」
「俺忘れられてるよね？」
「そ、そんな事ないですよ？」
「ミーナちゃん。なんで疑問系なんだ？」
「早く狩りに行こうぜ～」
「準備は出来たか？」

「「はい」」
アレから少し経ちマキマムさんの雷が落ちた。
今俺達は整列し狩りに向かう。
マキマムさん滅茶苦茶怖かったです。
俺達はマキマムさんを先頭に森の奥に進む。
一番後ろがタニアさん真ん中が俺達だ。
スミレさん達は散開し周囲の警戒をしている。
今日の狩りの目標は俺達は魔物が近くに居ないかの確認も兼ねている。
・・・もし魔物が近くに来ていれば村を捨てる可能性がある。
一応武器をポイント交換出来るか試した事がある。
【Ｍ２０３　グレネードランチャーを１５３８５ポイント消費で出しますか？】
ハハハ。頭おかしい。
今俺のポイントは少し増えて１７ポイントだぞ？
武器は無理。諦めた。もっと考えよう。
だがまずやらなくてはならない事がある。それは・・
「・・・・・・」
「・・・・・・・・」
今は休憩中でみんな各々休憩している。
俺達は倒れた丸太に座りマキマムさんタニアさんは辺りの警戒していた。
スミレさん以外のラビットゴーレム達は獣道を通りもう少し先の探索していた。
そしてミーナの横に座っているスミレさん。
「おい。クロ何したんだよ？」ヒソヒソ
「何もしてねぇよ。今日初対面だよ」ヒソヒソ
「ハハハハ・・・」ヒソヒソ
ここまで来る間ずっと俺を睨んでいた。視線って本当にあるんだね。
「・・スミレさん？」

「何よ？」
　めっちゃ睨まれた。俺マジでなんかしたのか？
「えっと・・・俺・・なんかした？」
「ッ!!」
　殺意に近い物を感じ思わず後ずさってしまった。はっきり言ってめっちゃ怖い。
　姿がかわいらしい分怖い。
「・・・・ふん」
　スミレさんは怒って立ち上がりマキマムさんの方へ行ってしまった。
「あ・・・」
「・・・お前マジで覚えないの？あそこまで嫌われるのは相当だぞ？」
　翔太の言う通りだ。なんだ？この街に来てから変な行動はしてないぞ？
「えっと・・クロさん。スミレちゃんちょっと怒りっぽいですけどいい子なんです。嫌わないであげてください」
「ああ」
　嫌いに・・・なれんな。混乱が強い。俺以外に話す時は笑顔だ。
　ちなみに将太には無関心。泣いていいぞ。
「・・・なんだよその目は？」
「いいや何でも無い」
　休憩を終え俺達は先に進む。
　スミレさん曰く今の所森の奥に魔物はいないそうだ。
「ここからは獣の住処だ。注意しろよ」
　マキマムさんはスミレさんと俺の方を見てそう言った。
「ク・・ククク」
　タニアさんがそれを見て笑いを堪えている。タニアさん・・・怒られるよ？
「ショウタさんはもう少し慎重に進んだほうがいい。足音が大きい」
「はい」
「ショウタは足元に注意したほうがいいな。枝や石や土の具合を見な

がら歩けば大分違うぞ。クロは速さだな。慎重になり過ぎって事は無いが俺らに合わすためにもう少し早く進める様にな」
「「はい」」
アドバイスを貰いながら奥に進む。
１０分程歩いた時にスミレさんがマキマムさんの足をタッチする。
「・・・・・」
マキマムさんが手で止まれと合図する。
「・・・・・」
マキマムさんとスミレさんがハンドアクションで会話する。
なんだろ焦ってる様に見える。まさか魔物？
「・・・・」
ミーナとタニアさんも会話に参加し慌ただしい雰囲気になった。
（何があったんだ？）
良くない事が起きてる事は確実だった。
スミレさんが森の奥に走り出しミーナは来た道を戻っていった。
マキマムさん達がこちらに振り向いた。
「クロさんショウタさん村へ戻って下さい。タニアが送ります」
「行くぞ」
タニアさんが武器を持ちながら来た道を戻ろうとする。
「えっとマキマムさん何が」
「おい。いいから行くぞ。質問は後でいいだろ」
「いい子だ。行くぞ。クロは後ろだ」
「タニア頼んだぞ」
「ああ」
なんだわからないまま俺と将太はタニアさんと村へ戻る。
多分異常事態があってスミレさんとマキマムさんが現場に向かい、ミーナが村へ向かったんだろう。
「何があったんですか？」
翔太に先に言われた。
「・・見た事無い奴らが森を進んでるらしい」
「見た事無い奴らですか？他の村の人達とかでは無く？」

「ああ。この辺の村の連中じゃあ無く多分街の連中だと思う」
「街ですか？街なら問題ないんじゃあ？」
「ただの街の奴ならな」
ただの？他に何かあるのか？
「とりあえずもう少し早く戻るぞ」
そう言ってタニアさんはスピードを上げた。

クロさんとショウタさんをタニアに村へ送る様に指示し、スミレに追い着いた。
スミレが私に気づき合図をする。
スミレの群れが見つけたのは見た事無い人達だ。
街の連中だろうな。
遠くから確認すると確かに見た事無い奴らだ。
５人組で装備は鉄。
リザードマンにオーク、オークインセクト、フロッグマン、ゴーレムか・・・
冒険者だな。問題は何の用だ？
街の奴らはこの森に用は無いはずだ。
言ってて悲しくなるがこの森の奥に魔物がいるし街の奴らは別の森で事足りてるからな。
魔物が目的なら装備が貧弱過ぎる。探索？ならまだわかるが確定では無いな。
どうするか・・・目的が知りたい。最悪人攫いの可能性がある。
ッツ。目があった！・・・中々腕がいい。
さてどうする？幸いスミレは見つかっていないだろう。
目で合図をすれば相手に知られるから足でスミレに合図する。
「・・・・」
スミレはゆっくりとこの場所を離れる。
これで最悪俺が殺されてもスミレが情報を持って帰る。
目があった大剣を持ったリザードマンの男が先頭に出てきて大剣を仲間に渡し、大きな声を上げた。

「私達はキリングから来た冒険者チームの【オオリ】のリーダー【カスバル　ド　リザードマン】と言う者だ。すまないがこの近くの村の者か？良ければ話がしたいのだが」
　やはり冒険者だったか。
　まずは武器を置き立ち上がる。大体距離は３０メートル程で逃げれるか微妙な距離だな。
「私はリットベルのマキマム　ガーリック　オーガリザードマンだ。カスバルさん達は一体何しに来たんだ？」
「理由はすまないがリットベルの村長にのみ伝えたい。なんで内密にしたい。リットベルの村長にキリングのギル　キリング　ワータイガーから手紙を預かっているとお伝えしてもらいたい」
　理由は俺らには秘密で村長に伝えてい事か・・・人攫いの可能性はまだあるがこう主張されてはギルイットさんに伝えるしか無いな。

第二十八話

村に戻った俺達は重苦しい雰囲気の中、自分の家で待機していた。
村の会議に出ていてミーナはいない。
「・・・どうなるんだろうな」
「わからん」
翔太の心配もわかる。正直言って結構堪えてる。
今までなんだかんだこの世界の事を舐めてた。
今回の異常事態で雰囲気が元の世界と違った。
「・・・・帰りたくなったか？」
「どうだろ？」
元の世界に帰りたいか・・・わからない。
どっちにもいい所と悪い所がある。
元の世界は・・なんと言うか息苦しい。
見えないスケジュールに動かされているというか見えない何かに操られているというか・・・
例えば他人の目だな。奇行まで言わないが人と違う行動するだけで仲間外れにされる。
自分を受け入れて貰えない
自分では受け入れて貰えないから自分を偽る。
みんなが偽っているから自分も偽る。
偽らないと仲間じゃない。
そんな世界だったな・・・
こっちの世界は命の危険がある。
でも息苦しく無い。
色々な種族がいるせいか自分を偽る必要が無い。
話をしていて楽だった。話をしていて楽しかった。
俺が考え事をしていたら将太が立ち上がった。
「どうした？」
「とりあえずさ。ミーナちゃんがいつ戻ってきてもいいように御飯の用意しておこうぜ」

「・・・お前本当にいいやつだよな」
「そうか？」
お前が友達で良かったよ。

ギルイットさんの了解を得たのでカスバル達オオリを村へ案内する。
「村長が会うそうだ。村へ案内しよう」
「ありがとう。武器はどうしたらいい？」
「・・そうだな村へ付いたら念の為預からしてもらう」
「わかった」
勘だがコイツらは悪い奴らじゃあなさそうだ。
だが念のため村へ向かう途中、スミレにカスバル達を観察して貰う。
もし敵対する可能性があれば合図を出してもらう。
「・・・・・・・」
おかしい。警戒しすぎだ。
俺に気づいた腕のいい冒険者だ。
カスバル達ぐらいの冒険者なら森の中間ぐらいでここまで警戒するのか？
俺に警戒するのはわかる。
だがカスバル達は異常に周りを警戒している。
なんだ？コイツらは何をこんなに警戒しているんだ？

「・・・・」
森を探索しながら進んで2日、なんとかこの森の村の村長と話す事が出来そうだ。
キリングの長のギルさんからの依頼でこの森を進んできたが今の所兆候は無い。
・・・本当に街を滅ぼすモノがいるのか？
魔物もいない普通の森だ。
この森は大まかに4層に分かれているらしい。

一番端の安全な外側部分。
二番目の獣の住処。
三番目の魔物の住処。
四番目の森の村の人達曰く聖地と呼ばれる場所だ。
聖地か・・・俺の故郷の【ギジィル平原】にも聖地と呼ばれる場所があった。
もしそこに原因があれば厄介だな。
聖地と呼ばれる場所は大抵進入不可だ。
部族によっては禁句（タブー）となっている。
やれやれ、話を聞いてしまった以上受けざる負えない仕事だったが思っていた内容よりきつそうだ。
当分街に帰れそうに無いな。ユキナに怒られそうだ。
依頼を受けた事に後悔は無いが報酬の上乗せでユキナへの土産でも貰わなと割にあわんな。
数時間歩いた頃、開けた場所に出た。
木材の柵に木造の建物の村だ。
・・・普通だ。思っていたより普通の村だ。
村の門には数名の門番がいた。
そのうちの一体の緑色のゴーレムが前に出てきた。
「話は聞いている。武器は預からして貰う」
「ああ。よろしく頼む」
俺達の武器を預けマキマムさんについて行った。
村長の家に付き中に案内される。
家には俺だけが入り仲間は念のため家の外で待っていて貰う事になった。
荷物はギルさんから受け取った手紙だけを持ち村長の家に入る。
テーブルにはオークゴブリンが座っており、私に気付くと立ち上がり空いている席へ案内してくれる。
「初めまして。リットベルの村長のギルイット　ローズ　オークゴブリンです」
「私はキリングから来た冒険者チームのオオリのリーダーカスバル

ド　リザードマンです。早速ですがこちらをお受け取り下さい」
　私は持っていた手紙をテーブルの受けに丁寧に置く。
「受け取らして頂きます」
　ギルイットさんはそう言って手紙を取り丁寧に開け中身を読み始める。
「・・・これは・・・・」
　ギルイットさんは手紙を読んだたとそう呟き何度も手紙を見直している。
（だろうな）
　俺達も話を聞いた時は慌てた。
　奥から青い鱗が特徴の美人のブルーリザードマンが飲み物を持って出てきた。
「よければどうぞ」
「ありがとうございます」
　礼をいい頂く事にする。
　うまい、ここ数時間なのも口にしていなかったから口が喜んでいるのがわかる。
　読み終えたのかギルイットさんがため息を吐き手紙を丁寧に元に戻し机に置く。
「他にこの内容を知っている人はいますか？」
「私のチームとキリング上層部、後は他の村へ向かった冒険者達です」
「なるほど。・・・わかりました。リットベルは協力を惜しみません。必要な物はできる限り揃えます」
「ありがとうございます」
　よかった。これでこの村を拠点に調べる事が出来る。
　拠点があると無いとじゃあ段違いだからな。
「・・・・一つお願いがあります」
「なんでしょうか？」
「カスバルさん達が優秀な冒険者でしょう。その知識や経験を教えて頂けませんか？」
「・・・・」

冒険者とって知識、経験等は財産だ。
それの為に命を張り、そのせいで死ぬ。
食料や物は使えば無くなる。しかし知識、経験は無くならない。
それを教えてくれと？
「それは」
「無論それなりの報酬は用意しましょう。まずは教える相手を見てもらえませんか？」
「教える相手？」
どういう事だ？ギルイットさんが知りたいのではないのか？
「はい。村にいる若者に教えて貰いたいのです。もちろん空いている時間、教えれるモノだけで結構です。報酬はハチミツ１０大瓶、干し肉１００キロでどうでしょう？」
・・・破格だ。はっきり言って今回の依頼がなければ飛びつきたい。
ハチミツは貴重で色々な物と交換しやすい。
交換に使え薬にもなるし腐らない。
それが知識や経験を教えるだけで大瓶で１０コも手に入る。
「・・・仲間と相談してもいいですか？」
「はい。もちろんです」
まずは仲間と相談しよう。それから教える相手にあってから決めよう。
・・・別に長期で離れるから娘のご機嫌取りにハチミツが欲しかったわけではない。

「で何作るよ？」
俺と将太は台所でミーナがいつ帰ってきていいように御飯を作ろうとしていた。
「そうだな～クロシェフ。今日の食材は？」
「今日はですね～」
冷蔵庫と書かれた箱を確認する。
中には氷がたくさん入っていて食材を腐りにくくしている。

「シメジ、自然薯、芋（異世界固有種）、ネギ（以下略）、人参、モリス（サトウキビ）です」
「・・・・なに出来るの？」
「野菜炒め？もしくは芋焼き？」
「いつもと一緒じゃねぇか！」
　知ってるてか基本的な野菜はある程度これだしな。後は魔馬魚や肉が入るだけだしな。
「!?」
「どうした？」
「凄い事に気づいた。ちょっと試すわ」
　もし、もしもだ。ポイントでアレを交換できればなんでも出来るのでは？
【鶏の卵（有精卵）を1パック9ポイントで交換しますか？】
　・・・・よっしゃあああああ!!!
「将太!!」
「お、おう。どうした？」
「鶏だ！いや！ひよこの育て方を調べてくれ！」
「ひよこ？」
「ああ！」
　もしこれで鶏が増えるなら卵が食べれる！
「えっと・・人肌に加熱し続け、夜も数時間毎に卵の向きを変えるらしい。大体約3週間程で孵るみたい」
「ほう。頑張れば卵食い放題か・・・」
　じゃあ交換で。
　残りポイントはこれで8ポイントか・・・
「決断早くないか!?」
　いいんだよ。卵大好き。
「で料理はどうするだ？」
「・・・」
「さらに誰が温めるんだ？」
　俺じゃない誰かがいいなぁ～

「アホやってないで始めるか」
「はいな」
交換した卵をまずは食べられない様に印をして別の所に置いておく。
まずは芋だな。皮を剥き０．５ｍｍ程の大きさに切る。
後はトマト、ネギ、シメジを切った芋の上に乗るぐらいの大きさに切る。
火を起こしフライパンの上にまず芋を並べ温める。
熱し過ぎると芋が焦げるから程々（弱火）で中まで火を入れる。
ある程度中まで火を入れたらフライパンから出し、余熱でしっかり火入れる。
その後ネギ、シメジを塩で味付けし炒める。
ミーナが帰ってきたら芋を温め直しその上にトマトや炒めた野菜を乗せて食べる。
「チーズやマヨが欲しいな」
「わかる。牛だな牛」
「ヤギでもいいな」
【ヤギを６９２３ポイントで交換しますか？】
しねぇよ。出来ねぇし。